第２表　ＡⅢ区のＴピット法量一覧

単位はｍ

番号	遺構番号	上面長	底面長	上面幅	底面幅	深	番号	遺構番号	上面長	底面長	上面幅	底面幅	深
1	ＳＫＴ16	4.25	4.55	0.58	0.17	1.13	8	ＳＫＴ43	3.50	3.55	0.37	0.13	0.80
2	ＳＫＴ27	2.40	2.74	0.47	0.14	1.03	9	ＳＫＴ47	3.40	3.43	0.48	0.16	1.25
3	ＳＫＴ36	3.16	3.27	0.47	0.14	1.26	10	ＳＫＴ48	3.08	2.85	0.40	0.15	0.92
4	ＳＫＴ38	4.21	4.61	0.40	0.13	1.19	11	ＳＫＴ49	3.28	3.20	0.45	0.15	1.03
5	ＳＫＴ39	2.77	2.96	0.55	0.25	0.92	12	ＳＫＴ50	3.00	3.32	0.46	0.19	1.24
6	ＳＫＴ41	3.09	3.15	0.45	0.27	1.13	13	ＳＫＴ51	3.28	3.42	0.35	0.15	0.57
7	ＳＫＴ42	2.70	2.78	0.48	0.17	0.87	14	ＳＫＴ52	3.04	2.83	0.18	0.12	0.70

い。平面形はすべて、長さに比べて幅が狭い長円形をなす。深さは0.57ｍ～1.26ｍであるが、これはすべて第Ⅶ層地山上面からの値であり、本来の深さはこれに20㎝前後を加えた0.8～1.5ｍほどであったと考えられる。

14基のＴピットを、その規模などからいくつかの項目についてグルーピングすると、以下のようになる。なお、グルーピングの際の基準とした数値はあくまでも相対的なものであり、特別な意味は持っていない。上面長が３ｍ未満のもの…ＳＫＴ27・39・42、３～3.5ｍのもの…ＳＫＴ36・41・43・47・48・49・50・51・52、4.2ｍ以上のもの…ＳＫＴ16・38。底面長が３ｍ未満のもの…ＳＫＴ27・39・42・48・52、3.15～3.55ｍのもの…ＳＫＴ36・41・43・47・49・50・51、4.5ｍ以上のもの…ＳＫＴ16・38。地山上面からの深さが１ｍ未満のもの…ＳＫＴ39・42・43・48・51・52、１ｍ以上のもの…ＳＫＴ16・27・36・38・41・47・49・50。掘り方の断面図をみると、上面長よりも底面長の短いものとその逆のものがある。これをいま上面長を１とした場合の底面長を求めてグルーピングすると、底面長が１以下のもの（上面長よりも底面長が短いもの）…ＳＫＴ48・49・52、1.01～1.04のもの（底面長が上面長よりも大きいが、それほど差のないもの）…ＳＫＴ36・41・42・43・47・51、1.07以上のもの（底面に近づくにつれて広がり、上面長よりも底面長がかなり大きくなるもの）…ＳＫＴ16・27・38・50、となる。また、14基のＴピットの長軸方向と地山上面での等高線のあり方をみると、ＳＫＴ16・38・43が等高線に略平行、27が略直交、その他は両者の中間的な形である。

以上のことと各Ｔピットの位置関係などから、相互に関連の濃いＴピット群（これをＴピット列とする）を見いだすことができる。それらは、調査区北東部のＳＫＴ47・49・36、中央部のＳＫＴ48・51、南東部のＳＫＴ16・38であり、これらはそれぞれほぼ同時に計画的に構築されたものと考えられる。また、疑問符は付くもののＳＫＴ50・41・52、ＳＫＴ27・39・42もその可能性がある。なお、覆土の状況は以下の４種類に分けられるが、この種類と上述のＴピッ

ト列との関連は薄いようである。覆土中（底面から10cm以上のところ）に地山崩落土のあるもの…ＳＫＴ16・27・36・41・42・48・49・50、地山崩落土のないもの…ＳＫＴ38・39・43・47、人為的に埋め戻しているもの…ＳＫＴ51・52。

14基のＴピット覆土中から、遺物は全く出土していないので、これらが構築された時期は不明であるが、ＳＫＴ16は中央部上面が縄文時代晩期の所産と考えられる焼土で覆われている。このことと、14基のＴピットがＣ・ＡⅣ区及びＳ57調査区のＴピット群と関連を持つと考えられるところから、少なくとも縄文時代晩期よりは古い時期に構築されたものとすることができよう。

(2)　土坑　（第157図・図版61）

土坑は、調査区南部から３基検出された。

ＳＫ34

ＫＦ46グリッド、第Ⅵ層上面で確認された。平面形は径1.4～1.45ｍの円形を呈し、深さ25cmである。底面は平坦でしまっており、壁は垂直である。覆土は１～３層ともに赤黒色土で軟かいが、地山土粒子の混入程度で分層できたものである。遺物は出土していない。

ＳＫ40

ＫＦ46グリッド、第Ⅵ層上面で確認された。平面形は長径1.15ｍ、短径0.8ｍの楕円形を呈し、深さ約50cmである。底面はしまって平坦であるが、壁は一部乱れたりオーバーハングしたりしている。覆土は黒褐色土～黒色土を主体とし、比較的軟い。遺物は出土しなかった。

ＳＫ23

ＫＢ50・51グリッド第Ⅵ層上面で確認された。平面径は径0.65～0.8ｍの不整形を呈するが、垂直に掘り込まれておらず、坑全体が南西方向に斜めに曲がっている。確認面から底面までの深さは垂直距離で1.3ｍ、斜距離で1.4ｍである。木の根の腐触した痕かとも考えられたが、壁面はしっかりしている。覆土は黒色土を主体とした自然堆積土であった。遺物は出土していない。

2　遺構外出土の遺物

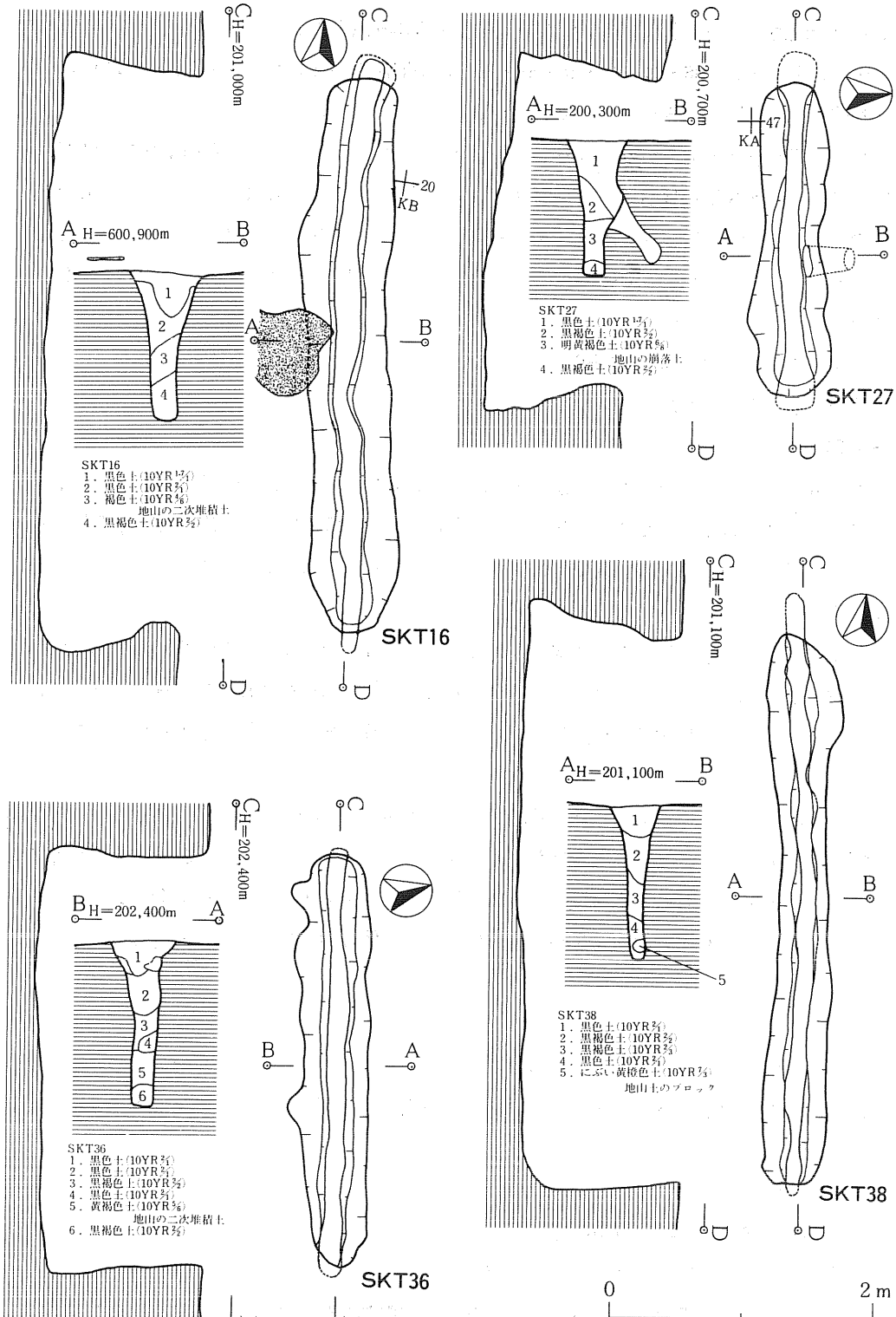
ＡⅢ区の遺構外から出土した遺物は土器・石器ともにそれほど多くはない。ここでは、土器を縄文時代前期・後期・晩期の３時期に分け、時期毎に峻別することのできなかった石器はまとめて記述する。

(1)　土器

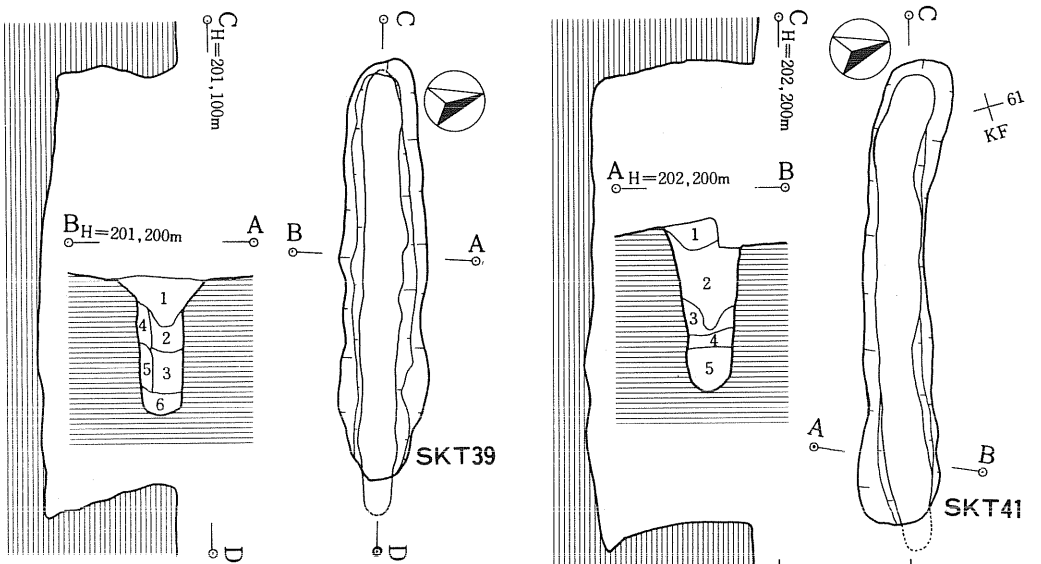
①　前期の土器　（第164図33～45）

前期の土器は、調査区北西～北部にかけて散発的に出土した。

33・34・35は同一個体で、33・34が口縁部、35が胴部の破片である。うまく接合しないが、



第154図　SKT 16・27・36・38Tピット



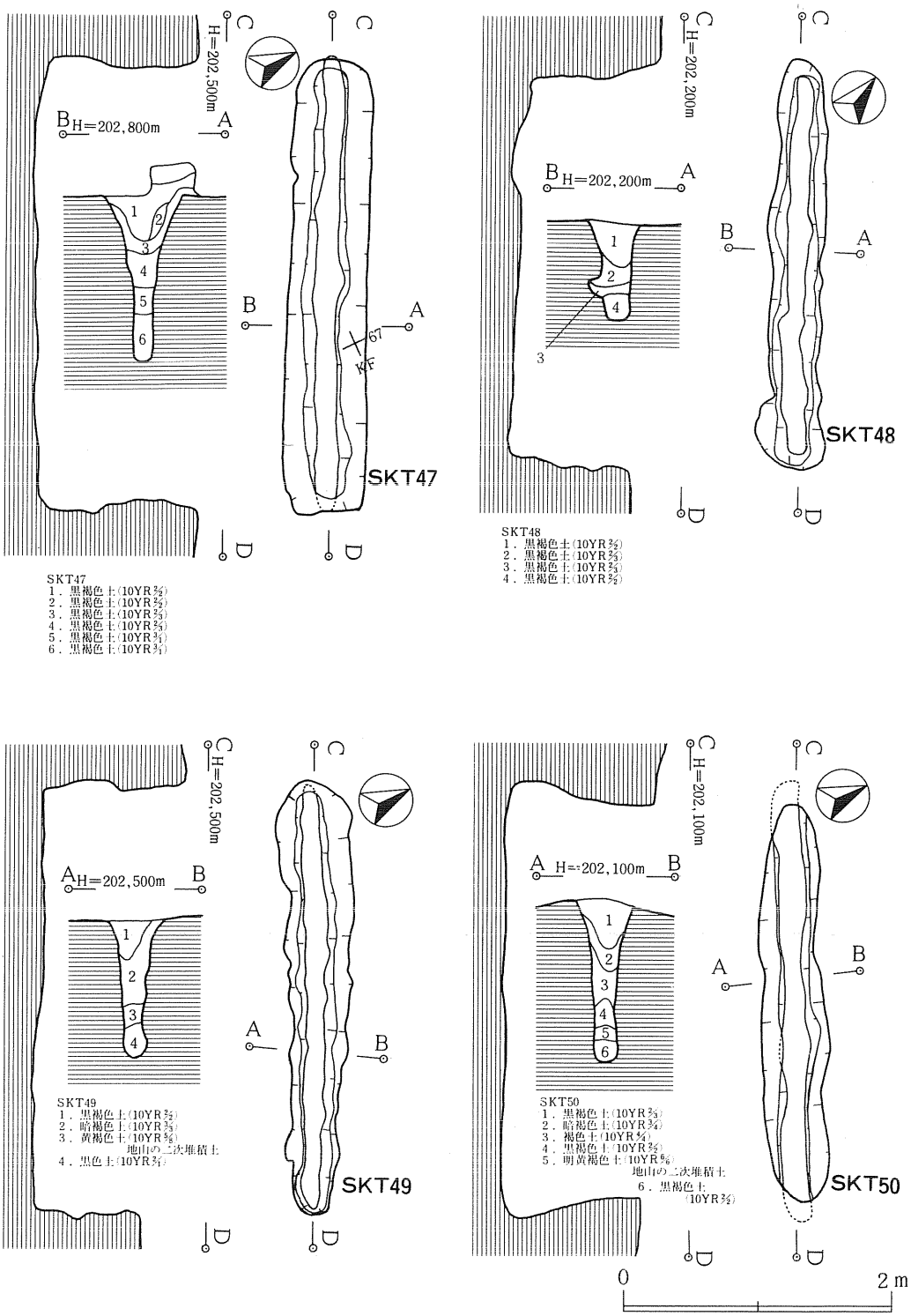
SKT39
1．黒色土(10YR3/1)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．褐色土(10YR4/4)
4．黒褐色土(10YR3/3)
5．褐色土(10YR4/6)
6．黒褐色土(10YR3/2)

SKT41
1．黒色土(10YR3/1)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．黒褐色土(10YR3/3)
4．黄褐色土(10YR4/6)
地山の二次堆積土
5．黒褐色土(10YR3/2)

SKT42
1．黒色土(10YR1.7/1)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．橙色土(7.5YR6/8)
崩落土
4．黄橙色土(10YR6/6)
地山の崩落土
5．黒色土(10YR2/1)

SKT43
1．黒色土(10YR3/1)
2．黒色土(10YR2/1)
3．黒色土(10YR2/1)

第155図　SKT 39・41・42・43Tピット



SKT47
1．黒褐色土(10YR 2/2)
2．黒褐色土(10YR 2/2)
3．黒褐色土(10YR 2/3)
4．黒褐色土(10YR 2/3)
5．黒褐色土(10YR 3/1)
6．黒褐色土(10YR 3/1)

SKT48
1．黒褐色土(10YR 2/2)
2．黒褐色土(10YR 2/3)
3．黒褐色土(10YR 2/3)
4．黒褐色土(10YR 2/2)

SKT49
1．黒褐色土(10YR 2/2)
2．暗褐色土(10YR 3/3)
3．黄褐色土(10YR 5/6)
地山の二次堆積土
4．黒色土(10YR 2/1)

SKT50
1．黒褐色土(10YR 2/3)
2．暗褐色土(10YR 3/4)
3．褐色土(10YR 5/4)
4．黒褐色土(10YR 2/2)
5．明黄褐色土(10YR 6/6)
地山の二次堆積土
6．黒褐色土
(10YR 3/2)

第156図　SKT 47・48・49・50Tピット

口径30cm前後で、高さ50cm以上あり口縁部が外反する平口縁の深鉢形土器である。口縁部には不整の綾絡文が施され、その下端には太い隆帯が１本付されている。隆帯上には指頭による刺突列が加えられており、先端に丸味を持つ隆帯の押圧された部分は少し低くなっている。口唇部には、縄文が回転施文されており、やや幅のある平坦面をなす。胴部には、複節の斜縄文の中に不整の綾絡文帯が施されている。この綾絡文帯は、間隔を置いて２～３段付されたものと考えられる。胎土中には繊維と砂粒を多く含み、焼成は良好であるが、内面の調整はあまりていねいでない。36は、口径20cm未満、高さも35cm未満と考えられる深鉢形土器の口縁部破片である。ゆるい波状口縁をなす。地文のない口縁部には、縄文の側面圧痕文が横位に４条付され、これに波頂部の両側から側面圧痕文を垂下させて格子目風の文様を作出している。口縁部下端には、指頭による刺突列が施された比較的太い隆帯が付されている。胎土その他は33～35に似ているが、それよりも薄手である。37は、外縁が強く張り出した底部である。器外面には粗い斜縄文が施されている。胎土には繊維・砂粒を多く含み、焼成良好である。器内面の調整が粗く、ほとんどみがかれていないことなどから、33～36と同期のものと考えられる。底面に縄文はなく仕上げも粗いケズリとなでである。38～44は、胎土に繊維を多く含むが薄手で、細長い胴部を持つ深鉢形土器の破片である。38・39・42・43の胴部文様は撚糸文で、38は不整の綾絡文帯が中位に、43は斜縄文が下端に施されている。44の胴部文様は多軸絡条体である。45は、非常に細かいがていねいに綯われた原体を巻き付けた撚糸の縦位回転文で、胎土には繊維を含まない。後期の可能性もある。

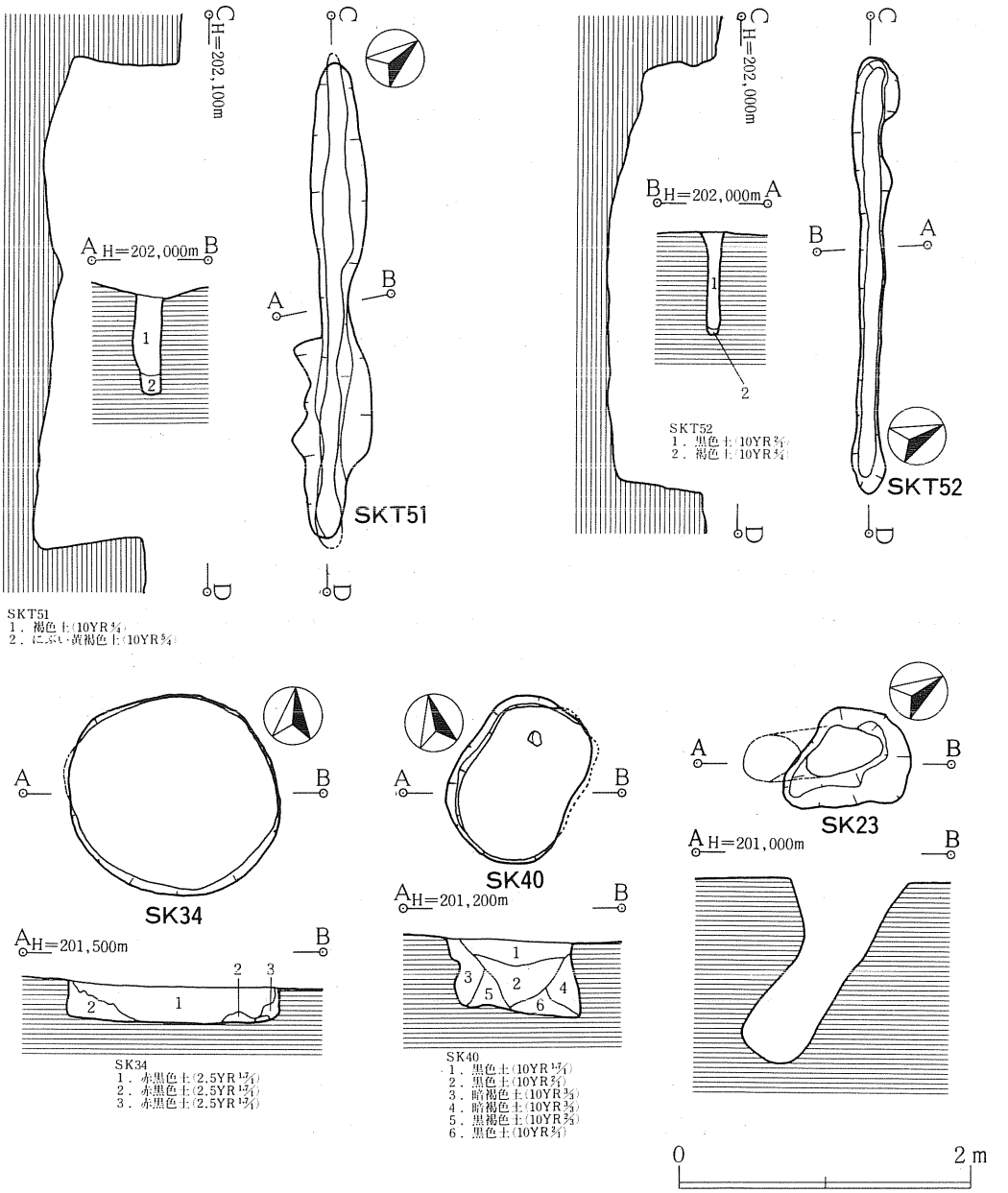
②　後期の土器　（第164図46～165図60）

後期の土器は、調査区北～北西部を除いてほぼ全面から散発的に出土している。48～56が後期前葉の、56・57が同中葉のものである。48は、小型壺形土器の胴部上半の破片で、他は、波状口縁をなす深鉢～鉢形土器の破片である。50と51、52～54、56と57がそれぞれ同一個体である。58・59はこの時期の破片を利用した円盤状土製品で、46・60は網代痕のある底部である。47は、口縁端部がわずかに肥厚し、口唇部が平坦な面をなす粗製の深鉢形土器である。

③　晩期の土器　（第159図１～163図32、165図61～166図95）

晩期の土器は、調査区中央部～北西部にかけて出土しており、特にＫＩ56・57グリッドのＳＮ60周辺に多い。

第158図は、ＳＮ60とその周辺から出土している晩期後葉の土器の平面分布図である。ＳＮ60は、他の焼土遺構と同様に第４層中で確認されており、周囲の土器群もほぼ同一レベルから出土している。他の焼土遺構が、赤化した焼土が堆積しているというよりも、焼土粒子が黒色土中にやや集中しているという状況にあったのに対し、ＳＮ60は、赤化した焼土が２～３cmの厚さで存在し、その範囲が広い。このことから、住居跡の可能性もあるとして周囲を精査した



第157図　SKT 51・52Tピット、SK 34・40・23土坑

が、柱穴や床面は検出できなかったものである。

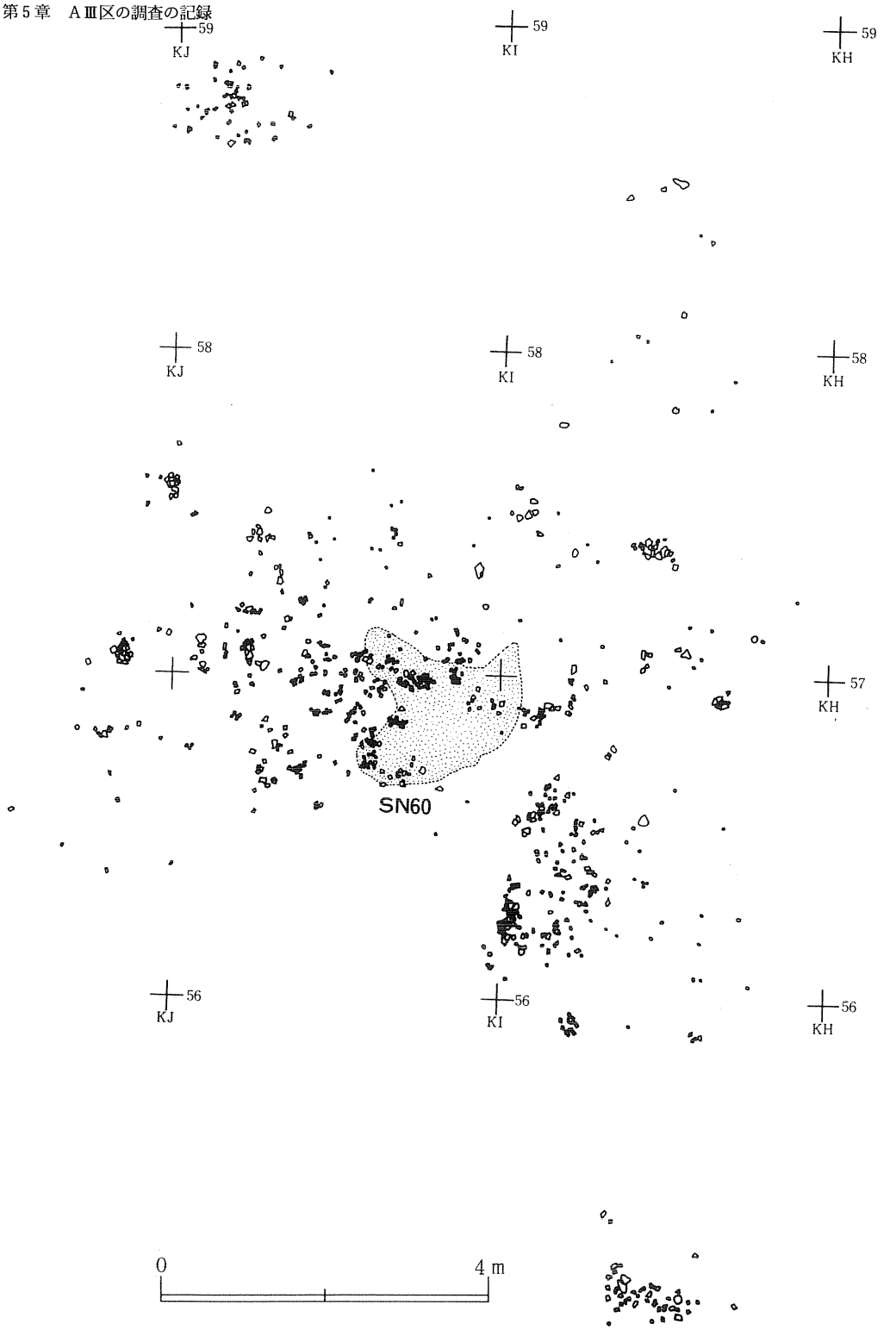
１～３は晩期前葉の土器で、他は同後葉の土器である。後葉の土器は、４・５・61が台付浅鉢、62・63は同一個体の鉢、６・７・８は壺、９～15と77～85は台付鉢、16～21と73～76は小型深鉢、22は中～大型の半精製深鉢、26～32と91～95は中～大型の粗製深鉢である。なお、これらの土器の、はりま館遺跡内における編年上の位置や、他の調査区出土の土器との関連等については第８章第４節を参照されたい。

(2)　石器　（第167・168・169図）

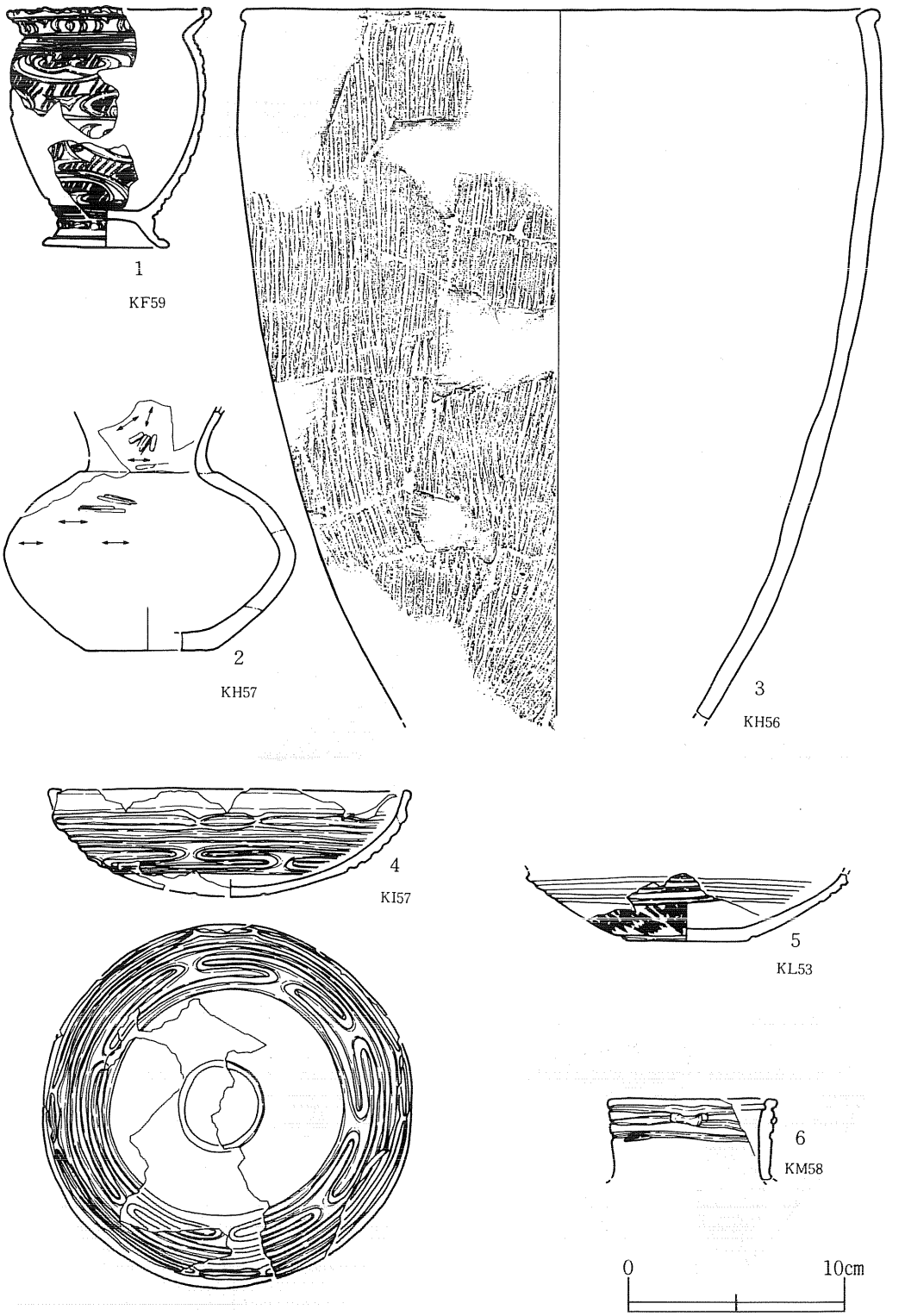
ＡⅢ区からは少量の石器しか出土していないが、縄文時代のどの時期に属するか、明確に判断できるものは少ない。

石鏃（Ｓ１・２）は、２点しか出土していない。石匙（Ｓ３～５）は、全部で５点出土している。Ｓ３は、ＡＩ・Ⅱ区出土の第97図Ｓ147と同じ製作技法・工程を経て作られており、Ｓ147よりも押圧剥離が整然と施されている。前期のものと思われる。削器（Ｓ６～８）は、全部で15点出土している。Ｓ９は、３点出土したノッチのある石器のうちの１点。Ｓ10は、１点だけ出土した磨製石斧で完形品である。緑色凝灰岩製。半円状扁平打製石器（Ｓ11・12）は３点出土している。Ｓ12は、硬質の凝灰岩製で、上下の側面を除く全面が磨かれており、特に抉り部分は滑らかである。主な使用面と考えられる刃部が上下にあり、よくすられている。くぼみ石（Ｓ13～15）は、計13点出土している。

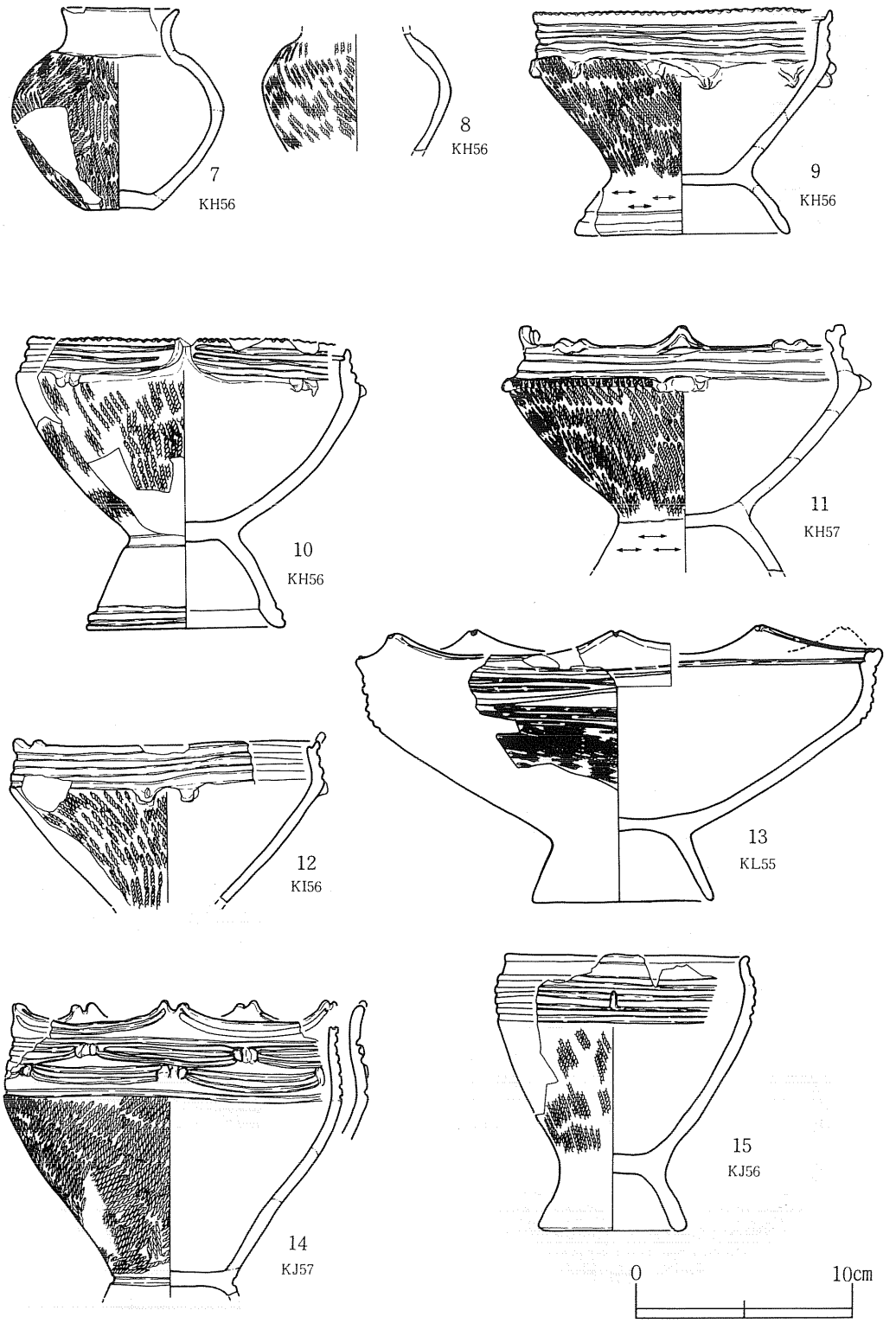
第169図Ｓ16・17は、ＳＮ60の南西方向約９ｍのＫＪ56グリッドの第４層中で、図版61のような状況で出土した。Ｓ17が先端部を西にした略東西方向、Ｓ16は２つに折れて頭部側がＳ17と直角に、先端側が約45°に交わるような状況でＳ17の北側から出土している。これ以外に、周囲にはこれに関連を持つような焼土や柱穴、遺物などは存在しなかった。Ｓ16は、粘板岩製の石刀で、頭部が若干膨らみ、先端は尖らない。刃部央部の断面形は、両側縁の違いはあまりないが、僅かに内反りである。頭部の膨らみ部から約11cmまでの両側縁が、幅の狭い平坦面となっており、明瞭ではないものの、刃まちを作っている。Ｓ17は、頭部側を欠くが石剣である。器中央部の断面形が円形を呈するため、石棒とすることもできるが、先端部では扁平になっており、石剣とした。全面が磨かれる前の敲打痕が、白い斑点となって残っている。片岩質の石材を原材としている。



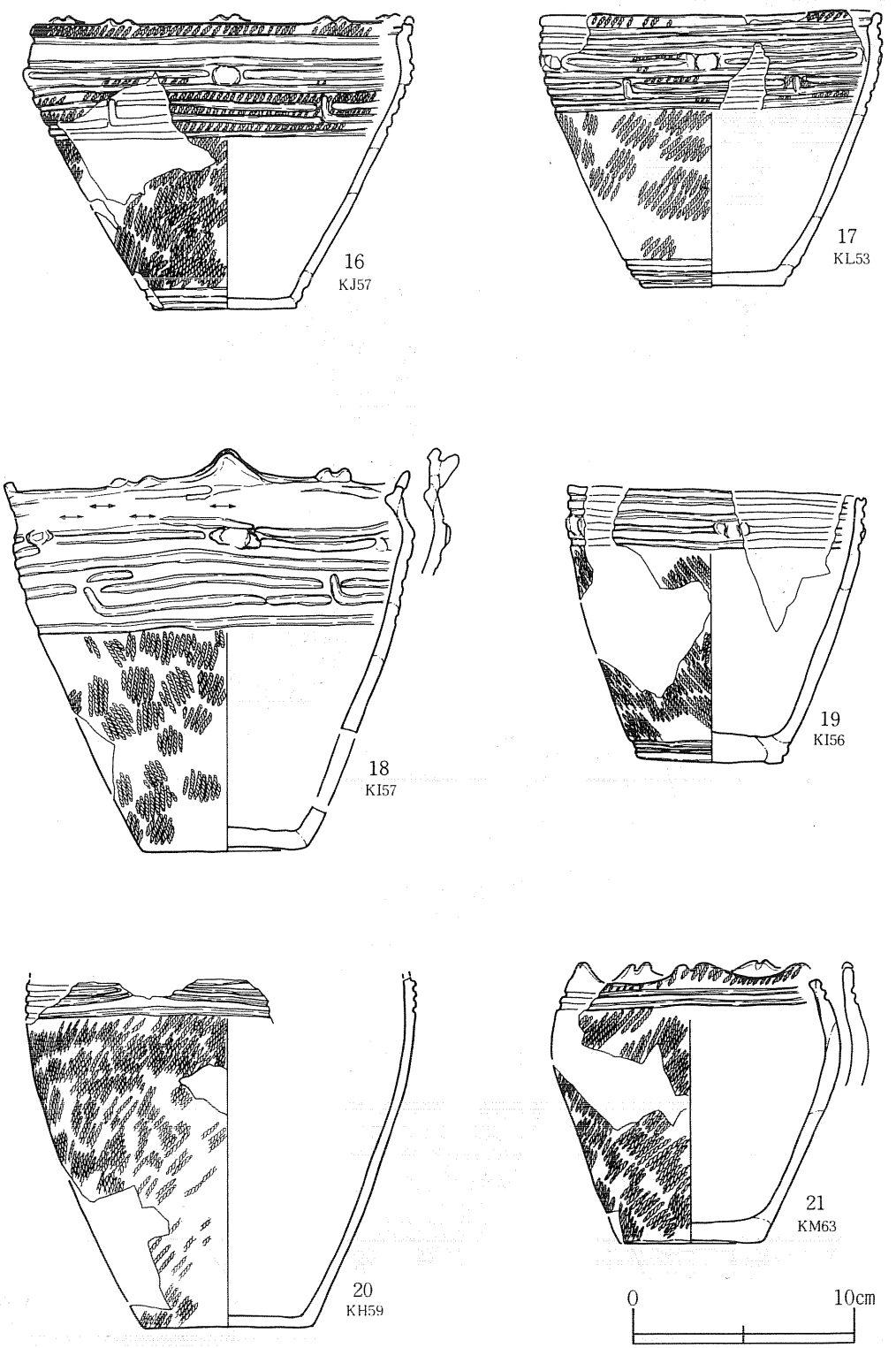
第158図　SN 60周辺の土器出土状況



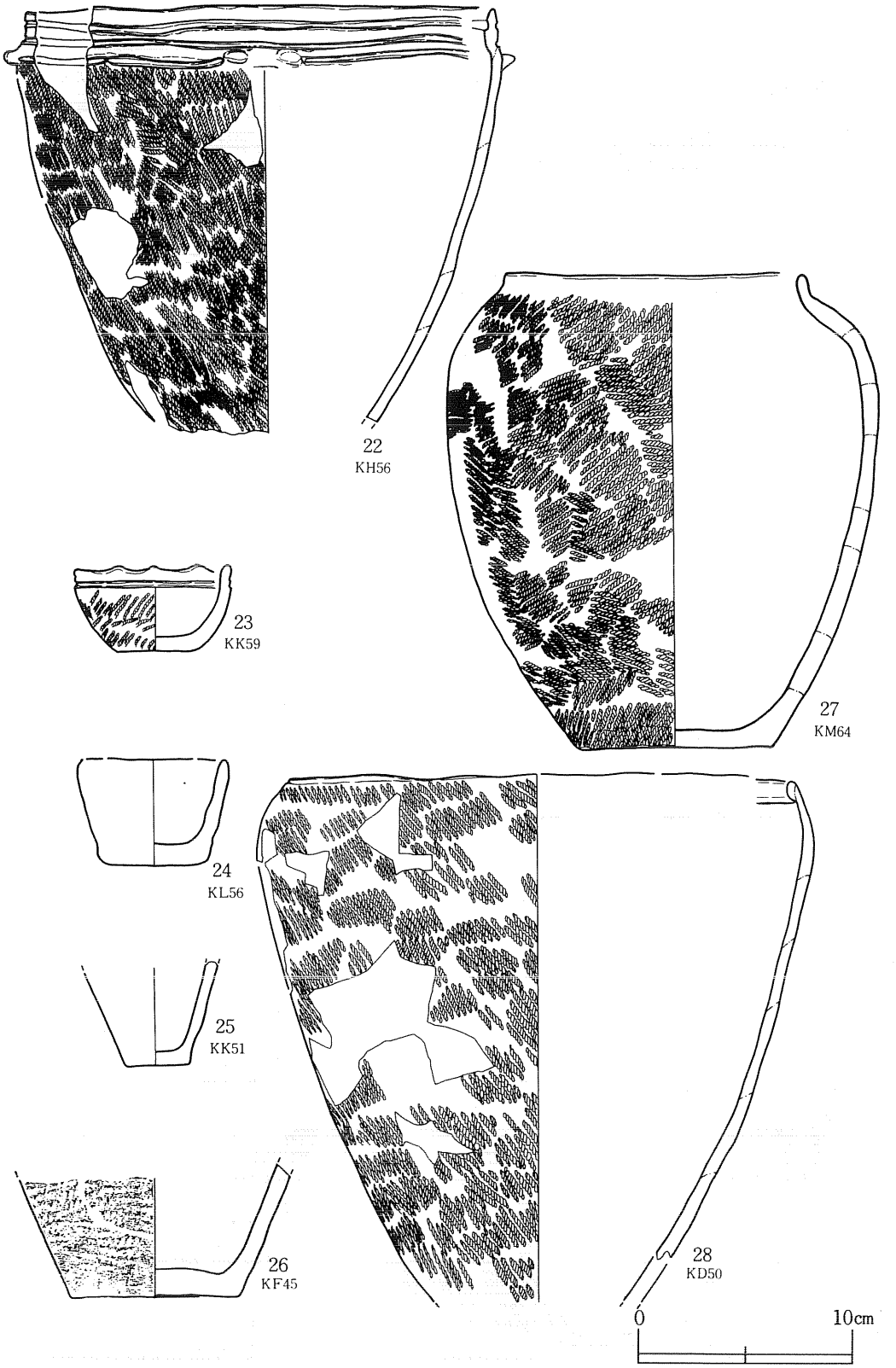
第159図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（１）・土器（１）



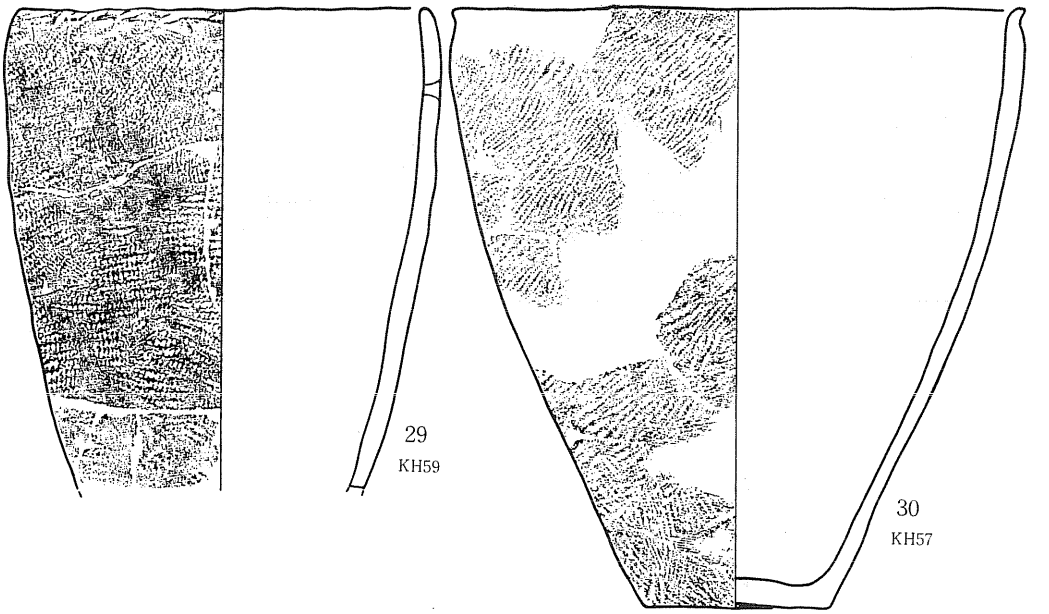
第160図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（２）・土器（２）

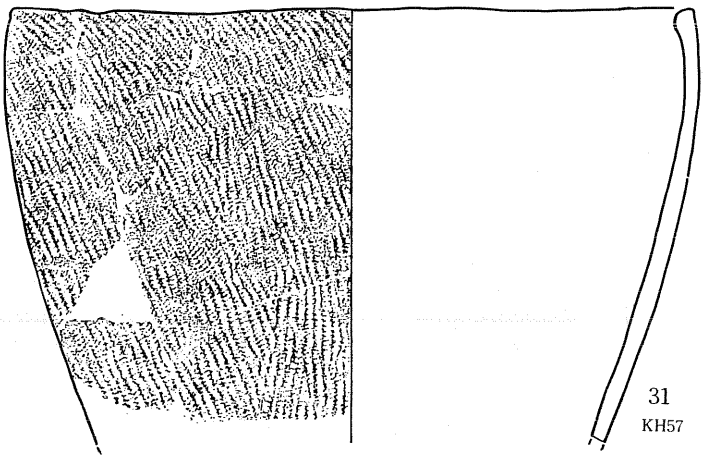


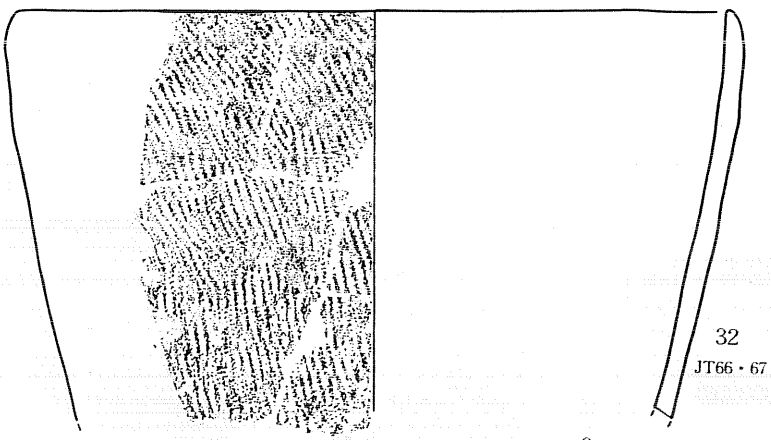
第161図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（３）・土器（３）

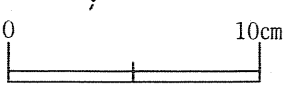


第162図　A Ⅲ区　遺構外出土遺物（4）・土器（4）

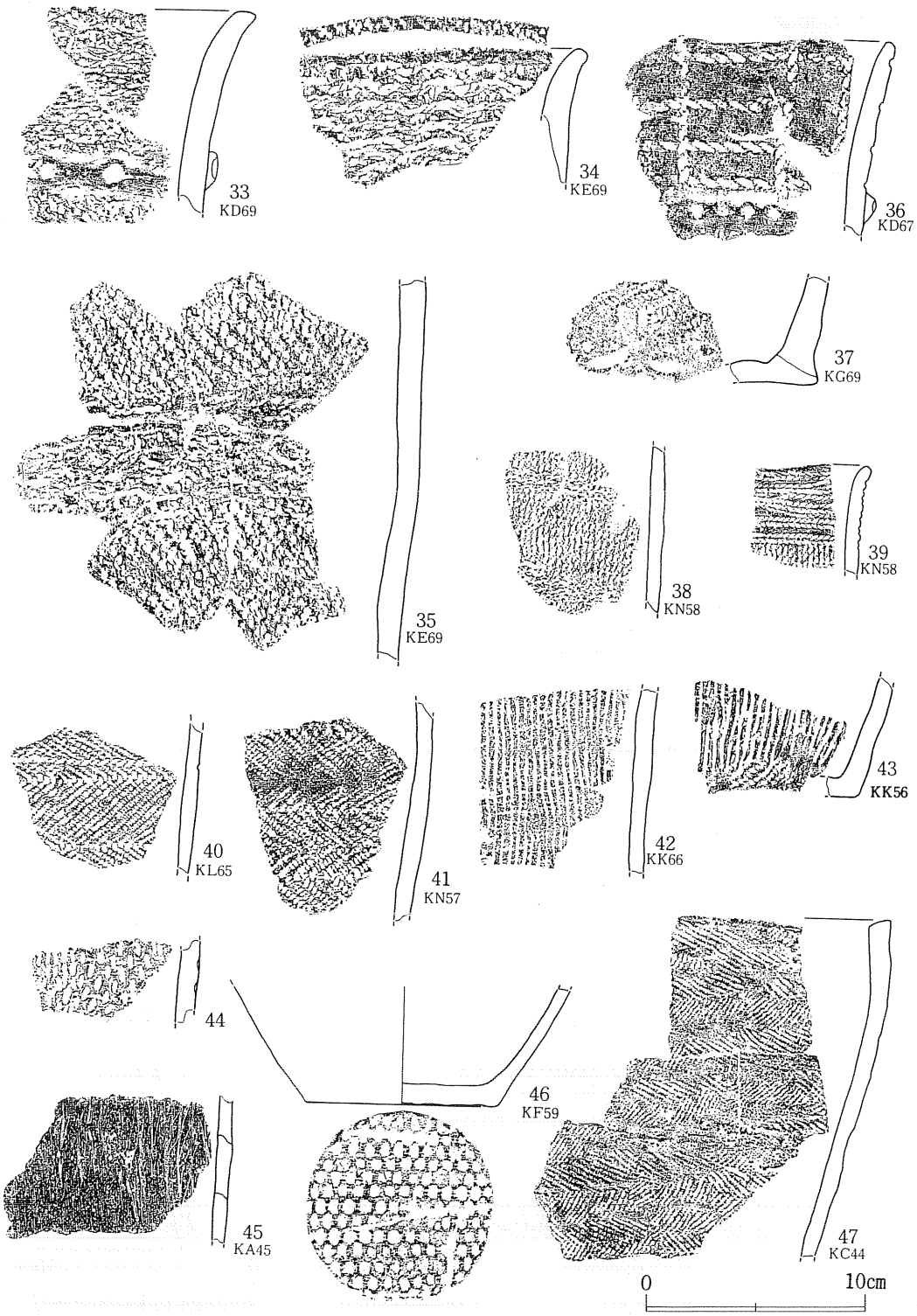




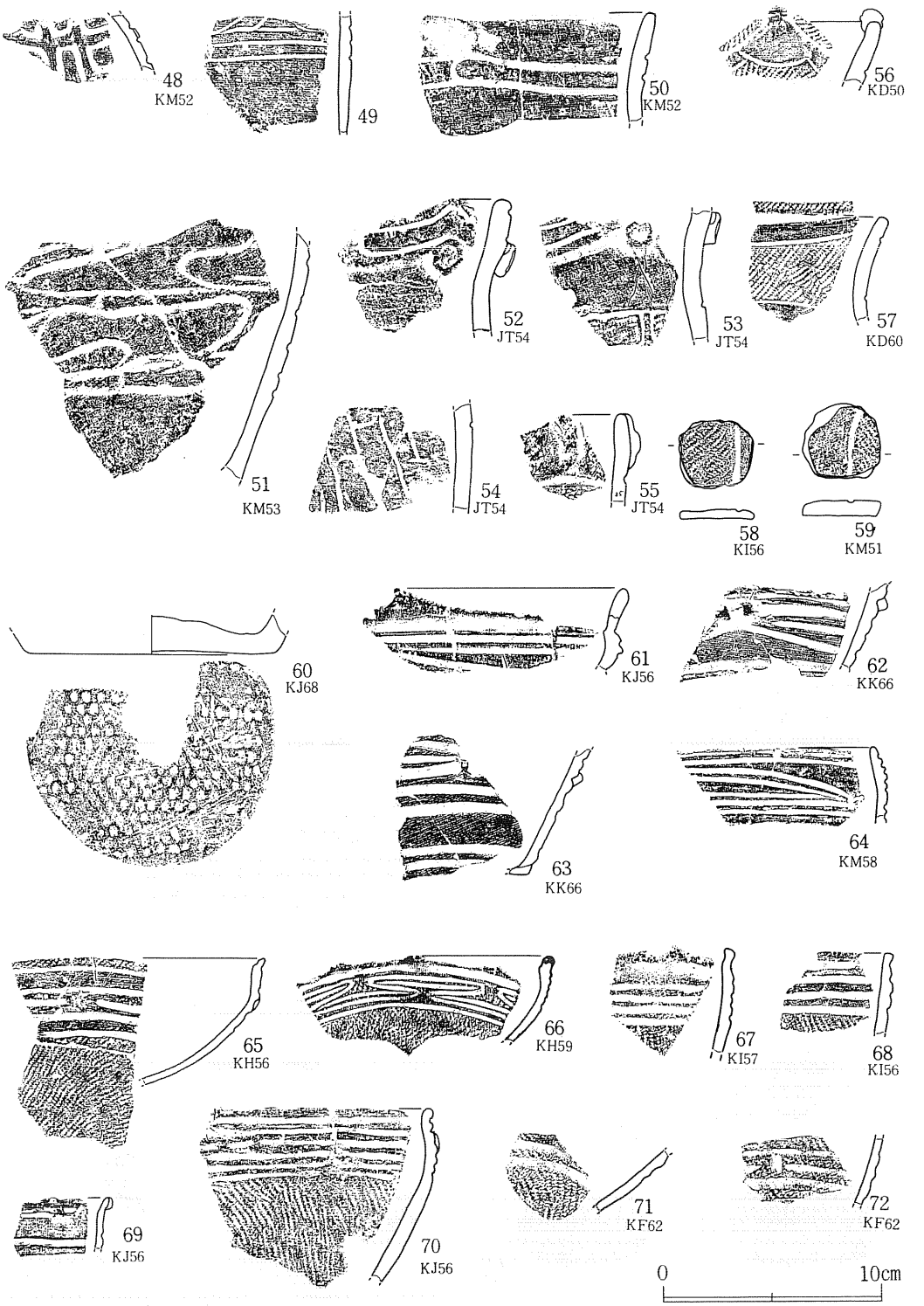




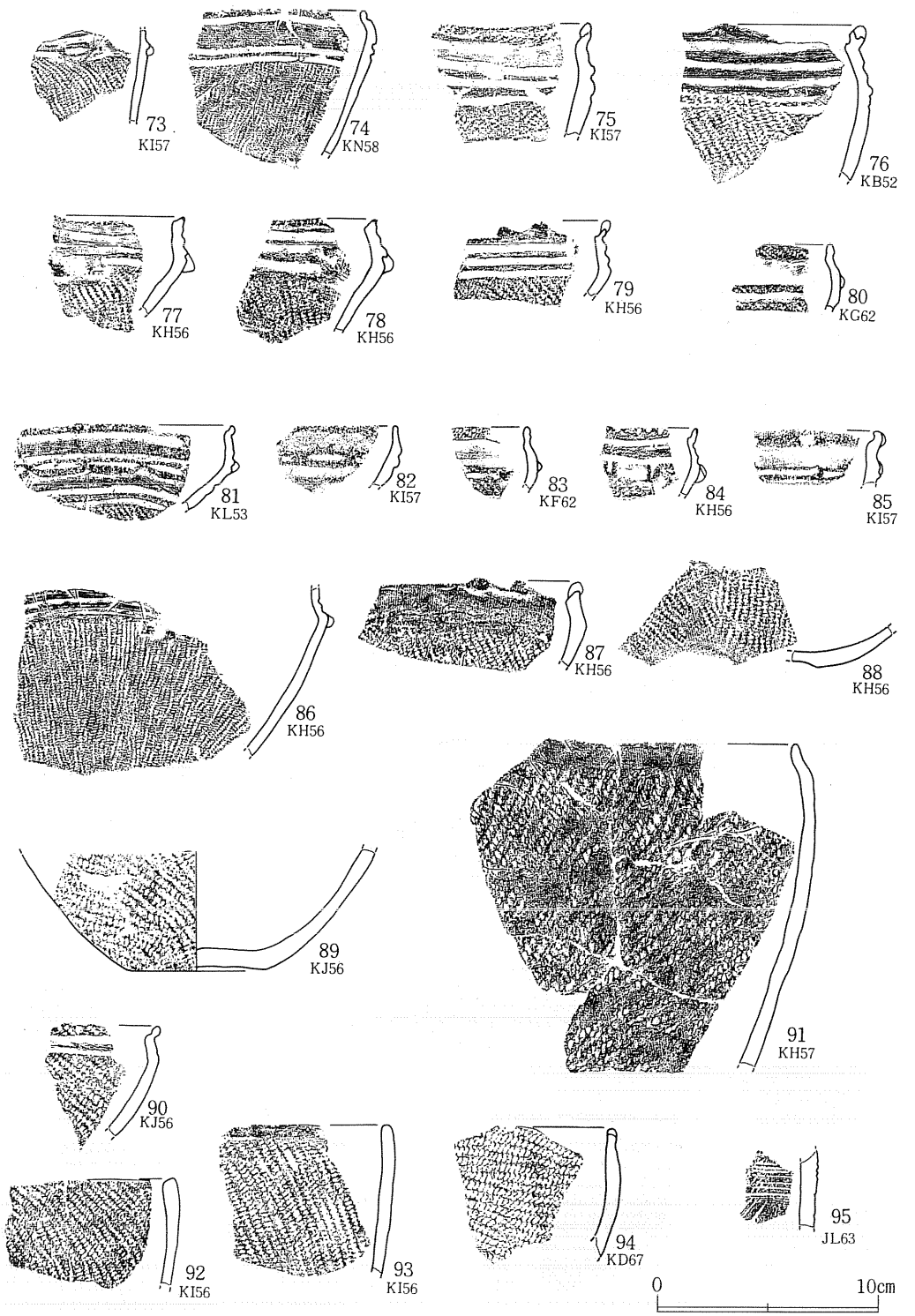
第163図　A Ⅲ区　遺構外出土遺物（5）・土器（5）



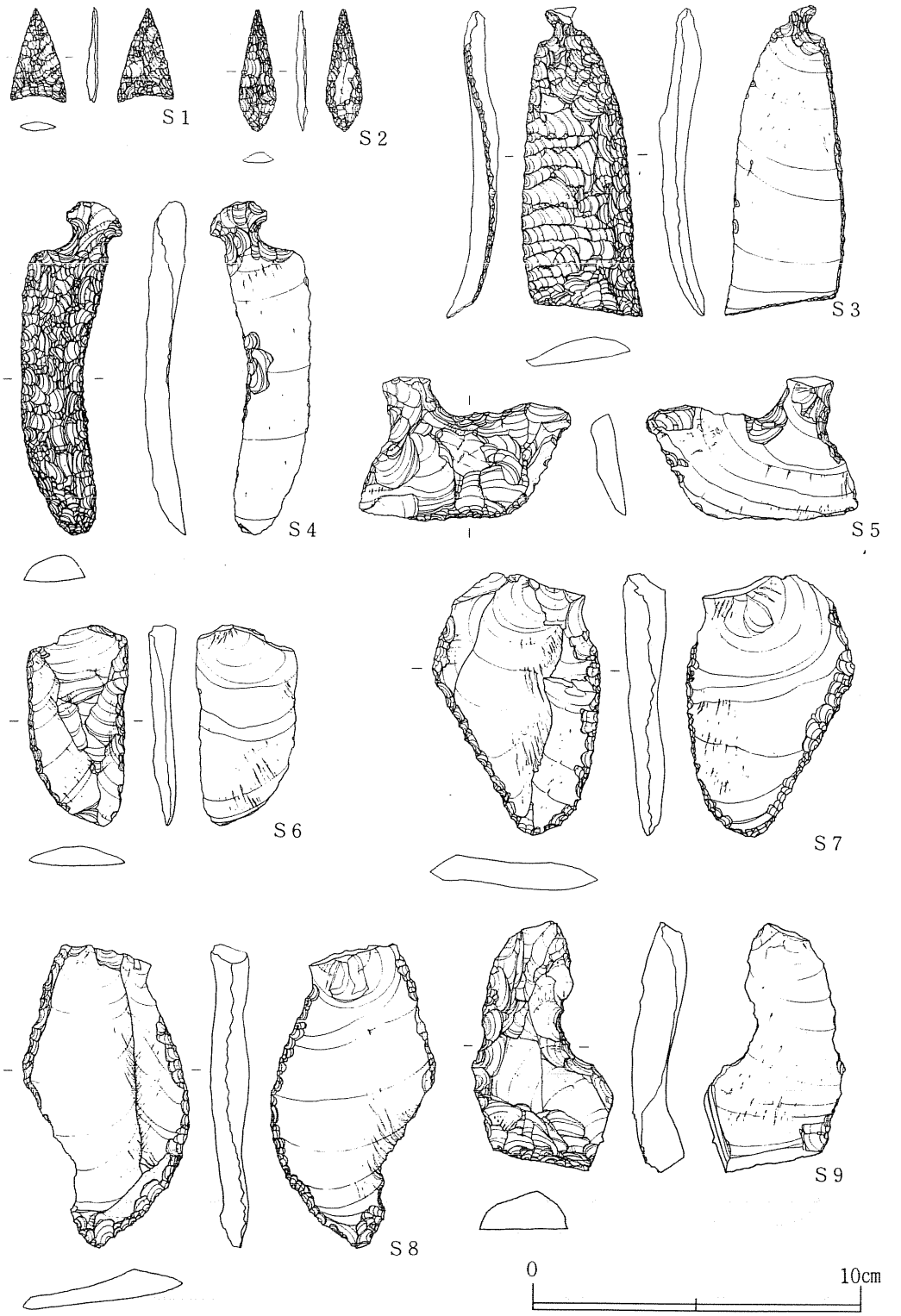
第164図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（６）・土器（６）



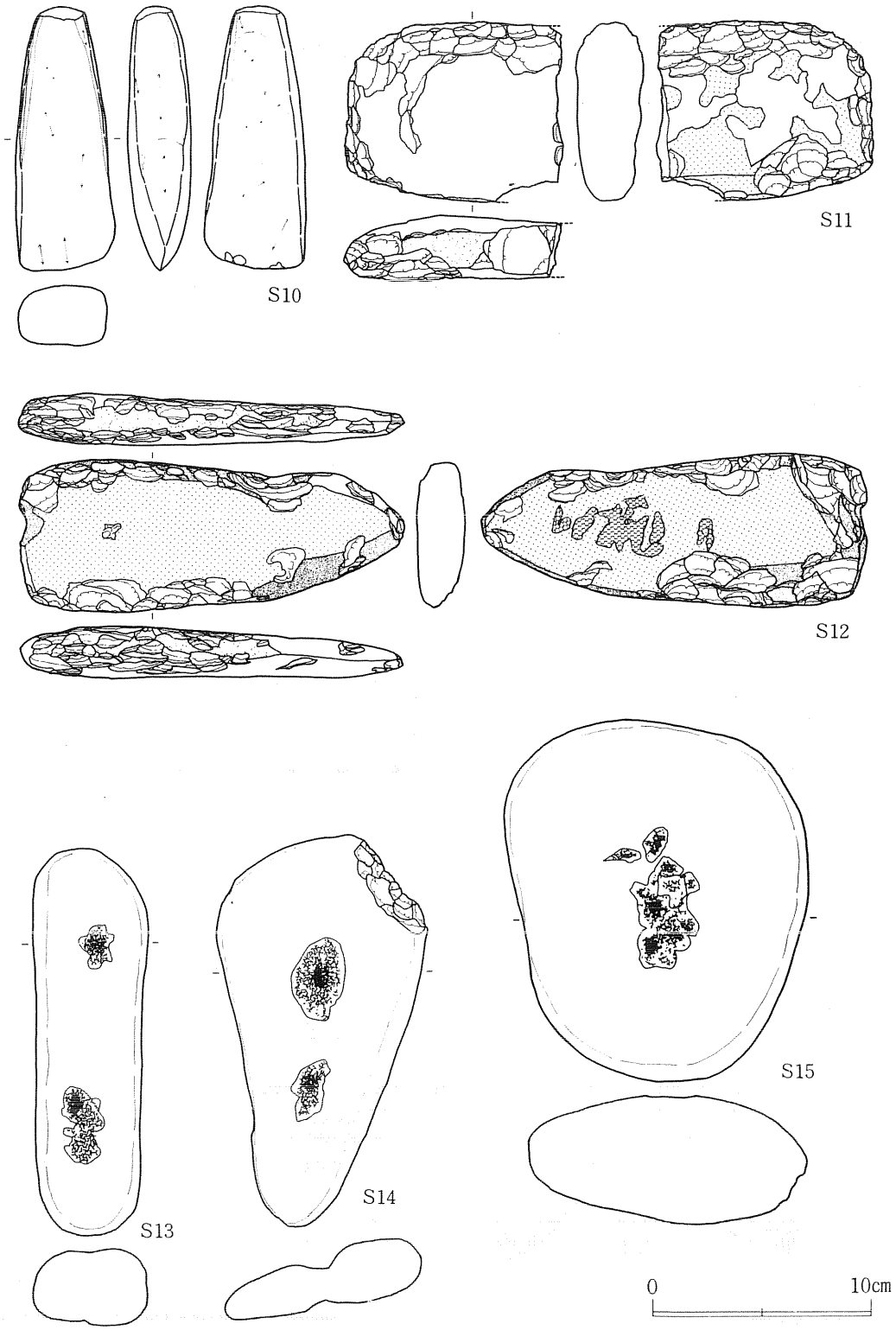
第165図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（７）・土器（７）



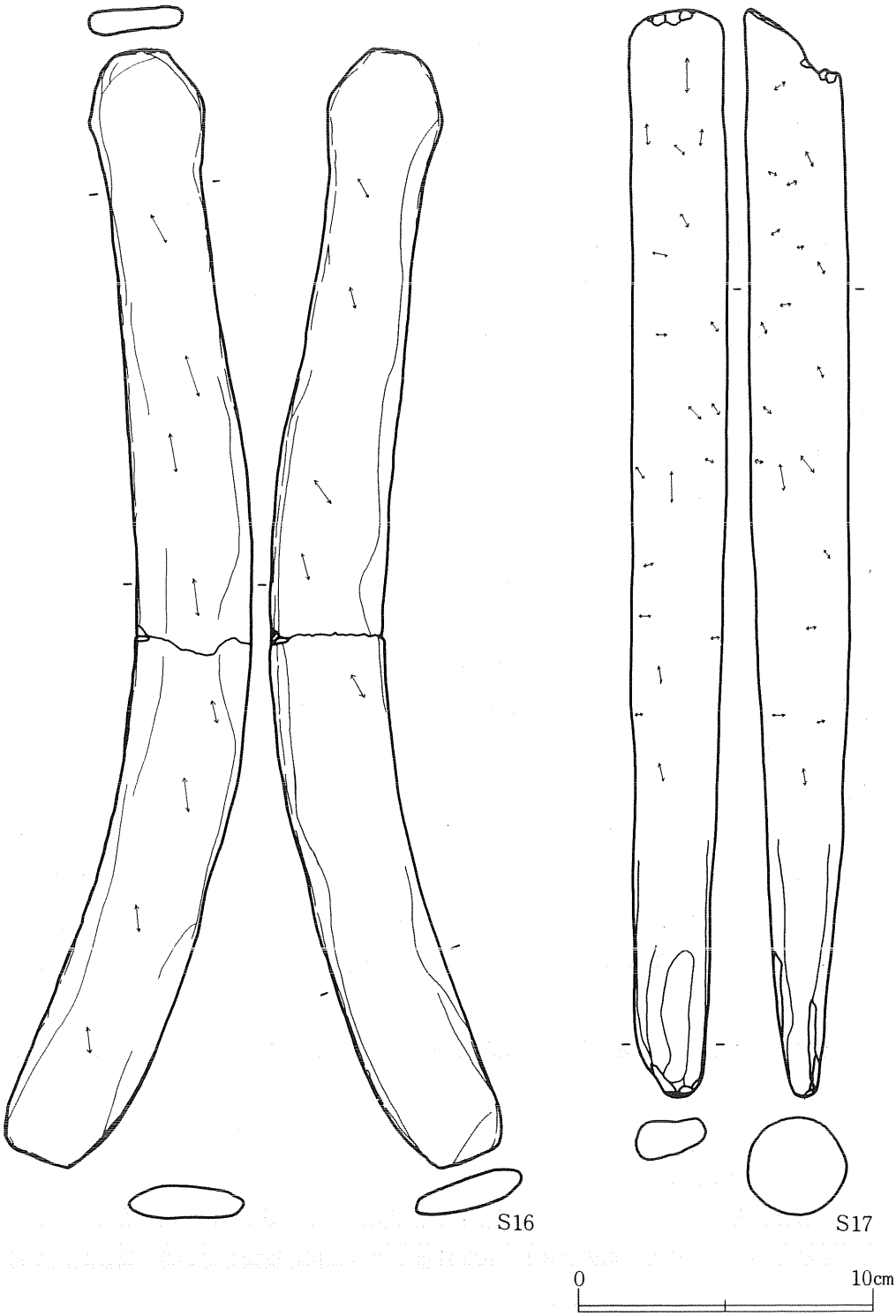
第166図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（８）・土器（８）



第167図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（９）・石器（１）



第168図　ＡⅢ区　遺構外出土遺物（10）・石器（２）



第169図　ＡⅢ区　遺構外出器遺物（11）・石器（３）

第３節　平安時代の遺構と遺物

１　平安時代の検出遺構と遺物

ＡⅢ区で検出した遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑１基、溝状遺構３条、柱列２列である。遺構確認面は、削平を受けている箇所を除くと、第Ⅲ層大湯浮石層面か第Ⅴ層上面である。

(1)　竪穴住居跡　（第170～181図、図版64～73）

竪穴住居跡は、標高約200～202ｍの関上段丘上位面東縁にまとまって選地している。このまとまりは、それぞれの配置から３つのグループに分けられる。南側より、ＳＩ02・04・05・08・37の５軒、ＳＩ07・10・11の３軒、ＳＩ19・21の２軒となる。各グループは、６～８ｍ間隔を保って存在している。

ＳＩ02　（第170図、図版64）

位置・確認状況　ＫＡ・ＫＢ46グリッド、第Ⅴ層中で検出した。

形態・規模　東西長4.1ｍ、南北長3.65ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－３°－Ｅを示す。

覆土　確認面において、周壁に沿って大湯浮石再堆積層（１層）と同粒子を多量に含む赤黒色土（４層）が帯状方形に巡っている。

床・壁　床面は、黒褐色シルト質土に地山粘土や大湯浮石粒子を少量混合させた土で全面貼床をしている。同面は、堅くたたき締められている。床面積は13.7㎡である。壁高は、最大で25㎝である。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

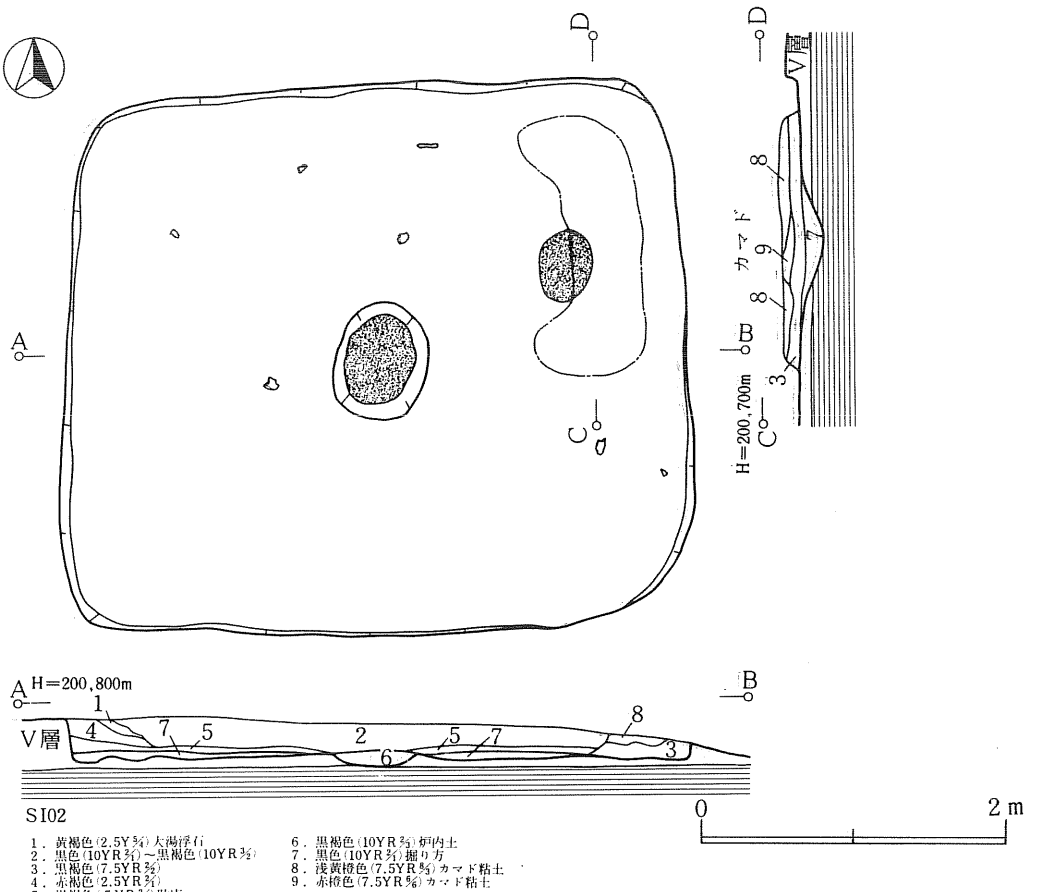
カマド・炉　カマドは、東壁北側で確認している。カマドに用いられた白色粘土（９層）が南北方向に広く分布しているが、完全に崩壊しており原形状を復元することはできない。竪穴住居廃棄時に意図的に破壊している可能性がある。床面中央部には長さ80㎝、幅60㎝、深さ10㎝の土坑が掘り込まれているが、坑底面が焼土化していることから、炉と見ることができる。

出土遺物（第182図96、184図Ｍ１）　土師器甕（４個体）、フイゴ羽口、釘状鉄製品が出土している。

ＳＩ04　（第171図、図版65）

位置・確認状況　ＪＳ46グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。畑作に伴う削平を受け、遺構東半分は失われたものと判断できる。推定床面上でＳＫ14と重複している。確認状況ではＳＫ14がＳＩ04を切り込んでいる。

形態・規模　南北長３ｍ、東西は1.6ｍまで確認している。主軸方位は真北（座標北）を指す。



第170図　SI 02竪穴住居跡

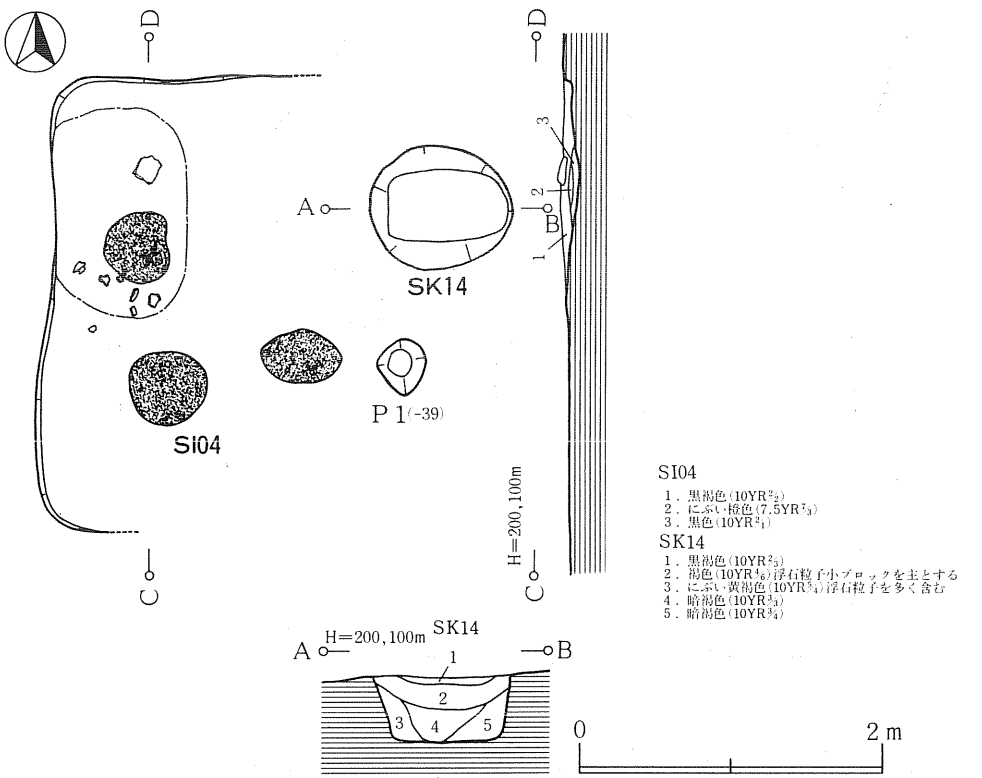
覆土　削平のため殆ど失われている。

床・壁　床面には小さな凹凸あり、かつ堅く締まっているわけでもない。壁高は最高で15cmである。

壁溝・柱穴　壁溝はなく、柱穴と考えられる遺構はＰ１のみである。

カマド・炉　カマドは西壁北側で確認している。完全に崩壊・削平され、僅かな白色粘土、砂質凝灰岩、火床面がその存在を示しているに留どまる。床面上には２箇所で焼土面が認められるが、これらが炉として機能していたのかは分からない。

出土遺物（第182図97、184図Ｓ15）　カマド周辺から土師器甕（１個体）、砥石（台石）が出土している。



第171図　SI 04竪穴住居跡・SK14土坑

ＳＩ05　（第172図、図版65・66）

位置・確認状況　ＪＳ・ＪＴ47・48グリッド、第Ⅴ層中で検出した。南東部でＳＩ37を切っている。

形態・規模　南北長3.2〜3.5ｍ、東西長3.3ｍのやや歪つな隅丸方形を呈するが、東壁南カマド部分の壁が20〜25㎝外に張り出している。主軸方位はＮ－24°－Ｅを示す。

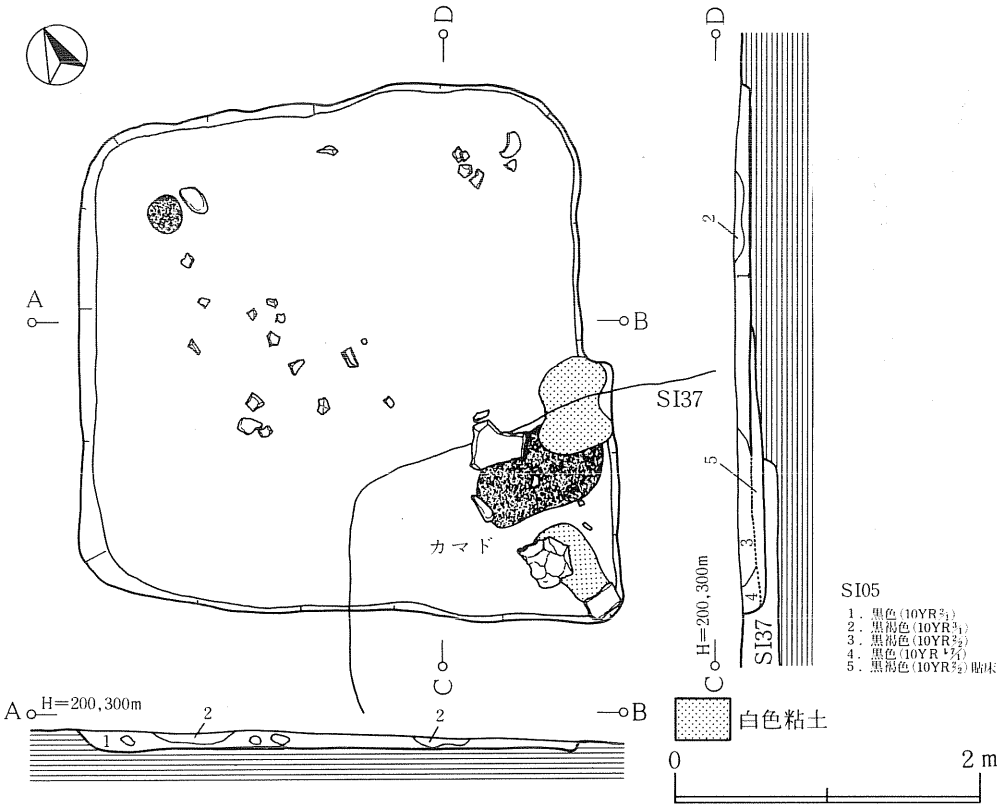
覆土　確認面及び覆土には、大湯浮石が小ブロック状に多量に入り込み、地山の礫も多い。

床・壁　床面は、ＳＩ37と重複する部分では黒褐色シルト質土で貼床している。しかしながら明確に面としては確認できなかった。その他は、第Ⅶ層地山面を床面としているが、小さな凹凸多く、この部分も貼床していた可能性が考えられる。床面積は10.5㎡、壁高は最高15㎝を計測する。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

カマド・炉　カマドは、東壁南半で確認している。遺存状態は良好ではなく、カマドを構成していたと考えられる大きな板状の砂質凝灰岩や白色粘土が広がっている。なお、床面北西隅寄りには、径25㎝の焼土面が存在するが、炉として機能していたかどうかは不明である。

出土遺物（第182図98〜100）　土師器甕（４個体）が出土した。いずれもカマド内出土である。



第172図　SI 05竪穴住居跡

ＳＩ07　（第173図、図版67）

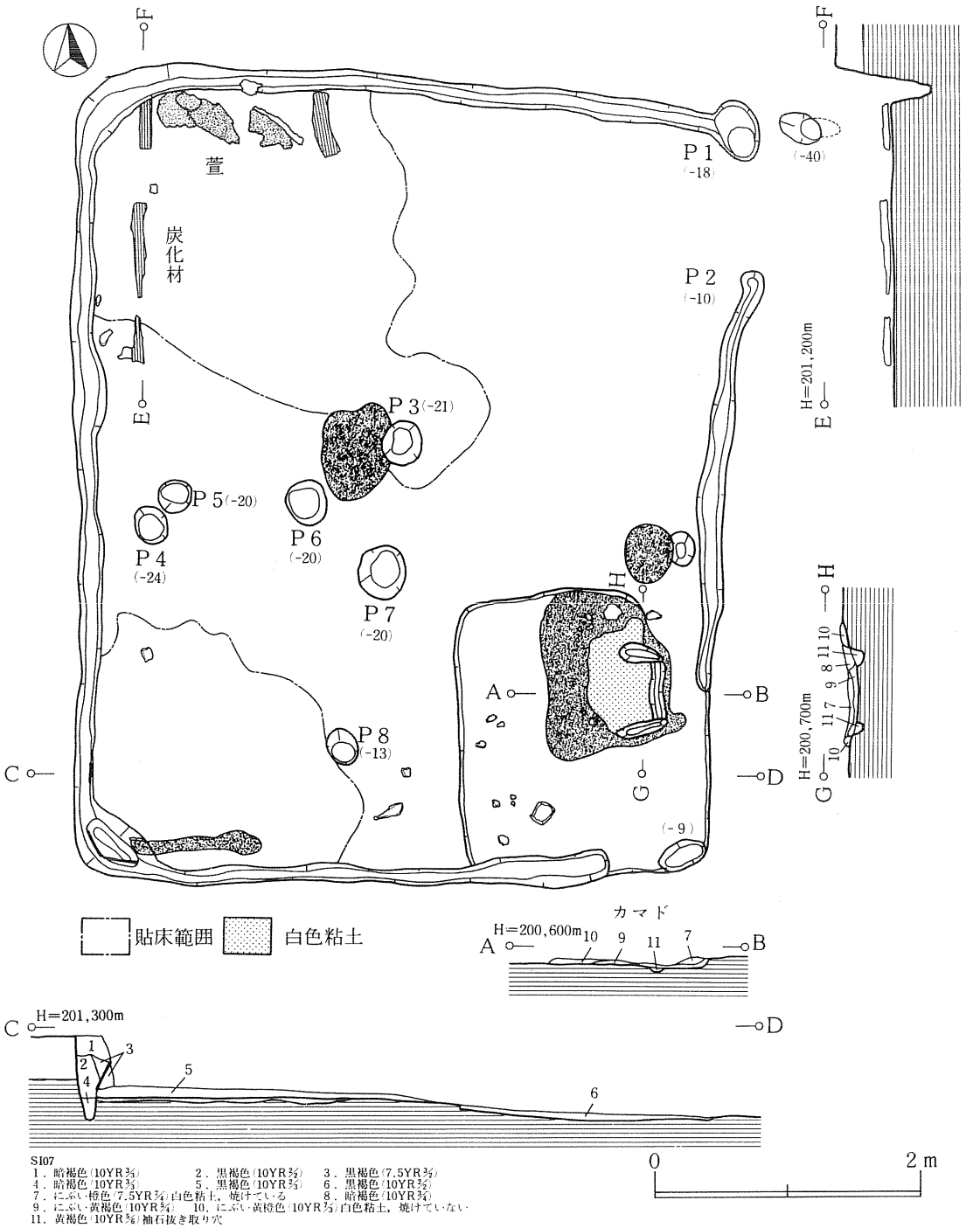
位置・確認状況　ＪＴ・ＫＡ51～53グリッドで検出した。住居西壁の一部分は、第Ⅲ層大湯浮石面で確認できるが、これ以東は畑作に伴う深耕で第Ⅶ層地山面までも削平されている。住居北西部でＳＩ11と重複しているが、新旧関係は不明である。

形態・規模　南北長6.2m、東西長4.8～5.2mの隅丸長方形を呈する。主軸方位はＮ－14°－Ｅを示す。

覆土　住居北西部と南西隅で、炭化材（物）・萱が検出され、焼失家屋であることを確認した。前者は床面上か直上で棒状の材（幅10cm、厚さ５cm前後）や板材、材の上に乗るように萱と見られる炭化物が分布している。後者は、立った状態の壁板を３枚検出している。位置から見て、壁溝に立てていたことは間違いない。覆土２層は、この壁板の裏込土と考えられ、第Ⅴ層土を用いている。

床・壁　床面は平坦で堅く締まっており、黒褐色シルト質土に地山粒子を斑状に多く混ぜた土で貼床している。床面積は27.9㎡である。壁高は、西壁で最高48cmを測る。

壁溝・柱穴　壁溝は東壁両端部を除き、幅10～20cmで巡っている。床面よりの深さは、北西・



SI07
1．暗褐色(10YR3/3)　2．黒褐色(10YR2/2)　3．黒褐色(7.5YR3/2)
4．暗褐色(10YR3/3)　5．黒褐色(10YR2/3)　6．黒褐色(10YR2/2)
7．にぶい橙色(7.5YR7/4)白色粘土，焼けている　8．暗褐色(10YR3/4)
9．にぶい黄褐色(10YR5/4)　10．にぶい黄橙色(10YR7/3)白色粘土，焼けていない
11．黄褐色(10YR5/6)抽石抜き取り穴

第173図　SI07竪穴住居跡

南西隅で40cm、他は10～23cmである。東壁北端は、幅85cmで壁・壁溝が途切れ、溝端に取り付く柱穴（Ｐ１・２）の存在と合わせて、出入口と考えることができる。その他の柱穴では、床面ほぼ中央に位置するＰ３は、本住居の主柱をなすものであろう。

カマド・炉　住居南東部床面は、南北2.2m、東西1.9mの範囲で区画され、一段掘り下げられているが、この一角東壁南側にカマドは位置している。削平のため僅かな焼土・白色粘土と掘り方のみの検出である。燃焼部には３本の楕円・溝状の掘り方が見られるが、東西方向の２つの遺構については、袖部を構成していたと考えられる石などの抜き取り穴であろう。炉は、床面ほぼ中央に認められる。平坦な床面をそのまま利用している。

出土遺物（第184図Ｍ２）　土師器甕、フイゴ羽口、鉄製品が出土している。Ｍ２は、一端に目釘穴があり、鎌かもしれない。住居南西隅覆土中の出土である。

ＳＩ08　（第174図、図版68）

位置・確認状況　ＪＴ・ＫＡ48・49グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。この位置は、畑作による深耕の及んでいる箇所である。薄い表土（＝耕作土）の下が地山となっており、地山自体も多少削平されているようである。

形態・規模　南北長5.2m、東西長4.7mのやや歪つな隅丸方形を呈している。主軸方位はＮ－11°－Ｅを示す。

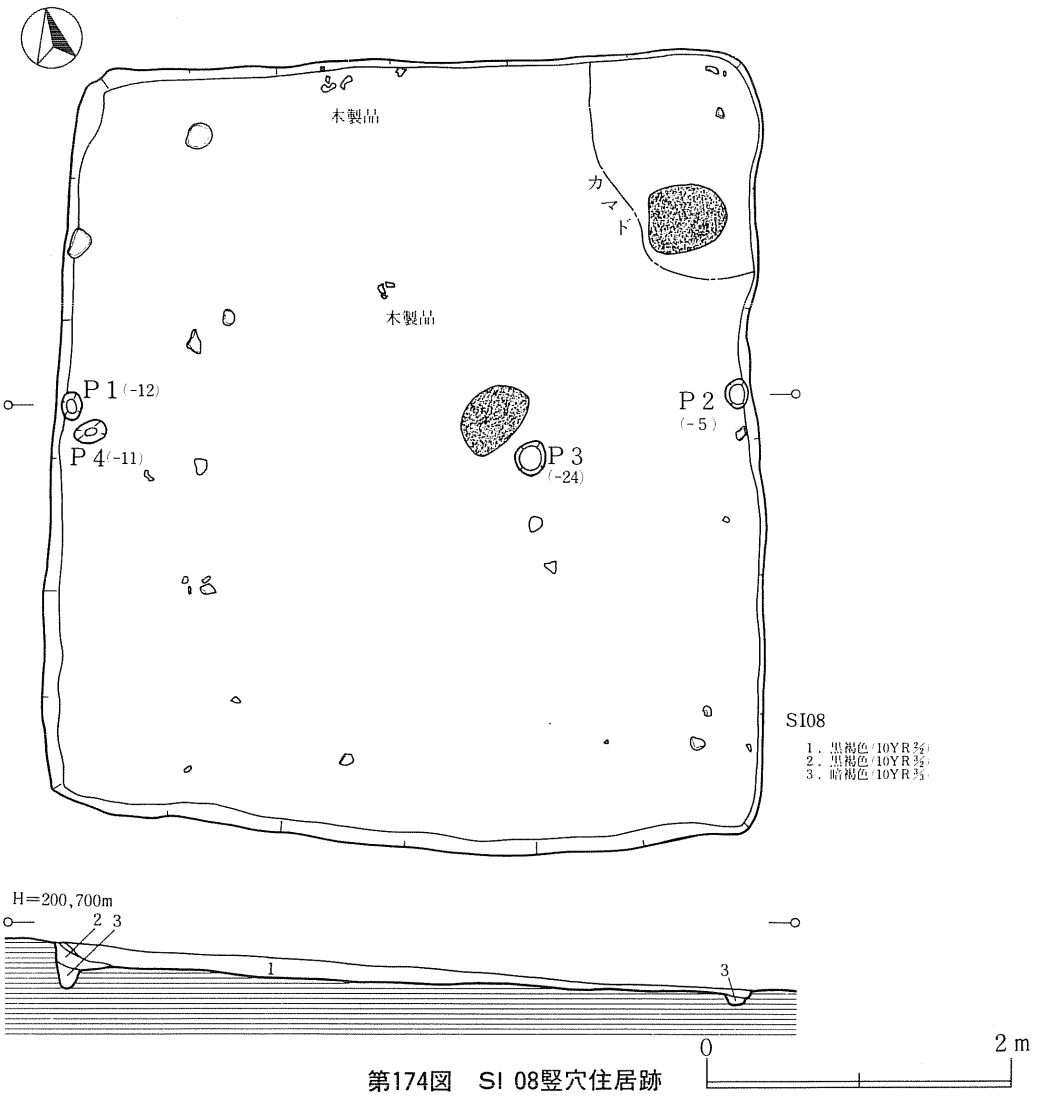
覆土　北壁際には、大湯浮石が小ブロック状に多く入り込んでいるが、ＳＩ02などのように帯状には巡っていない。

床・壁　床面は概ね平坦で締まっている。床面積は22.3㎡である。壁高は、西壁で17～25cmであるが、削平の著しい東壁では５cm未満となっている。

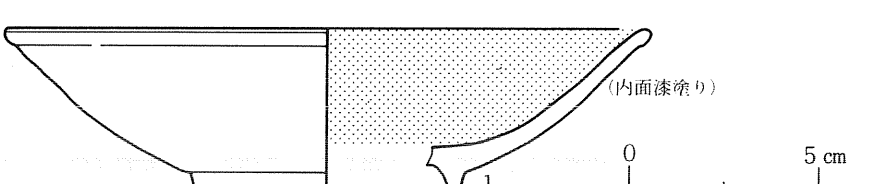
壁溝・柱穴　壁溝は確認できなかった。柱穴はＰ１～４を検出しているが、いずれも主柱と言えるほどの規模ではない。

カマド・炉　カマドは東壁北半で確認している。削平著しく、カマドを構成していたと見られる僅かな白色粘土と堅く締まった火床面が残るのみである。地床炉と考えている焼土面は、床面中央から幾分カマド方向に寄った位置にある。

出土遺物（第175図、182図101・102）　土師器甕（３個体）、木椀（Ⅲ）、フイゴ羽口が出土している。木椀は、床面中央北側と北壁中央下出土の破片が接合したものである。復元口径16.6cm、底径6.6cm、器高4.3cmである。完全に炭化していたため遺存していたが、本住居は焼失家屋とは考えられないことから、他の焼失家屋などから運び込まれたと解することがでる。内面は漆塗りである。



第174図　SI 08竪穴住居跡

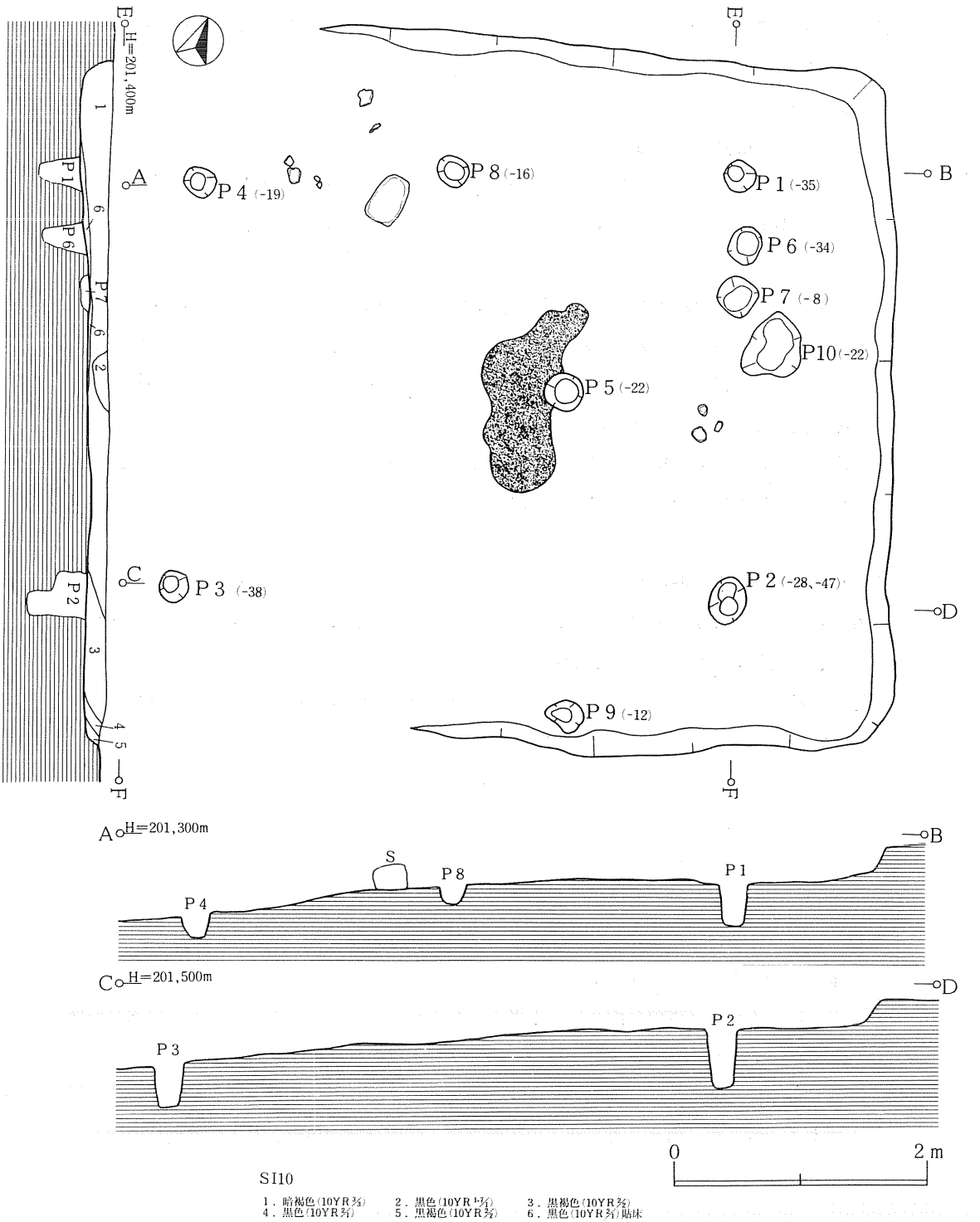


第175図　ＡⅢ区　遺構内出土遺物（９）・木製品

ＳＩ10　（第176図、図版69）

位置・確認状況　ＪＲ・ＪＳ53・54グリッド、第Ⅴ層上面で検出したが、遺構南半は削平に伴い壁を確認できなかった。

形態・規模　南北長は、柱穴配置から推定して6.4ｍ、東西長5.6ｍの隅丸長方形を呈するもの



第176図　SI 10竪穴住居跡

と考えられる。主軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。

覆土　北・西壁の壁際には、断続的にではあるが大湯浮石粒子を多量に含む黒褐色土（４層）が帯状に入り込んでいる。

床・壁　床面の残存する部分については、概ね平坦で堅く締まっている。推定床面積は35㎡である。壁高は最高で25㎝を測る。

壁溝・柱穴　壁溝はない。柱穴は、床面上に長方形に配されるＰ１～４と、床面中央やや北側のＰ５を主柱穴として把えることができる。前者Ｐ２は２時期あり、建て替えが考えられる。

カマド・炉　カマドは確認できなかったが、南壁あるいは東壁南半に取り付いていた可能性がある。炉は床面ほぼ中央部、柱穴Ｐ５に切られるように位置している。整った平面形ではないが、長さ160㎝、幅50㎝程の東西方向に長い形状を呈している。炉は、床面を僅かに掘り窪めたレベルで使用している。

出土遺物（第182図103・104）　土師器甕（２個体）、鍋（１個体）、鉄塊が出土している。104は小破片であるが、鍋形を呈すると考えられる。

ＳＩ11　（第177図、図版70）

位置・確認状況　ＪＴ53・54グリッド、第Ⅴ層上面で検出した。住居南端でＳＩ07と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

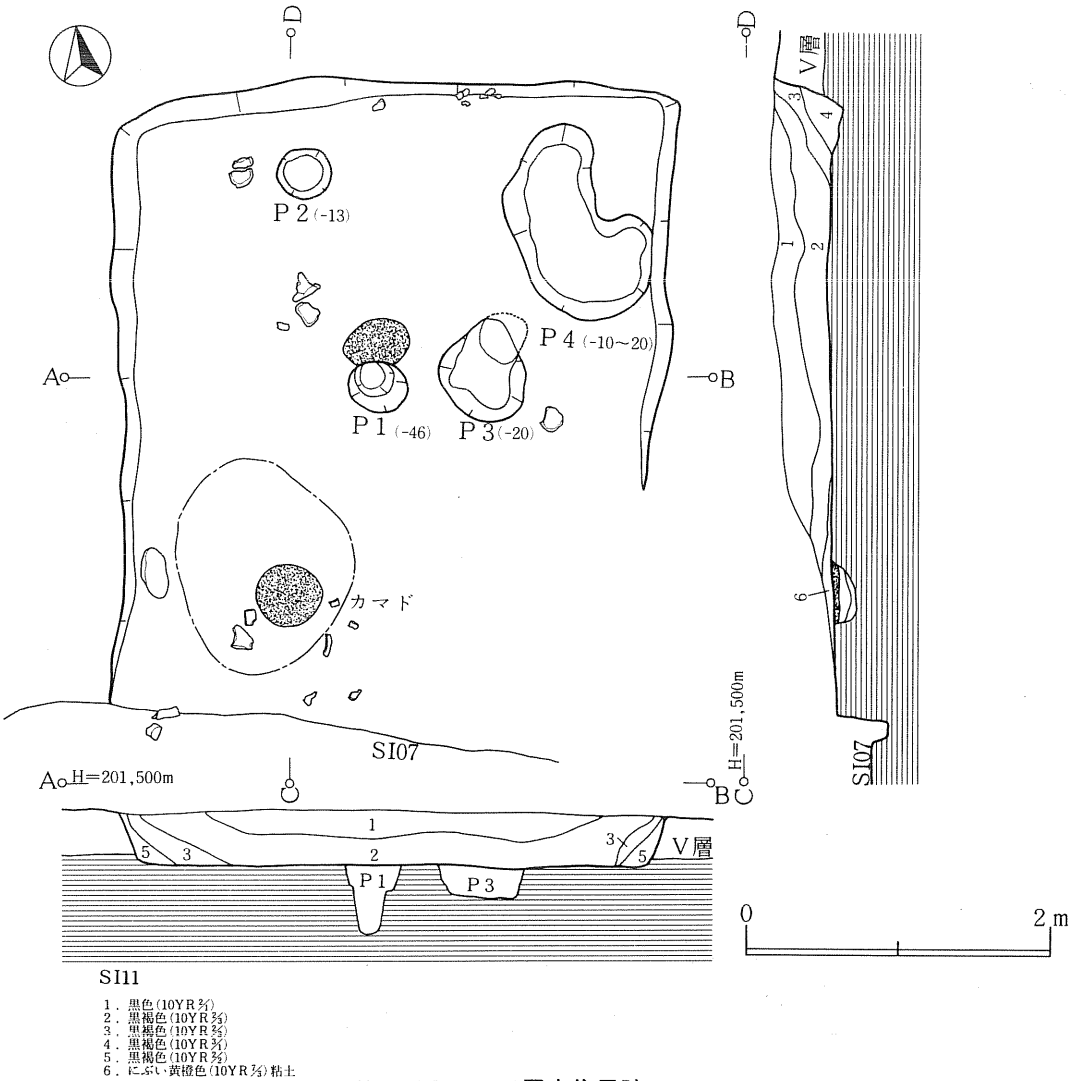
形態・規模　南北長4.2ｍ以上、東西長3.5～3.7ｍのやや歪つな長方形を呈するものと考えられる。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。

覆土　確認面においては、大湯浮石粒子を多量に含む黒褐色土（３層）が、周壁に沿って幅10㎝前後の帯状に分布していた。

床・壁　床面は、第Ⅶ層地山面もしくは同層を僅かに掘り下げたレベルに位置している。壁は、南壁と東壁南半を欠くものの、北壁では28～38㎝の高さを有している。

壁溝・柱穴　壁溝は認められない。床面ほぼ中央部には、深さ46㎝の柱穴（Ｐ１）が小さな地床炉を切る形で１本存在する。

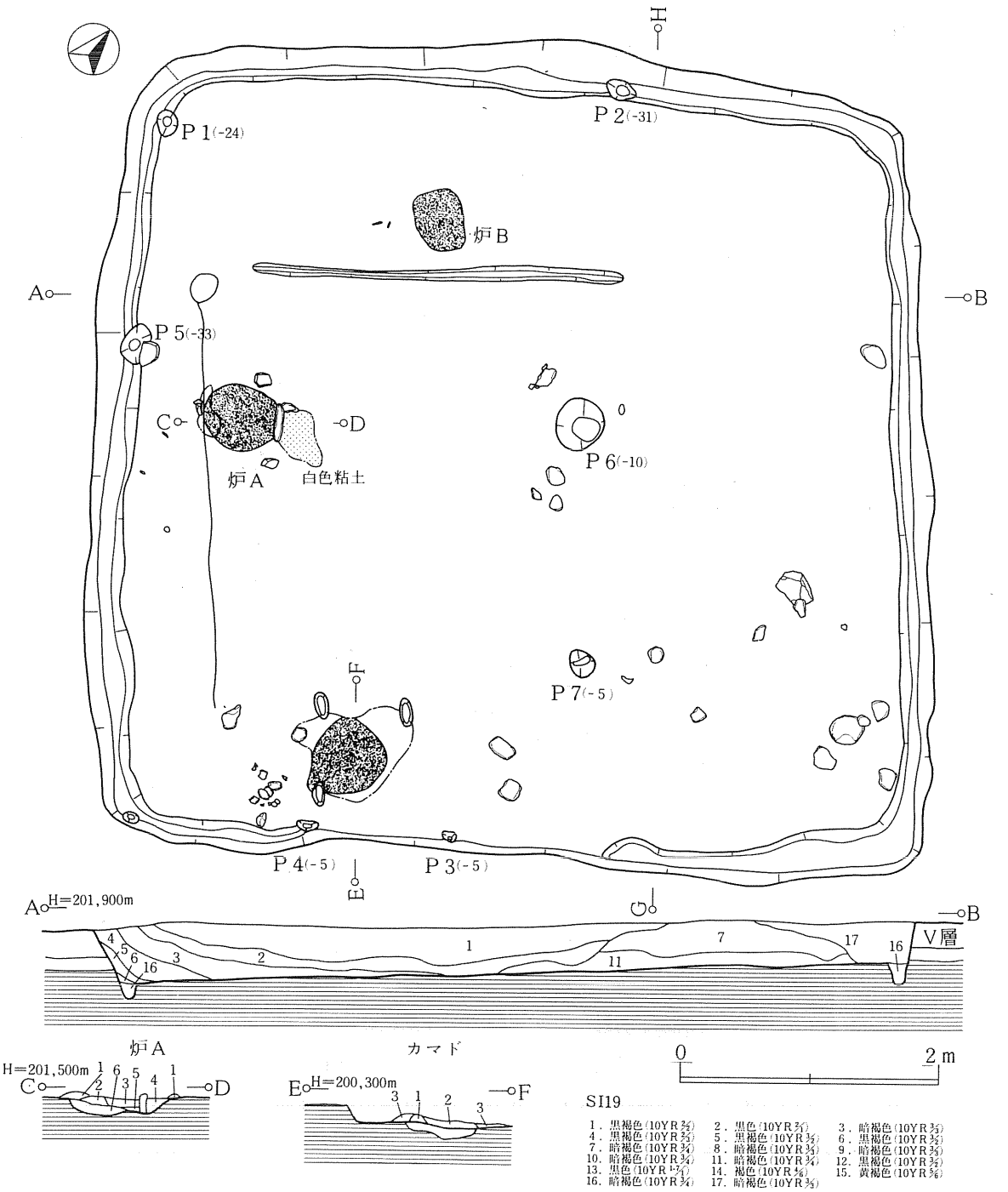
カマド・炉　カマドは南壁に取り付くと考えられるが、ＳＩ07との重複とカマド自体の崩壊の著しさから明らかにし得ない。崩壊した粘土、遺物から判断して、白色粘土・砂質凝灰岩・フイゴ羽口などを用いて構築していたようである。径40㎝の火床面は、掘り方を伴う構造である。地床炉と考えられる焼土の広がりは、床面ほぼ中央部、Ｐ１の北側に位置している。



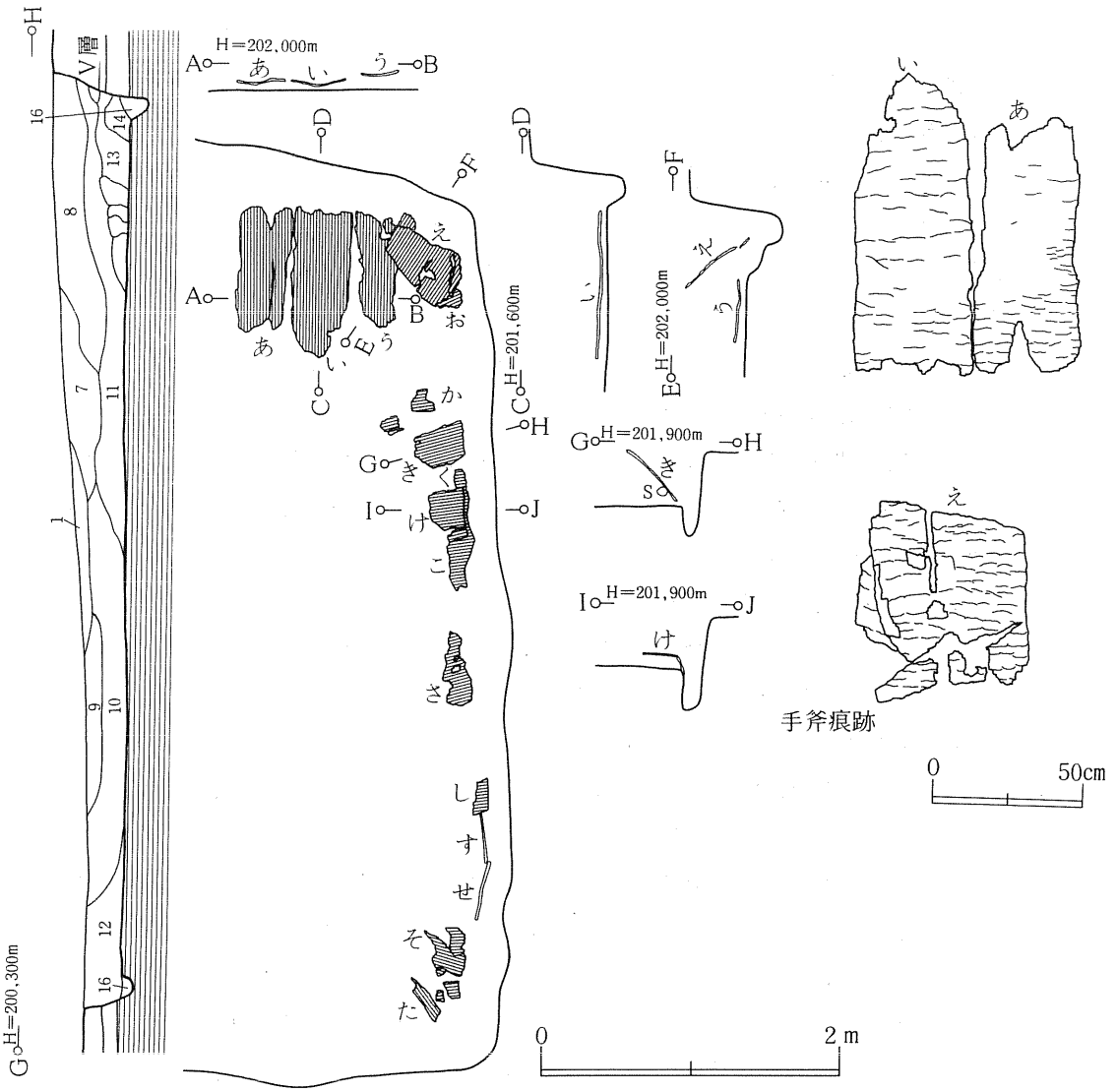
第177図　SI 11竪穴住居跡

その他の付属施設　床面中央から北東側にかけて２つの土坑（Ｐ３、４）が掘り込まれている。これらが本住居より新しい時期の構築ではないことは確かであるが、住居に伴う施設であるのか否かについては不明である。

出土遺物（第183図105・106）　土師器甕（２個体）、ミニチュア土器、フイゴ羽口が出土している。カマド周辺で主に確認できた。105は、全長46cmの長大な羽口である。106底部は不明瞭ながら木葉痕をもつ。



第178図　SI 19竪穴住居跡



第179図　SI 19竪穴住居跡炭化材出土状況

ＳＩ19　（第178・179図、図版71・72）

位置・確認状況　ＫＡ・ＫＢ56～58、第Ⅲ層上面で検出した。焼失家屋である。

形態・規模　東西長6.4ｍ、南北長6.3ｍのやや歪つな隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－37°－Ｗを示す。

覆土　堆積状況は、東壁際から内側に約1.5ｍの範囲内－これは後述する炭化材の範囲と合致するが－とその他の箇所では大きく様相を異にする。前者は、覆土７・12層に代表されるように人為的に投棄された土と考えらる。後者は、北・西壁際の大湯浮石粒子を多量に含む土（３層）が帯状に分布し、自然堆積であることを示している。これはＳＩ02・11など

と同じ状況である。ただし同層は、カマドの位置する南壁際には認められなかった。この堆積状況の二面性は、炭化材の検出位置、破壊されたカマド、更には床面に切られている２条の溝と係りをもつのかもしれない。

床・壁　床面は、第Ⅶ層地山面を僅かに掘り下げたレベルにあり、平坦で堅く締まっている。床面北東部は、部分的に黒褐色シルト質土に地山粘土を混ぜた土を以て貼床としている。北壁に平行して内側約1.8m、西壁に平行して内側約0.9mには間仕切りか、旧住居壁溝の痕跡なのかは明らかではないが、ごく浅い溝が切られている。前者で確認長2.85m、幅10cm前後、後者は長さ3.4m程である。床面積は35.9㎡、壁高は、北壁で50cmを測る。

住居跡北壁東側から東壁際にかけて多くの炭化壁板材が検出できた。原位置を保っているもの、内側に倒れているもの、倒れてかけているものが見られるが、北壁で３枚、東壁で少なくとも10枚（推定16枚）、北東隅で１枚確認している。遺存状態の良い板材には製作時の手斧痕跡が明瞭に残る。北壁の材（炭化材い）で、長さ102cm、幅39cm、厚さ1.5cmを測る。北東隅の材（炭化材え）は幅50cmを有すが、壁材の位置に特徴がある。北壁の壁材列と東壁の壁材列は、北東隅で直角に交わるのではなく、この“炭化材え”を45°の方向で介在させ、隅切り・面取りのような配置をしている。

壁溝・柱穴　壁溝は南壁中央部を除き、幅25～30cm、床面からの深さ５～15cmで巡る。柱穴は壁溝内あるいは壁際にＰ１～５が位置する。柱穴規模からみて主柱をなすとは考えられない。Ｐ３・４は、カマド上屋に係る柱穴であったのかもしれない。

カマド・炉　カマドは南壁西側で確認している。僅かな白色粘土と火床面、ＳＩ07同様の袖石掘り方のみの検出である。竪穴住居跡そのものの遺存状態から考えれば、このカマドは廃棄時に意図的に破壊し、12層とした土で埋めたものと解することができる。

床面には炉とみられる焼土面（炉ａ、ｂ）を２箇所で確認している。炉ａは、東西両端部に立石を配している。焼土面の外側には白色粘土が広がっているが、根本的にカマドとは異なると考えている。

出土遺物（第183図107～110、184図Ｍ３・４）　土師器甕（５個体）、フイゴ羽口、鉄製品、鉄滓が出土している。109、Ｍ４は炉Ａ出土である。110は、最大径を胴中央やや下にもつ甕で、著しい二次火熱を受け脆くなっている。内面胴下半部には、1.5～２cm幅で煤が帯状に一巡している。

ＳＩ21　（第180図、図版71・73）

位置・確認状況　ＫＡ55・56グリッド、第Ⅴ層面で検出した。遺構の存在は、前年度の範囲確認調査において確かめられていた。

形態・規模　東西長3.2ｍ、南北長2.85ｍのやや歪つな隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－33°－Ｗを示している。

覆土　確認面において大湯浮石粒子を多量に含む黒褐色土（３層）が、周壁に沿い帯状方形に分布している。

床・壁　床面は、第Ⅶ層地山面を僅かに掘り下げたレベルにある。平坦ではあるが、堅く締まってはいない。床面積は8.1㎡である。壁高は最高で28㎝を測る。

壁溝・柱穴　両者とも一切確認できなかった。

カマド・炉　北壁西寄りで確認している。右袖部を欠くが、検出状況からカマド廃棄時点で意図的に破壊されたと考えられる。全長150㎝（煙道長65㎝、燃焼部長85㎝）、推定燃焼部内法幅50㎝を計測する。煙道部は、壁外をＵ字形に約60㎝掘り込んでいる。火床面は、住居床面を10～15㎝緩く掘り窪めている。左袖（現存高20㎝）は、黒色シルト質土と砂質の白色粘土を互層に積んでいる。燃焼部から焚口部にかけては、拳大～半人頭大の砂質凝灰岩が数点認められる。カマド構築部材の１つと見られる。

出土遺物　土師器甕が少量出土している。

ＳＩ37　（第181図、図版66）

位置・確認状況　ＪＳ47グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。削平により東側の壁は存在しない。北側でＳＩ05と重複し、これに切られている。

形態・規模　東西現存長3.8ｍ、南北長3.2ｍの隅丸長方形を呈していたと思われる。主軸方位はＮ－８°－Ｅを示す。

覆土　２層（黒褐色土）には地山に含まれる拳大の礫が多く混在している。

床・壁　床面には小さな凹凸が認められる。

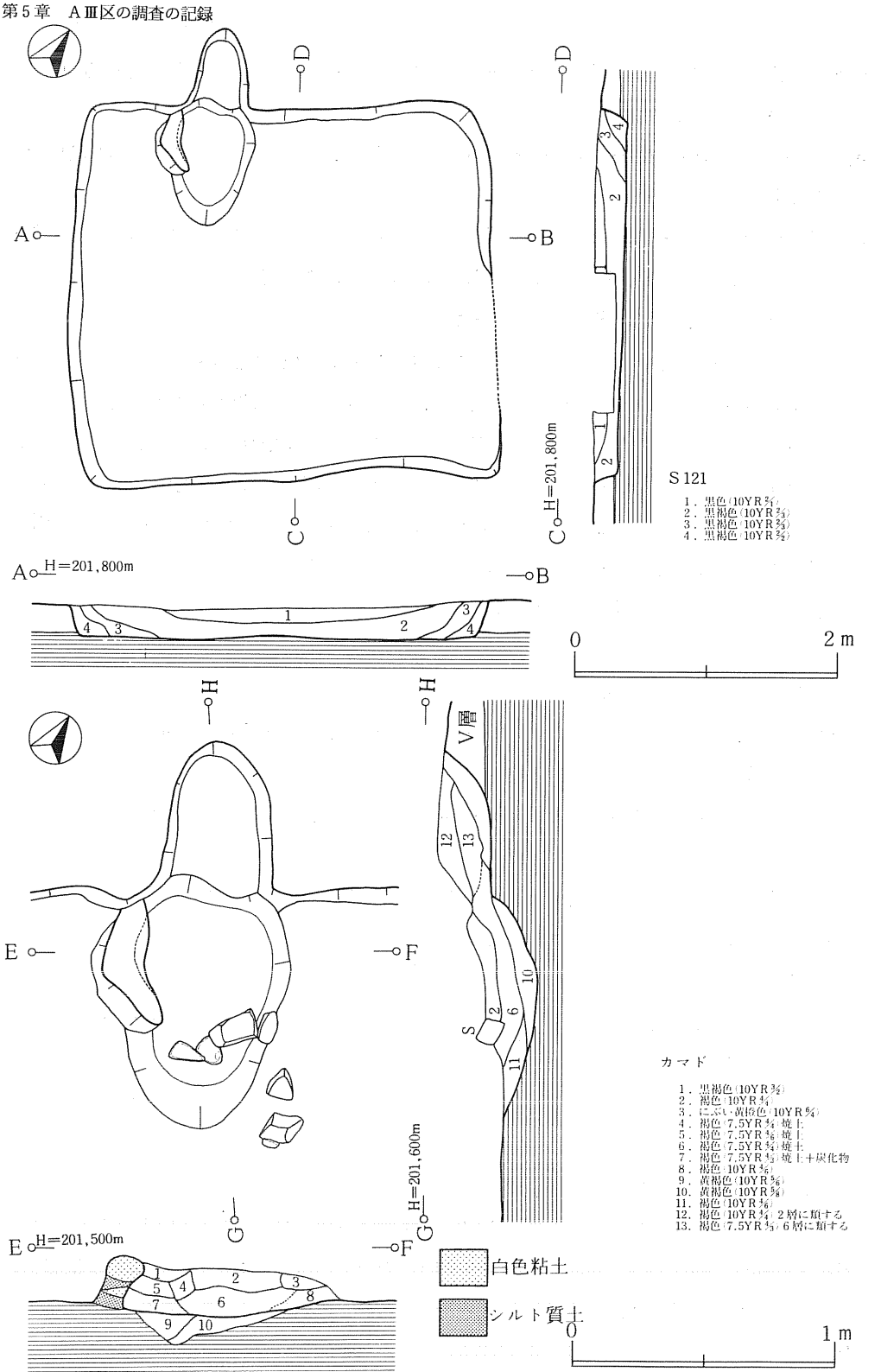
壁溝・柱穴　いずれも検出できなかった。

カマド・炉　調査範囲内では確認できなかったが、削平されている東壁や南壁東側に存在していた可能性はある。

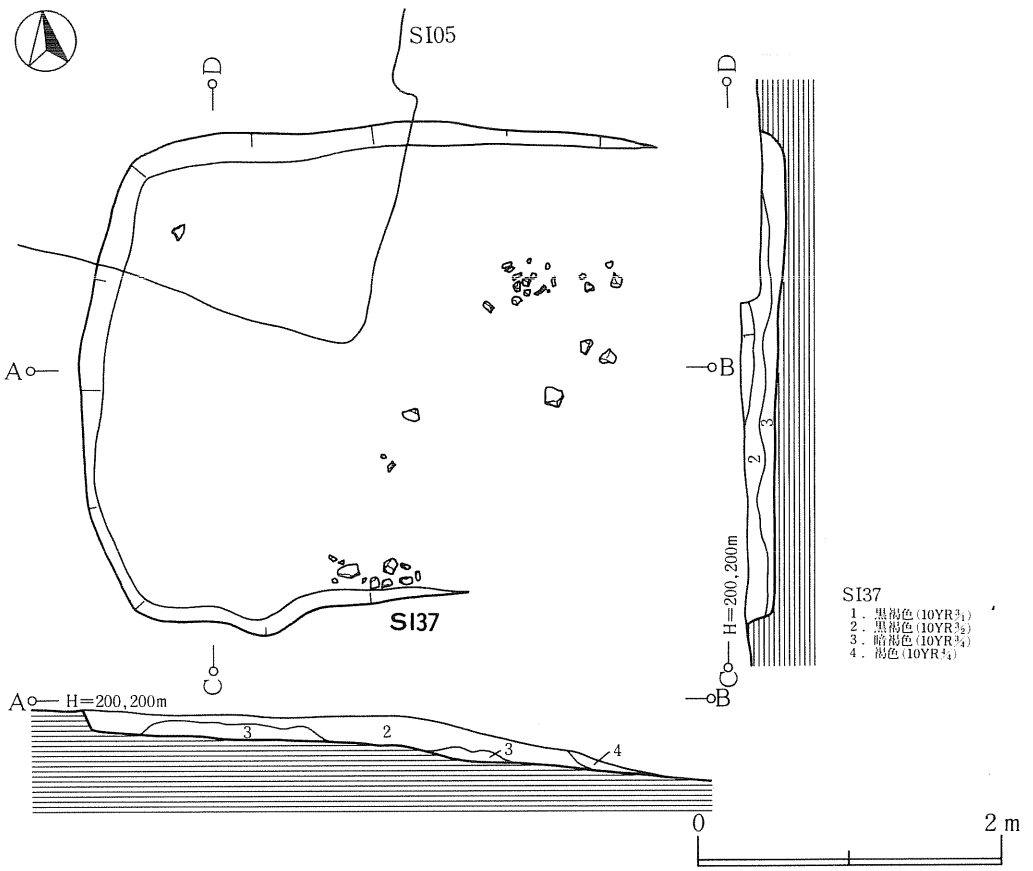
出土遺物　遺物は確認できなかった。

(2) 土坑　（ＳＫ14、第171図、図版65）

該期の土坑は、ＪＳ46グリッドでＳＩ04竪穴住居跡を切っているＳＫ14土坑１基だけである。規模・形態は、長径95㎝、短径80㎝の東西方向にやや長い楕円形を呈している。確認面からの深さは45㎝ある。覆土には、比較的多くの大湯浮石粒子が混在している。遺物は確認できなかった。



第180図　SI 21竪穴住居跡



第181図　SI 37竪穴住居跡

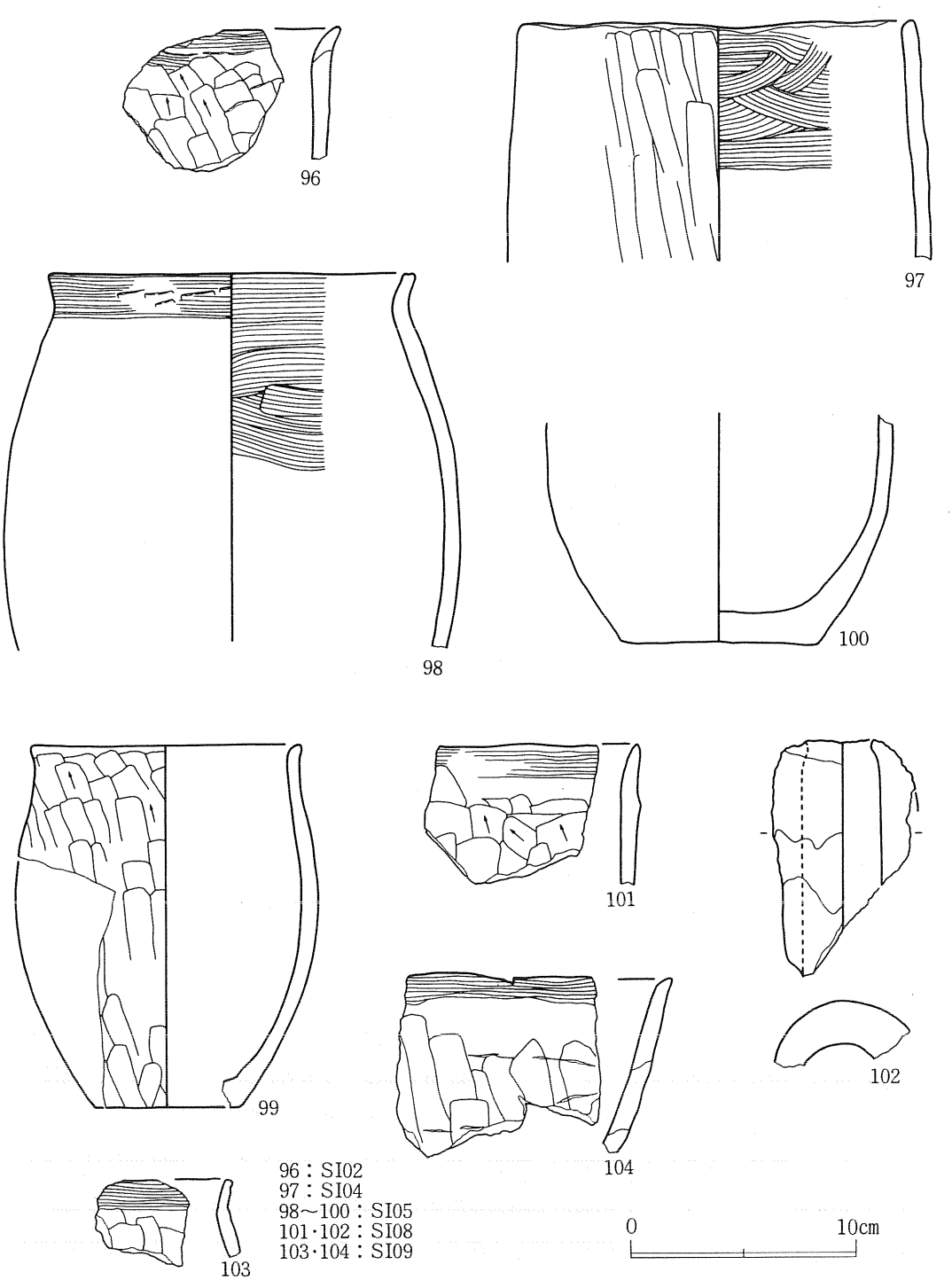
(3)　溝状遺構、柱列　（第10、185図、図版74）

ＡⅢ区では、溝状遺構４条、柱列２列を確認している。遺構確認面は、ＳＡ29柱列が第Ⅴ層上面である以外は第Ⅲ層大湯浮石層面である。ＳＤ06溝とＳＡ09柱列は、一体の施設として機能していたものと考えることができる。

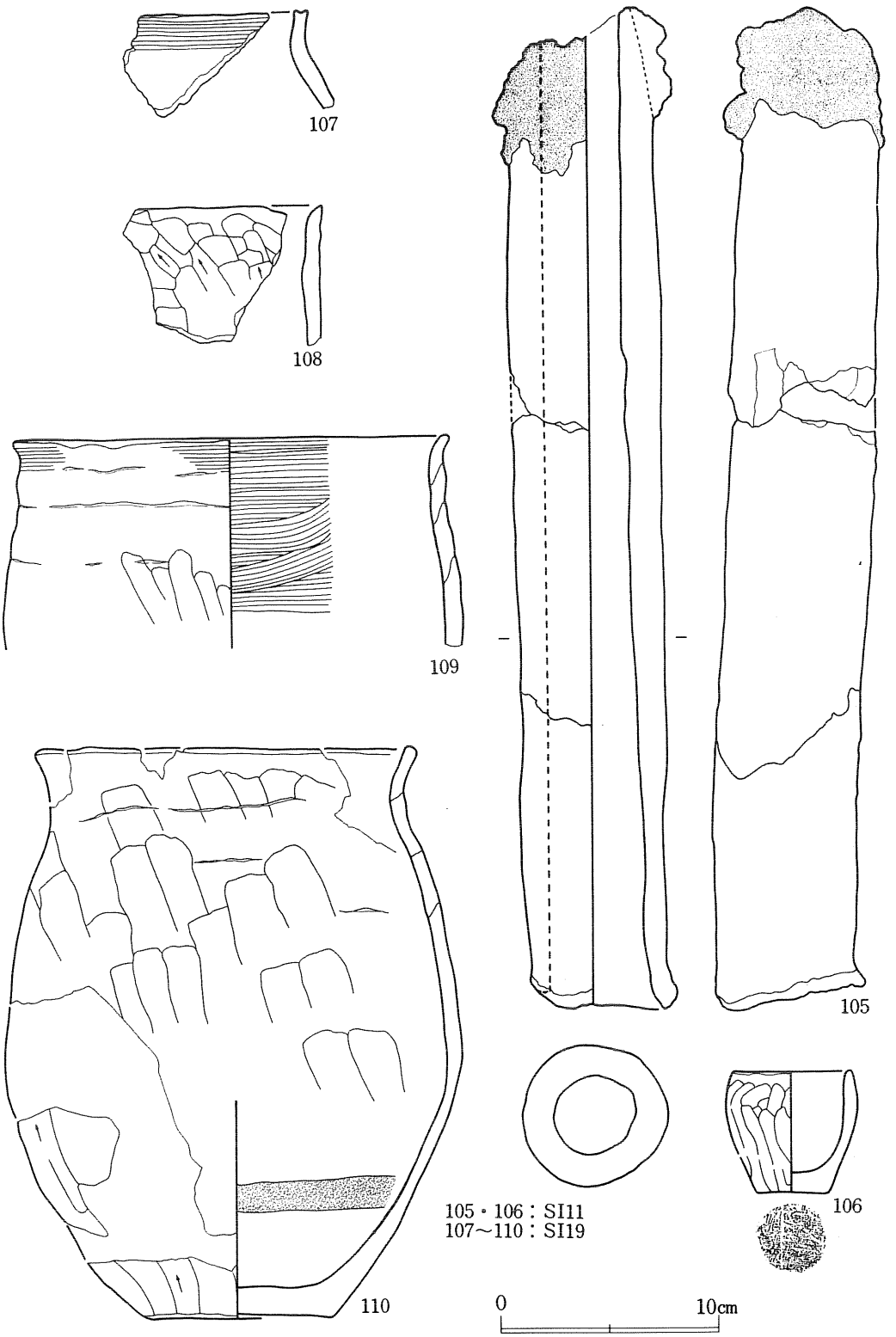
ＳＤ06・ＳＡ09、ＳＤ22　（第185図、図版74）

調査区北側、ＫＩ～ＫＯ57～64グリッドにわたって検出した。ＳＤ06とＳＡ29は北東－南西方向に延び、西端は調査区外になる。ＳＤ22（幅30cm前後、深さ20cm前後）は、ＳＤ06西端でこれと枝分かれし北西方向に延びる遺構である。両者の先後関係は不明である。

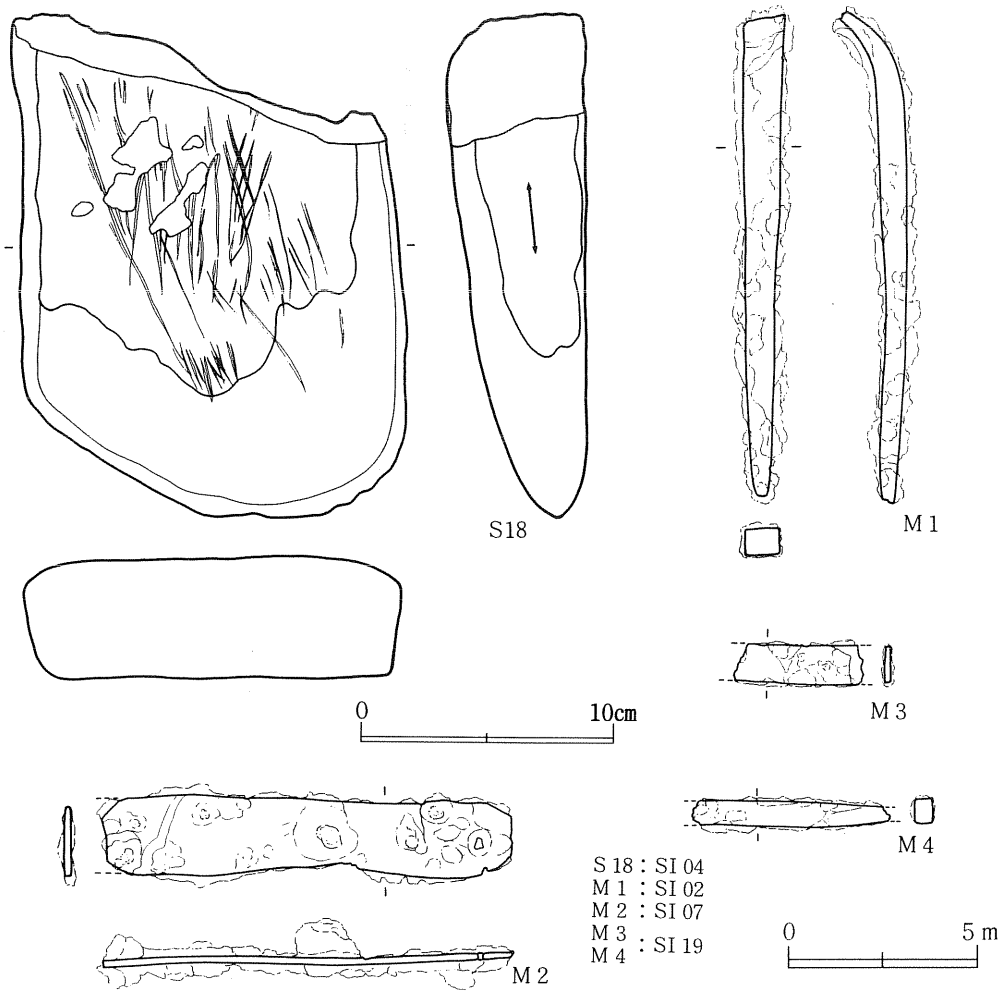
ＳＤ06は、確認できる長さが約36ｍ、幅25～40cm、深さ15～25cmを測り、溝底面はほぼ第Ⅴ層中か第Ⅵ層上面で収まる。この溝の50cm前後南側にはほぼ等間隔で並ぶ柱列ＳＡ09が確認できる。各柱穴は、径20～30cmの円形を呈し、深さ15～30cmである。柱穴底面は溝底面とほぼ同一か、前者がやや深くなる。柱穴は11検出し、柱間距離が3.14～3.75ｍで、3.37ｍを平均とする。



第182図　ＡⅢ区　遺構内出土遺物（10）・土器（１）・フイゴ羽口（１）



第183図　ＡⅢ区　遺構内出土遺物（11）・土器（２）・フイゴ羽口（２）



第184図　ＡⅢ区　遺構内出土遺物（12）・砥石・鉄製品

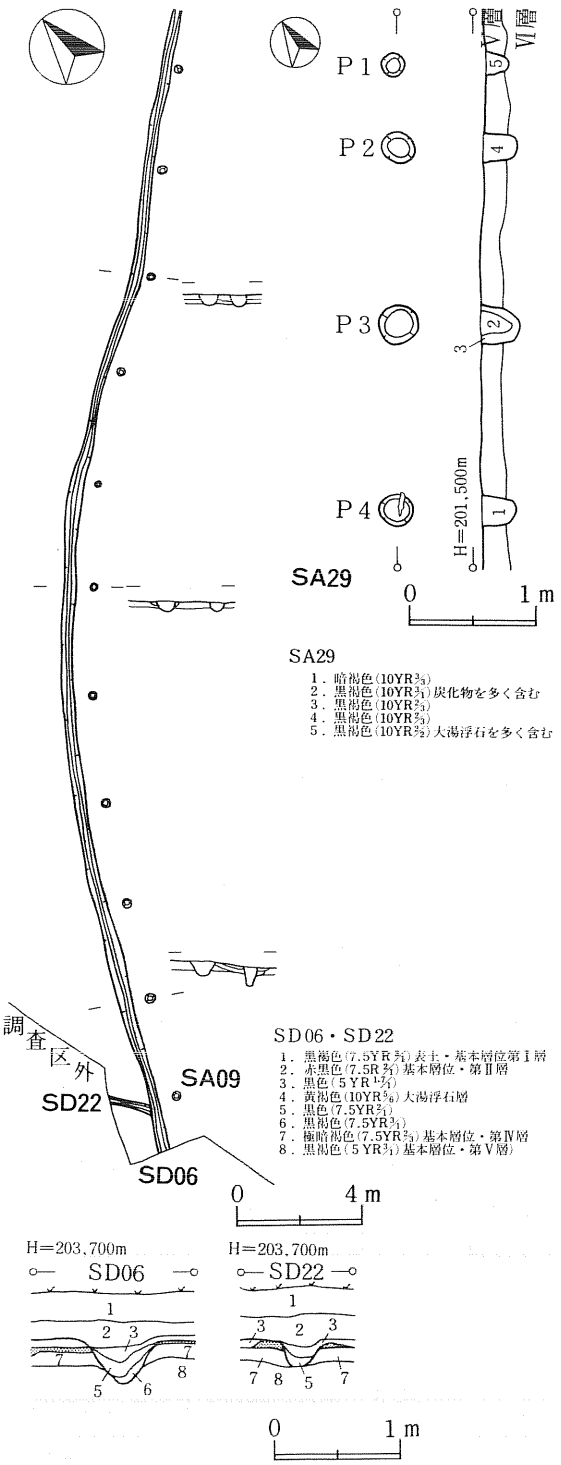
両遺構は北東－南西に延びるが、直線的ではなく幾分南東方向に求心するような緩い弧を描いているようである。求心方向には、同時代と考えている平安時代の竪穴住居跡が存在するが、最も近いＳＩ19までの距離は約38ｍある。

ＳＤ20　（第10図）

ＫＫ～ＫＮ64・65で検出した。ＳＤ06の北側約８～10ｍで、これにおおよそ平行するように配されている。確認できる長さは、断続的ながら約13ｍある。幅は40cm前後、深さは８～15cmである。

ＳＤ18　（第10図）

ＫＧ54・55グリッドで検出した。長さ約3.6ｍ、幅20cm、深さ10cmを測る。ほぼ南北方向に延び、北端部が西に屈曲している。



第185図　SD 06溝状遺構・SA 09柱列、SA 29柱列

ＳＡ29　（第185図）

ＫＡ・ＫＢ53・54グリッドで検出した。柱穴４本で構成される。各柱穴は、径18～32cmで確認面（第Ｖ層）からの深さは18～32cmを測る。柱穴底面は第Ⅵ層中に収まる。Ｐ４確認面上には炭化材が検出できた。覆土２層はＰ３の柱痕跡を示すものであろう。同４層には大湯浮石粒子を多量に含んでいる。主軸方位はＮ－33°－Ｅを示す。

第４節　小　　結

ＡⅢ区は、はりま館遺跡における上位関上面の北西端部に当たり、縄文時代・平安時代の遺構・遺物が多いものと予想していた。しかし調査の結果は、その調査範囲の広さに比較して遺構・遺物共に希薄であった。特に縄文時代の遺構・遺物が顕著に物語っている。竪穴住居跡は確認できず、Ｔピット、土坑、焼土遺構及び、前期・後期・晩期の遺物がＴピットを除けば、散発的に確認され、出土している、と表現できる。

平安時代の遺構については、調査区の南東部、段丘縁部に竪穴住居跡等がまとまって検出され、調査区北西部で北東－南西方向に延びる溝状遺構・柱列との有機的な関係が想定できる。ＳＤ06溝状遺構・ＳＡ09柱列は、その形態・方向性からＡⅠ・Ⅱ区で検出したＳＤ127溝状遺構と接続していた可能性があり、これら遺構と竪穴住居跡等に係る問題については、まとめて第12章に記すこととする。

第６章　ＡⅣ区の調査の記録

第１節　ＡⅣ区の概要

１　ＡⅣ区の位置と立地　（第186図）

ＡⅣ区は、Ｃ区や昭和57年調査区の南半と共に上位関上面に立地し、南辺を堤沢川によって画されるはりま館遺跡の南東端部にあたる。この部分の上位関上面は、南～南西側を堤沢川、東側を堤沢川から北に入る小さな沢によって区切られており、ＡⅣ区の北に隣接するＡⅢ区側から南に向かって極く緩やかに傾斜している。現地表の標高は、ＡⅣ区北端部で202ｍ、南端で197ｍである。

ＡⅣ区とＣ区、昭和57年調査区は、その地形から明らかに同一の遺跡・調査区である。発見された遺構・遺物共にそのことを裏付けているが、調査年次等の違いでこのように分けられているものである。またＡⅣ区の東側とＣ区の西側には、未調査である上位関上面が存在しており、この地区の縄文～平安時代の遺構の分布等を考える際には、当然のことながらその未調査部分も配慮されなければならない。

なお本調査区の基本層位については、第188図ＳＩ332の土層断面図を参照いただきたい。

２　遺構・遺物の分布

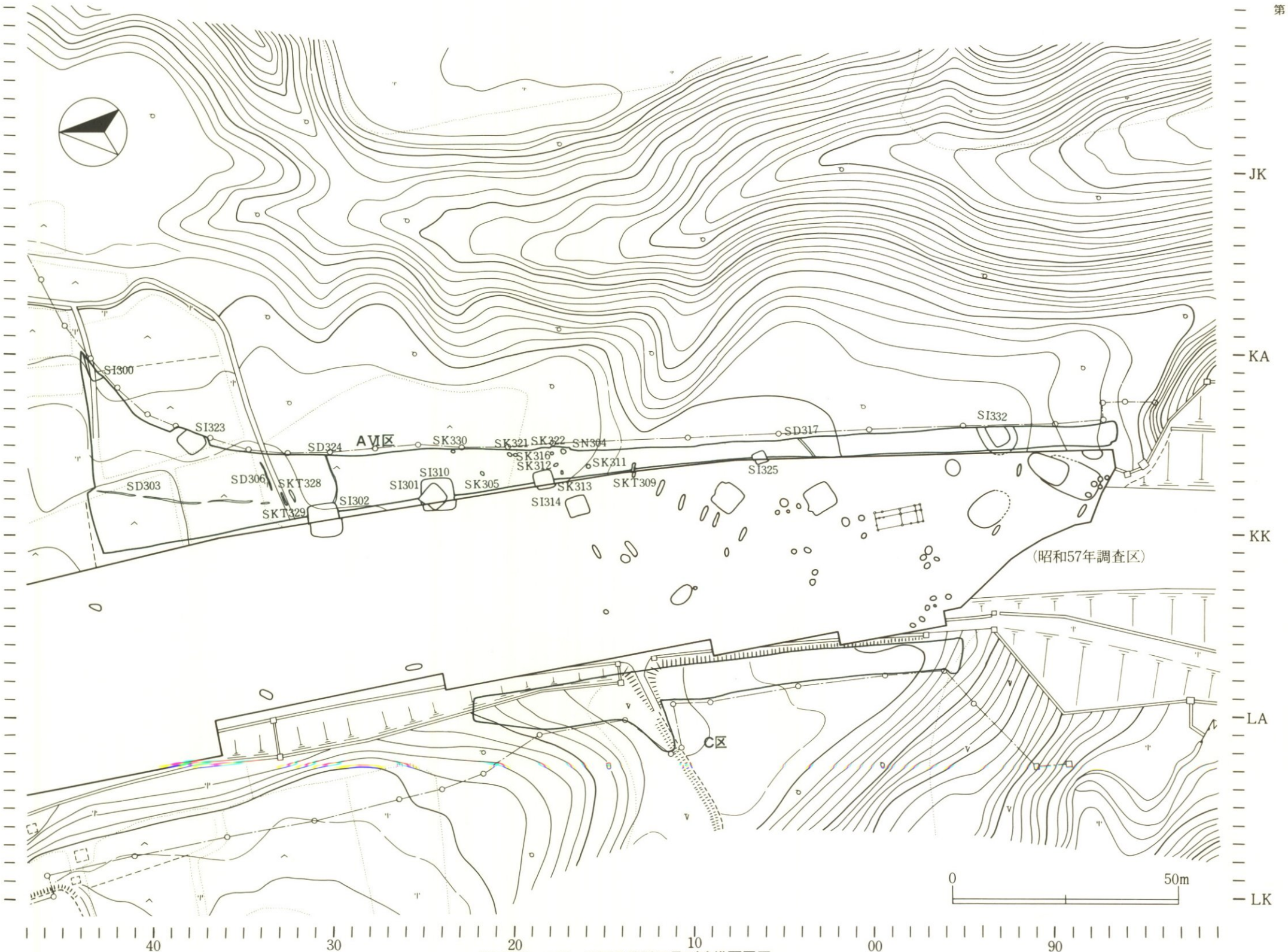
ＡⅣ区は、ＡⅡ区などと同様、第Ⅲ層大湯浮石層面で平安時代、第Ⅴ層以下で縄文・弥生時代の遺構が確認できる。ただし第Ⅲ層面は、畑耕作等による攪乱で失われている箇所も多く、覆土中に大湯浮石粒子を含んでいるか否かで時代判別した遺構もある。また溝状遺構は、第Ⅲ層面が保存されている区域でのみ確認でき、遺構底面が第Ⅴ層中に位置することからも、攪乱等により消滅した可能性を想定しておく必要がある。

縄文時代の遺構は、次の３箇所に分布している。調査区南端の竪穴住居跡１軒、調査区北側の２遺構１組のような配置を示すＴピット以外は、中央部13～23ラインの間に集中している。遺物は、遺構の分布と呼応するが、およそ10～20ライン間に比較的多く認められた。

弥生時代の遺構は、縄文時代の遺構の集中する区域で土坑１基を検出した。Ａ区では唯一の弥生時代の遺構である。

３　調査経過

９月26日、ＡⅣ区調査開始。ＡⅣ区は、44ライン以南の南北に細長い調査区である。北端部より粗掘りを始める。土捨場（ＡⅢ区）までの距離があるため、排土はベルトコンベアーとホイルキャリアを用いることにした。早くも平安時代の竪穴住居跡１軒を確認する。ＡⅣ区は



第186図　AⅣ・C区の地形図及び遺構配置図

300番台を用いるので、この住居跡はＳＩ300となる。29日、本日までに確認したＳＩ301、302の掘り下げに入る。２軒の住居跡はその西半分を昭和57年に精査しており、実に６年を経て完掘されることになった。最終的にこのような住居跡は５軒を数えることになる。

30日、ＫＧ15グリッドで土坑（ＳＫ311）を検出、確認面で弥生土器が顔をだしている。

10月３日、20ライン以北の粗掘りをほぼ終える。第Ⅲ層大湯浮石層が平面的に認められる箇所は32ライン以北でかつおよそＫＧライン以西に限られる。その他の部分は耕作により同層が失われている。４日、弥生時代の土坑ＳＫ311完掘する。６日、降雨のため遺構精査はできず、粗掘りを行っているＡＩ区に入って作業を行う。７日、本日も雨模様のであるが、33ライン以北の第Ⅳ・Ⅴ層の掘り下げを行う。遺物はあまり出てこない。11日、13ラインから99ラインまでを対象として遺構・遺物の有無を確認するための第Ⅳ・Ⅴ層掘り下げを行う。11・12ラインは小さな沢頭部分であり、ここに比較的多くの遺物が分布している。この区域での遺構は平安時代の竪穴住居跡・溝各１のみであった。12日、19ライン以北の第Ⅳ・Ⅴ層掘り下げを行う。ＫＦ19、20グリッドで土坑２基を確認する。ＫＦ25グリッド第Ⅴ層で遺物が集中していた。東側の調査区外に広がるものと見られる。

14日、昨日確認した竪穴住居跡ＳＩ323は、耕作による削平著しいが、床面より今回の調査では唯一の坏（椀）形の土師器が出土した。20日、ＫＨ・ＫＩ32でＴピット２基確認する。24日、第Ⅳ・Ⅴ層面掘り下げは92ラインまで終了する。25日、92・93ラインで黒色土の落ち込みあり、縄文時代の竪穴住居跡か。26日、本日まで12ライン以北のカマド部分を除き、ほぼ精査終了する。同時にこの部分の等高線図作成に入る。27日、調査区全域の第Ⅳ～Ⅵ層掘り下げは本日で終了する。残っている仕事は、平安時代の竪穴住居跡ＳＩ310・323カマド精査と縄文時代の竪穴住居跡ＳＩ332のみとなった。28日、平安時代の遺構精査を終了する。31日、ＳＩ332精査と平行してＡⅣ区撤収の準備も実施する。

11月１日、ＳＩ332完掘、調査区全景写真撮影をＡⅢ区側から行う。４日、ＳＩ332のレベリング終了を以てＡⅣ区の調査を完了する。雪化粧の朝であった。

第２節　縄文・弥生時代の遺構と遺物

１　縄文時代の検出遺構と遺物

該期の遺構は、竪穴住居跡１軒、Ｔピット３基、土坑６基を数えることができる。遺構確認面は、第Ⅵないし Ⅶ層上面である。

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ332Ａ・Ｂ　（第187図、図版76・77）

位置・確認状況　ＡⅣ区南端、ＫＥ・ＫＦ92・93グリットを中心に第Ⅵ層上面で正確なプランを確認した。第Ⅳ層を精査したところ、かなり広い部分にわたる黒色土の落ち込みが認められたので、これをＳＩ332とした。精査の結果、この住居跡は中心部をほとんどずらさないで立て替えられた２軒の重複であることが判明したために、新しい方をＳＩ332Ａ、古い方をＳＩ332Ｂとした。

形態・規模　ＳＩ332Ａ・Ｂの東側は調査区外で、ＳＩ332Ａの西端部は本線工事の際に失われ、ＳＩ332Ａの南東部が風倒木痕によって攪乱されているため、両住居ともに規模については推定値である。また、ＳＩ332Ａ・Ｂ共に、壁側の床面が住居中央部の床面よりも一段高くなる、いわゆる二段構造の床面をもつ住居跡である。高いほうの床面をベッド状床面、低い方の床面を土間状床面と呼称する。

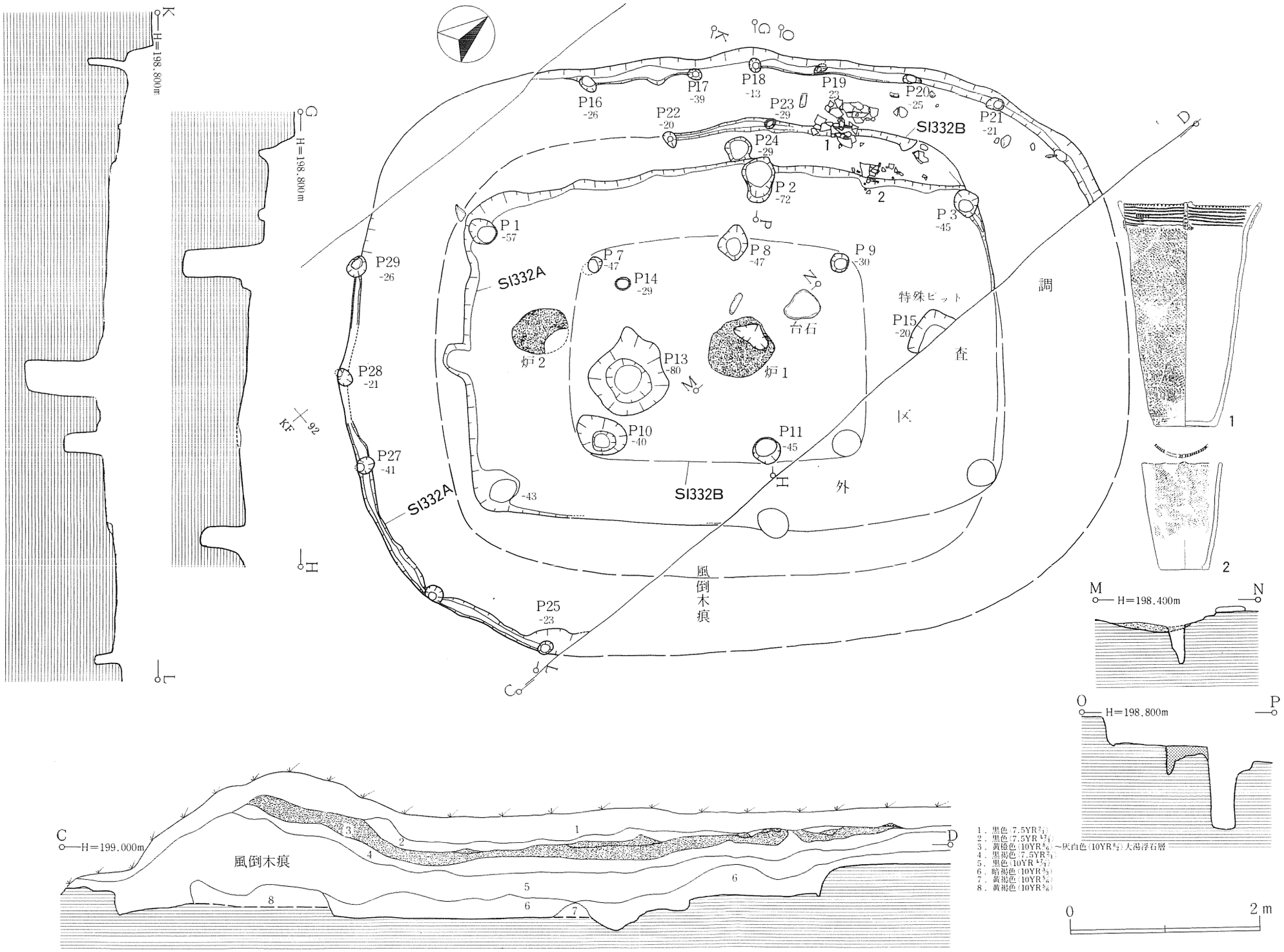
ＳＩ332Ａは長径8.2ｍ、短径6.4ｍ、ＳＩ332Ｂは長径5.9ｍ×短径4.7ｍで、いずれも隅丸長方形を呈する。土間状床面までの深さは、この周辺の地形が南に緩やかに下降するため、北側で深く南側で浅い。ＳＩ332Ａの北西側確認面からベッド状床面までの深さは28㎝で、それからさらに土間状床面までは16㎝を測る。床面積は、ＳＩ332Ａの全体で44.2㎡、土間状床面が19.3㎡、ＳＩ332Ｂの全体で25.3㎡、土間状床面が7.0㎡と推定される。

覆土　土層断面図は調査区東辺のもので、ＳＩ332Ａの覆土状況を示している。１～４層はそれぞれ基本層位のⅠ～Ⅳ層に相当する。３層は大湯浮石層で、住居中央部が緩やかにくぼむレンズ状堆積を示している。５、６層は周囲からの流入土と考えられるが、堅さしまりともあまりなく、地山風化土粒子を含む。７層はＳＩ332Ａに伴う特殊ピットの外側に外堤状に盛られた地山土からなる部分である。８層は、最近倒れたアカシヤの木（根もとの径約35㎝）によって持ち上げられたＳＩ332Ａの床部分である。

床・壁　前述したようにＳＩ332Ａ・Ｂ共に二段構造の床面をもつ住居跡である。

ＳＩ332Ａのベッド状床面部分は壁から1.0～1.5ｍの幅で全周し、北東のＳＩ332Ｂのベッド状床面と重複する部分ではＳＩ332Ｂの壁溝と床面に数㎝～10㎝厚の貼床を行っている。しかし、土間状床面部分は、ＳＩ332Ｂの土間状床面の方が数㎝低いにもかかわらず、貼床は施していない。ベッド状床面・土間状床面ともに堅くしまっており、土間状床面中央部を除くと平坦である。ベッド状床面から土間状床面へは急傾斜で移行しており、両者の高低差は北～北西部で約15㎝、南部で約10㎝である。

ＳＩ332Ｂのベッド状床面の原形が残っているのは、ＳＩ332Ａの構築の際に貼床された部分のみである。平坦で堅くしまっている。土間状床面は、ＳＩ332Ａでもそのまま使用されたと考えられ、非常に堅く平坦である。ベッド状床面と土間床面の高低差は約10㎝と推定される。



第187図　SI　332A・B竪穴住居跡

ＳＩ332Ａの壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　ＳＩ332Ａ・Ｂ共に幅８～15cm、深さ数cmの壁溝を有しており、不明確な部分もわずかにあるもののほぼ全周するものと考えられる。ＳＩ332Ｂの壁溝の大部分はＳＩ332Ａ掘り込みの際に削平されたものと思われる。両住居跡の壁溝の中には小ピットがある。この小ピットは、口径10～20cmと小さいが、深さが20～40cmとしっかりしており、壁柱穴と考えられる。ＳＩ332Ａの場合、南西辺壁柱穴掘り方は、住居中央に向かって緩く傾斜しているものの、他辺ではほぼ垂直に掘り込まれている。

主柱穴は土間状床面の外縁にあり、片側３本ずつの計６本と考えられる。Ｐ１・２・３・４（これに未調査部分に推定されるＰ５・６が加わる）がＳＩ332Ａの、Ｐ７・８・９・10・11（同様にＰ２がこれに加わる）がＳＩ333Ｂに伴うものである。その他のピットとしては、Ｐ15がピット外周の一部に土堤状の盛土を伴ういわゆる特殊ピットと呼ばれるものであろうか。Ｐ13はその埋土の状況と位置からＳＩ332Ａよりも新しい可能性が強いが判然としない。Ｐ24は、ＳＩ332Ａの貼床を除去した後に検出された柱穴であるが性格等は不明である。

炉　炉は床面中軸線上から炉１・２が検出された。その位置などからＳＩ332Ａに伴うと考えられるが、炉１はＳＩ332Ｂでも使用されていたものと思われる。２カ所の炉ともよく焼けて赤化が著しく、炉１はその周囲から緩くくぼんでいる。

その他の施設　Ｐ15は特殊ピットと考えられ、住居中軸線上の土間状床面東側に構築されているあり方は、昭和57年調査のＳＩ007の例に酷似ししている。また、炉１とＰ９の間に台石が床面にほぼ接して出土している。使用されていた場所を動いていないと思われる。

出土遺物　ＳＩ332Ａの床面及び覆土上位から、第191図１・２、192図４・５の土器、193図Ｓ１・２の石器が出土している。土器１・２は、北西辺のベッド状床面上から潰れた状態で出土した。１は、底部からわずかに外傾して立ち上がった長い胴部が、外傾する口縁部に至る深鉢形土器である。口縁は、平口縁の４ケ所に山形の突起を付した形の波状を呈する。口縁部文様帯には、縄文の側面圧痕文が口縁に平行して６条施され（実測図の中央左側だけは５条と７条の部分がある。）４ケ所ある波頂部間の２ケ所には、上から３条目と４条目を結ぶ短い側面圧痕文が縦位に６条付されている。また、４ケ所の山形突起の一方からは、下端でボタン状に丸くなる隆帯が垂下しており、隆帯上には側面圧痕文、ボタン状部分には小さな刺突が施されている。口縁部下端には隆帯がなく、口縁端から口唇部には刻み目状の側面圧痕文が付されている。胴部には羽状縄文が付されているが、胴部文様の上端（口縁部の直下）には、縦位の側面圧痕が点列状に付されている。胎土には繊維をほとんど含まず、細かい砂粒が多い。焼成は良好で、器外面の胴部中位以上と内面胴部下半に

は煤状炭化物が付着している。２は、わずかに外傾して立ち上がった胴部がそのまま口縁に至る深鉢形土器である。平口縁の１ケ所にのみ、２個一対と考えられる低い突起が付され、口唇部には刻み目状の側面圧痕文が付されている。胴部から口縁部までの全面には、原体ＬＲの単節斜縄文が施されている。胎土には砂粒を含み繊維痕は殆ど見えないが、器全体は軽い。内面には、口縁部が横位の、それ以下が縦位のていねいなみがきが施され、他の土器にはあまり見られない貫入状の微細なヒビが縦横に入っている。これは、土器全体を成形した後、本体の胎土とは全く異なる砂粒を含まない良質の粘土を、内面にのみ厚さ0.5㎜前後で上塗りしたためである。破片の断面を見ると、本体は灰色を呈するのに対し、上塗りした粘土はにぶい黄橙色であり、口唇部を見ても一目瞭然である。器内外面には、煤状他炭化物が付着している。４と５は、住居跡中央部の覆土上位から出土した縄文時代後期の粗製深鉢形土器の口縁部破片である。縄文時代前期最末葉と考えられる本住居跡が、後期になっても完全に埋まりきらず、わずかにくぼんでいた部分に捨てられたものと思われる。石器Ｓ１は縁辺の３ケ所に剥離痕のある自然礫で、形状は半円状扁平打製石器に似る。Ｓ１・２ともに土器１・２の周囲から出土している。

(2)　Ｔピット　（第189図、図版78）

ＡⅣ区で検出したＴピットは、３基である。いずれも坑内出土の遺物は認められなかった。

ＳＫＴ309（昭和57年調査ＳＫＴ023）

ＫＦ・ＫＧ13グリッド、第Ⅵ層地山漸移層で検出した。遺構西側１／３は、昭和57年調査時に確認している。長軸はほぼ東西方向を指し、その長さ3.35ｍ、幅0.4～0.65ｍ、確認面からの深さは１ｍを測る。覆土３層が地山の二次堆積土である。

ＳＫＴ328

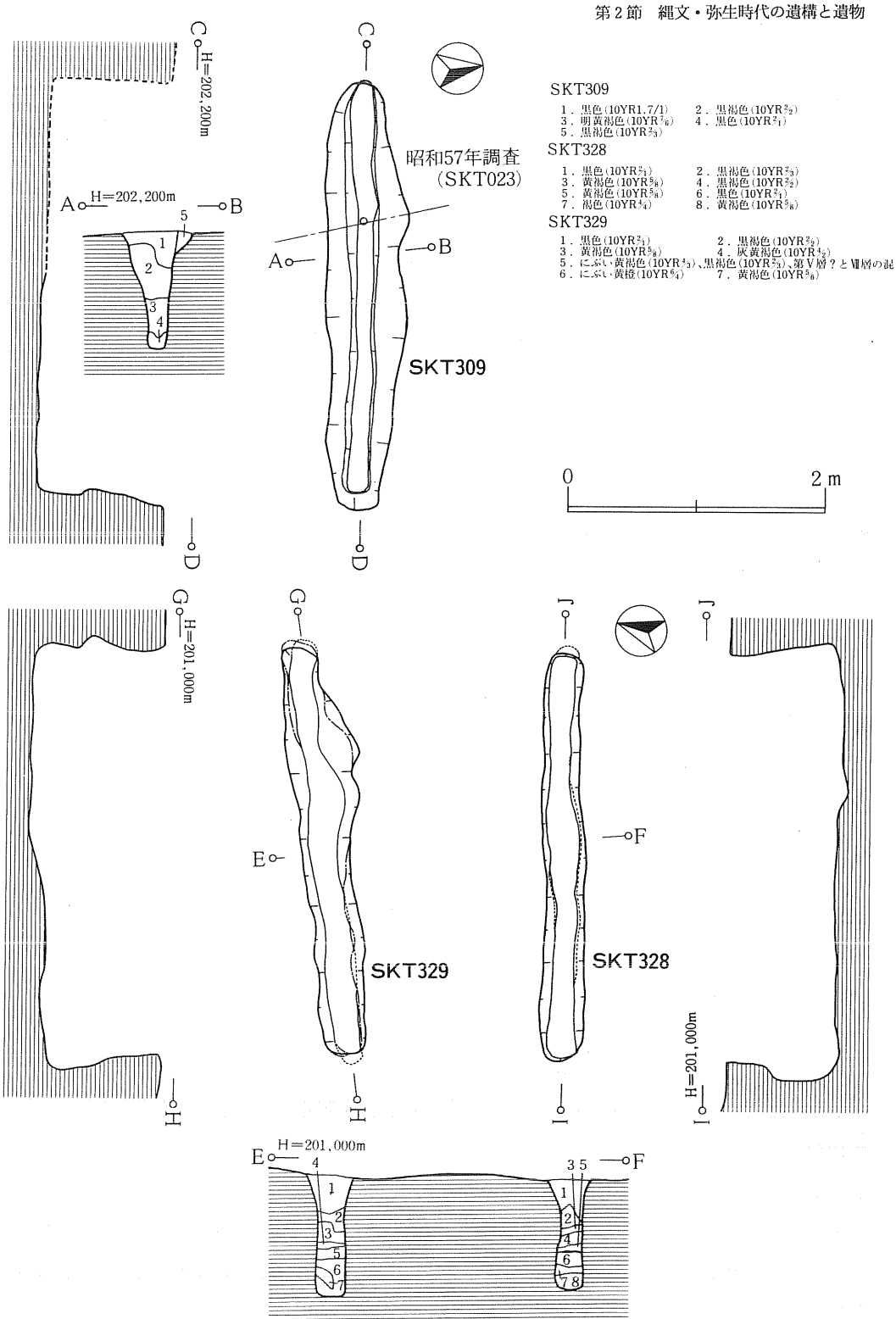
ＫＨ・ＫＩ32グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。北約1.5ｍには方向を一にするＳＫＴ329が位置している。長軸はほぼ東西方向を示し、確認面での長さ3.2ｍ、幅0.3～0.35ｍ、深さは0.85～0.95ｍを計測する。覆土３・５・８層は地山の二次堆積土である。

ＳＫＴ329

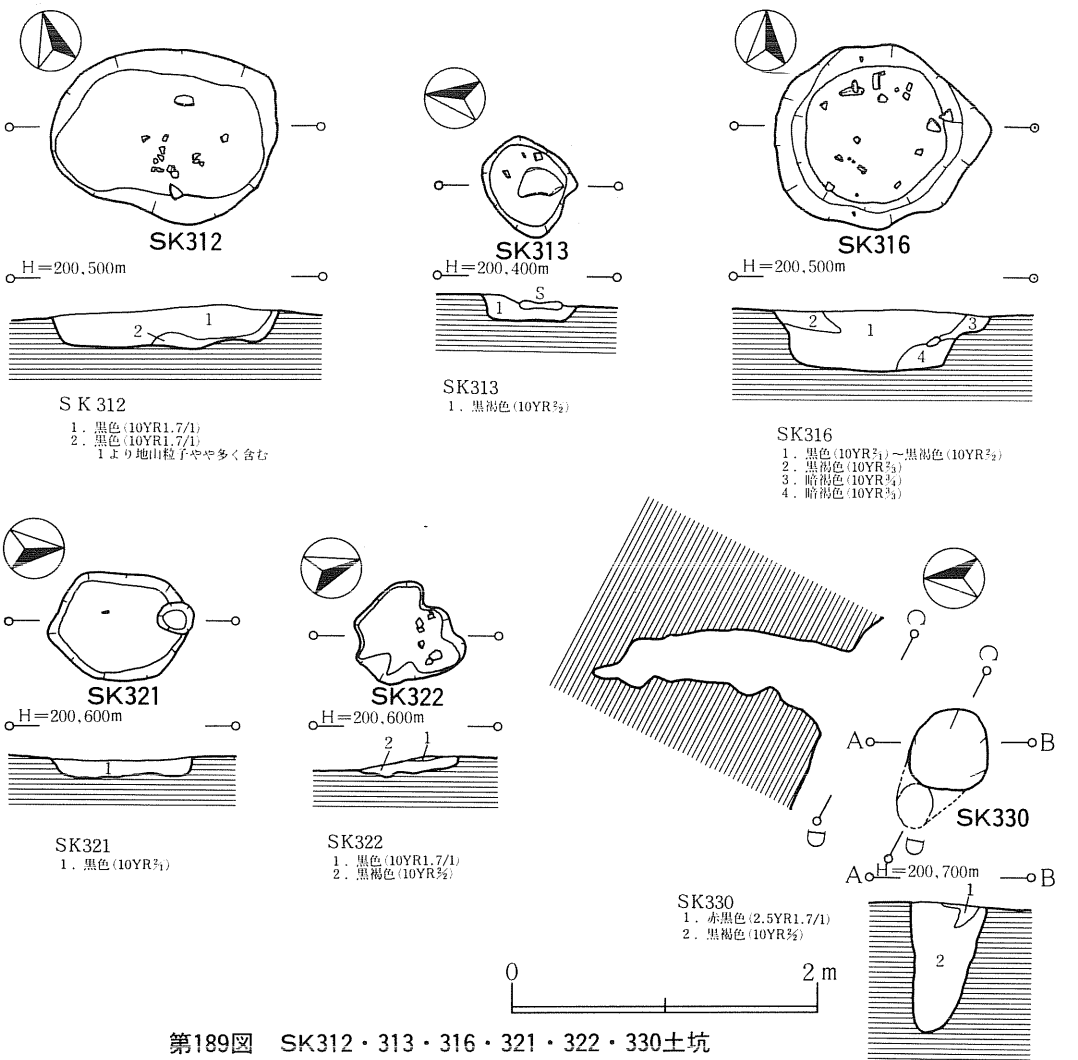
ＫＨ・ＫＩ32グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。長さ3.3ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さは0.9～１ｍを測る。覆土３・６層は、地山の二次堆積土である。

(3)　土坑　（第190図、図版79・80）

ＡⅣ区で検出した土坑のうち、縄文時代に帰すると考えられるのは６基である。この内、唯一遺物の確認できなかったＳＫ330については、その形態と類例から該期の遺構として扱って



第188図　SKT 309(SKT023)・328・329Tピット



第189図　SK312・313・316・321・322・330土坑

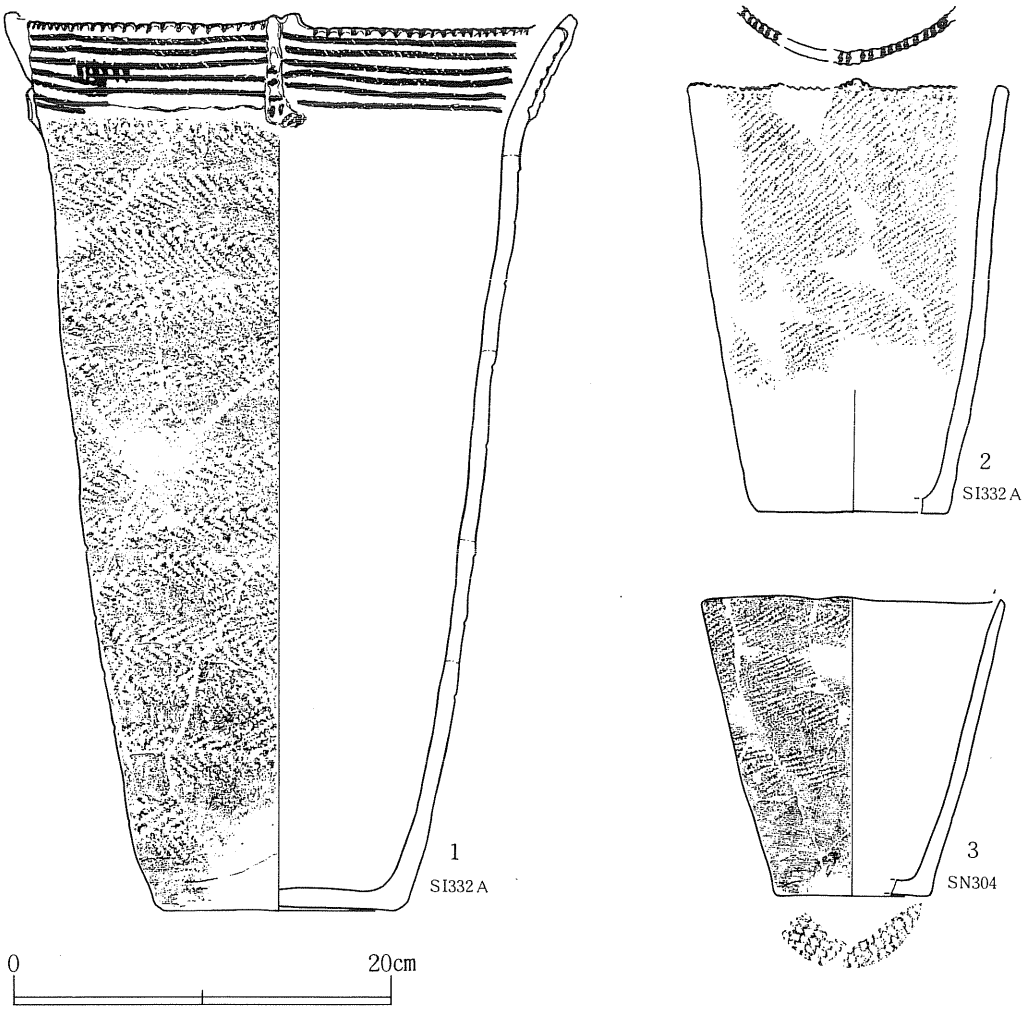
いる。他の５基は、17～20ラインの範囲内に集中している。

ＳＫ312

ＫＦ・ＫＧ17グリッド、第Ⅵ層地山漸移層で検出した。長さ1.5ｍ、幅1.15ｍの東西方向にやや長い楕円形を呈している。確認面からの深さは28cmを測る。遺物は、覆土上～中位にかけて10数片出土している。

ＳＫ313

ＫＧ17グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。径55～60cmの不整円形を呈する。深さは15cm、壁・底面とも根による攪乱を受け凹凸している。確認面上において平らな台石と土器片が出土している。



第190図　AⅣ区　遺構内出土遺物（１）・土器（１）

ＳＫ316

ＫＦ17グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。長径1.4ｍ、短径1.2ｍの不整円形を呈しているが、土坑構築時は径約1.1ｍであったと考えられる。確認面からの深さは40cmである。覆土上～中位で土器片が出土している。

ＳＫ321

ＫＦ20グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。長さ85cm、幅70cmの不整な多角形を呈する。深さは12cmで、覆土中より土器片が１点出土している。

ＳＫ322

ＫＦ19グリッド、第Ⅶ層地山面ＳＫ321の南隣で検出した。径60～65cmの不整円形を呈して

いる。深さは10cm、坑底面には小さな凹凸が認められる。覆土より土器片が出土している。

ＳＫ330

ＫＦ23グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。径55cmの柱穴様を呈する。本土坑は、斜め（北西方向）に掘り込まれ、斜距離で深さ1.65ｍを計測する。傾斜角は、垂直方向からみて約30°ある。遺物は出土しなかった。このような掘り込みをなす遺構はＡⅢ区（ＳＫ23）、Ｂ区（ＳＫ11）、小坂町大岱Ｉ遺跡（ＳＫ30）などでも確認されている。

3　弥生時代の検出遺構と遺物

該期の遺構は、縄文時代の土坑が集中している区域の南に位置する土坑１基である。

ＳＫ311　（第196・197図、図版81）

ＫＧ15グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。確認面では植物根による攪乱を受け、径１ｍ前後の略円形を示していたが、坑底面での長さ1.1ｍ、幅0.8ｍの楕円形を意図する規模・形態であったと考えられる。確認面からの深さは40cmであり、概ね垂直に掘り込まれている。

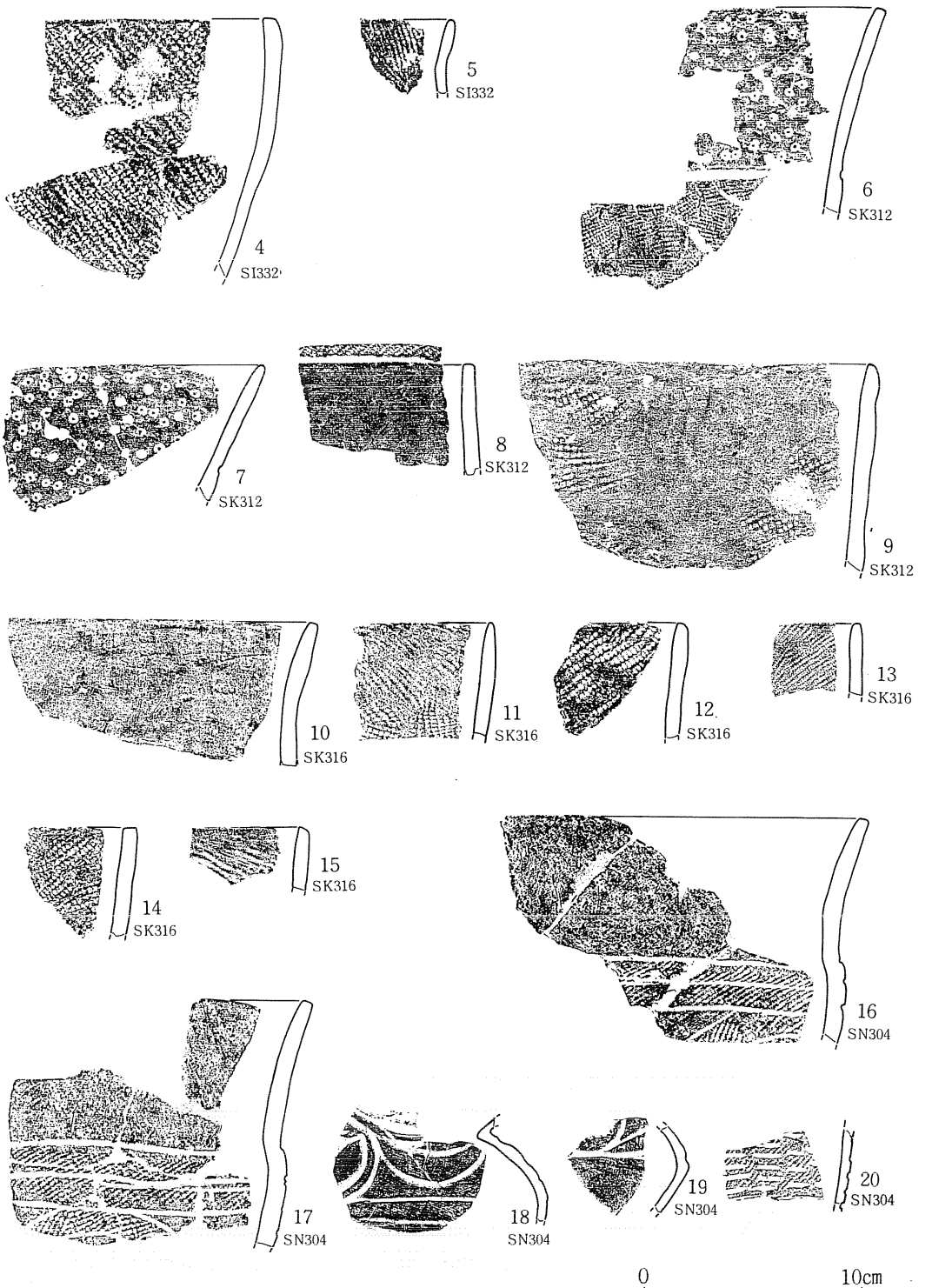
遺物は、土器片が少量出土している。47は唯一復元・図示できたもので、直線的に外傾する坏部と緩やかな「八」の字を描いて広がる脚部からなる高坏である。坏部と脚部の接点に指頭による沈線によって生み出された段（稜）は特徴的である。脚部と坏部（一部）は確認面上から、坏部（一部）は坑底面直上より出土し、接合できた。土器の法量は、脚部の１／３、坏部の３／４を欠損しているが、推定口径16.8cm、器高14.5cm、推定脚部径10.4cmとなる。器面の施文・調整は、坏部外面でＬＲ縄文横位回転施文、内面体下半でナデあるいはケズリ、その他は横位・斜位のミガキである。面取りされた口唇部にも外面と同じ縄文が認められる。脚部は、外面で縦位のナデツケ様のミガキで光沢を放つ。この部位の調整が最も丁寧で、縦方向をかなり意識しているように感じる。内面は、ナデであるが砂粒の動きからケズリのように見える。脚部接地面も口唇部同様面取り（ケズリ）され、この上をミガキすわりを良くしている。胎土には砂粒を比較的多く含んでいるが、緻密で焼成も良好である。色調は赤褐色～明褐色を呈する。

この土器は、脚部を見ればいわゆる古式土師器のような器形・調整方法を示している。しかしながら坏部のこのような縄文施文は土師器にはなく、ここでは弥生土器の範疇に入れているが、県内外での類例抽出、編年的位置づけを含めて、以後の課題としなければならない。

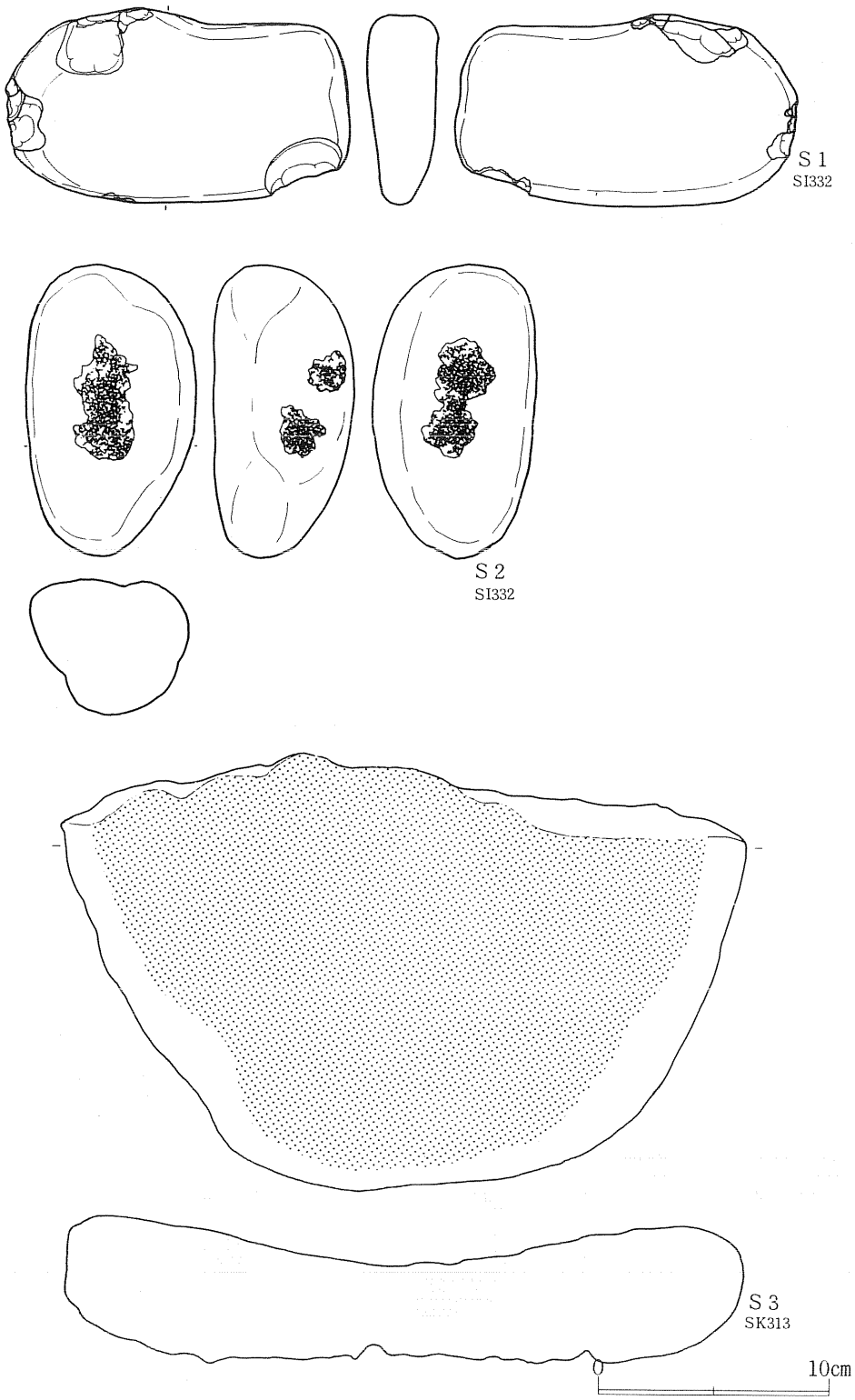
2　遺構外出土遺物

(1)　土器　（第194・195図）

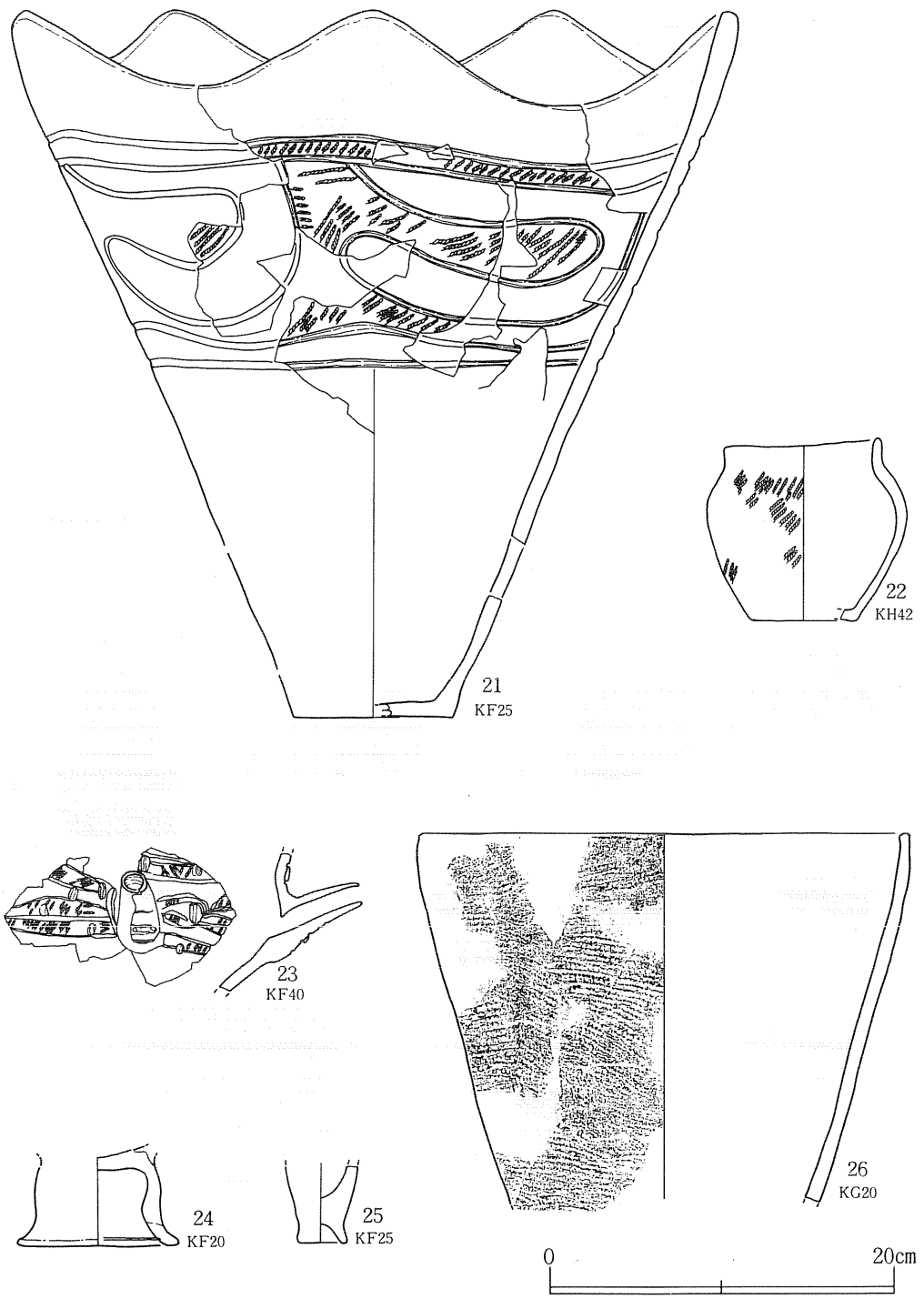
土器は、縄文時代前期・後期・晩期のものが出土している。



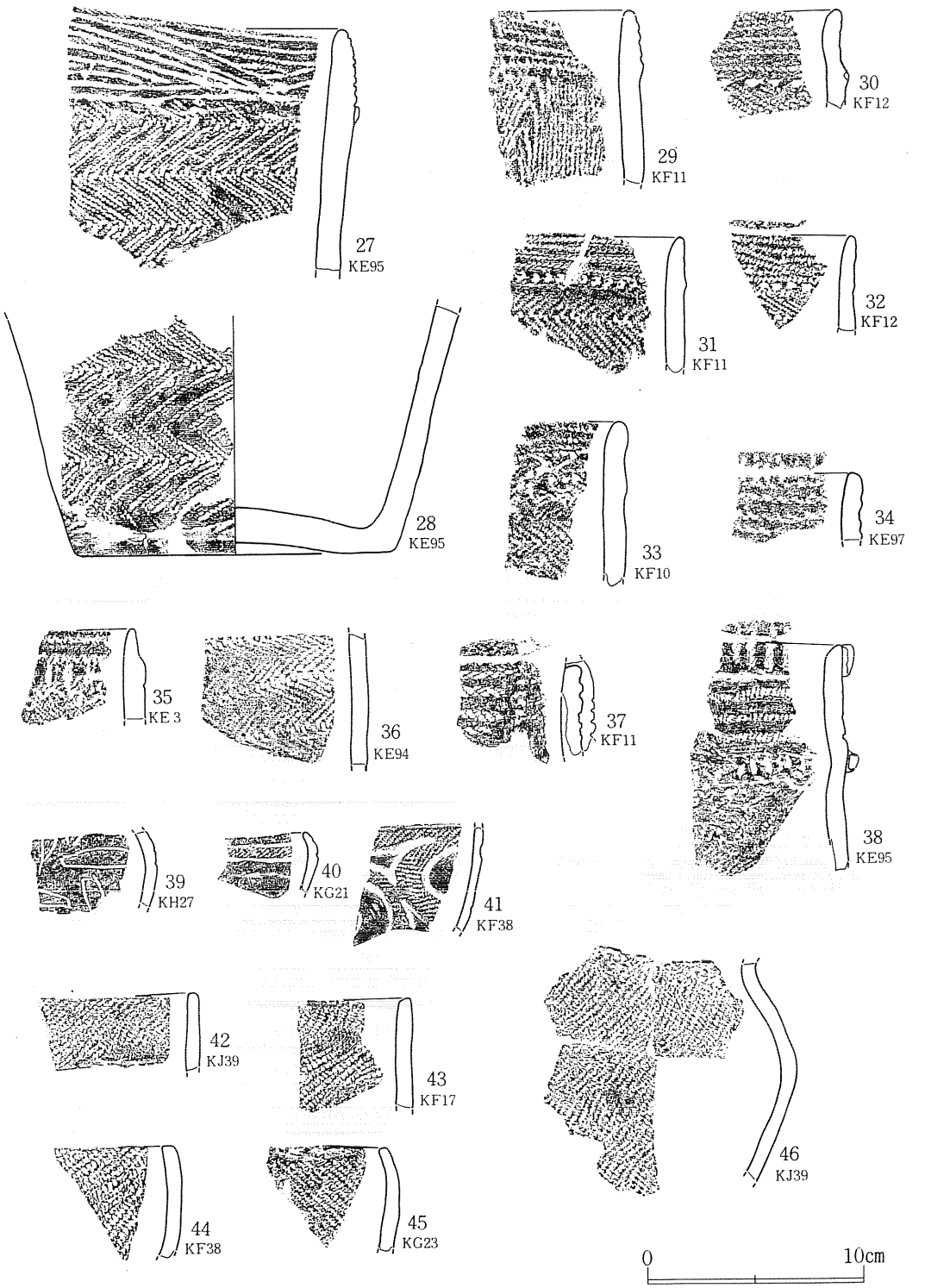
第191図　AⅣ区　遺構内出土遺物（２）・土器（２）



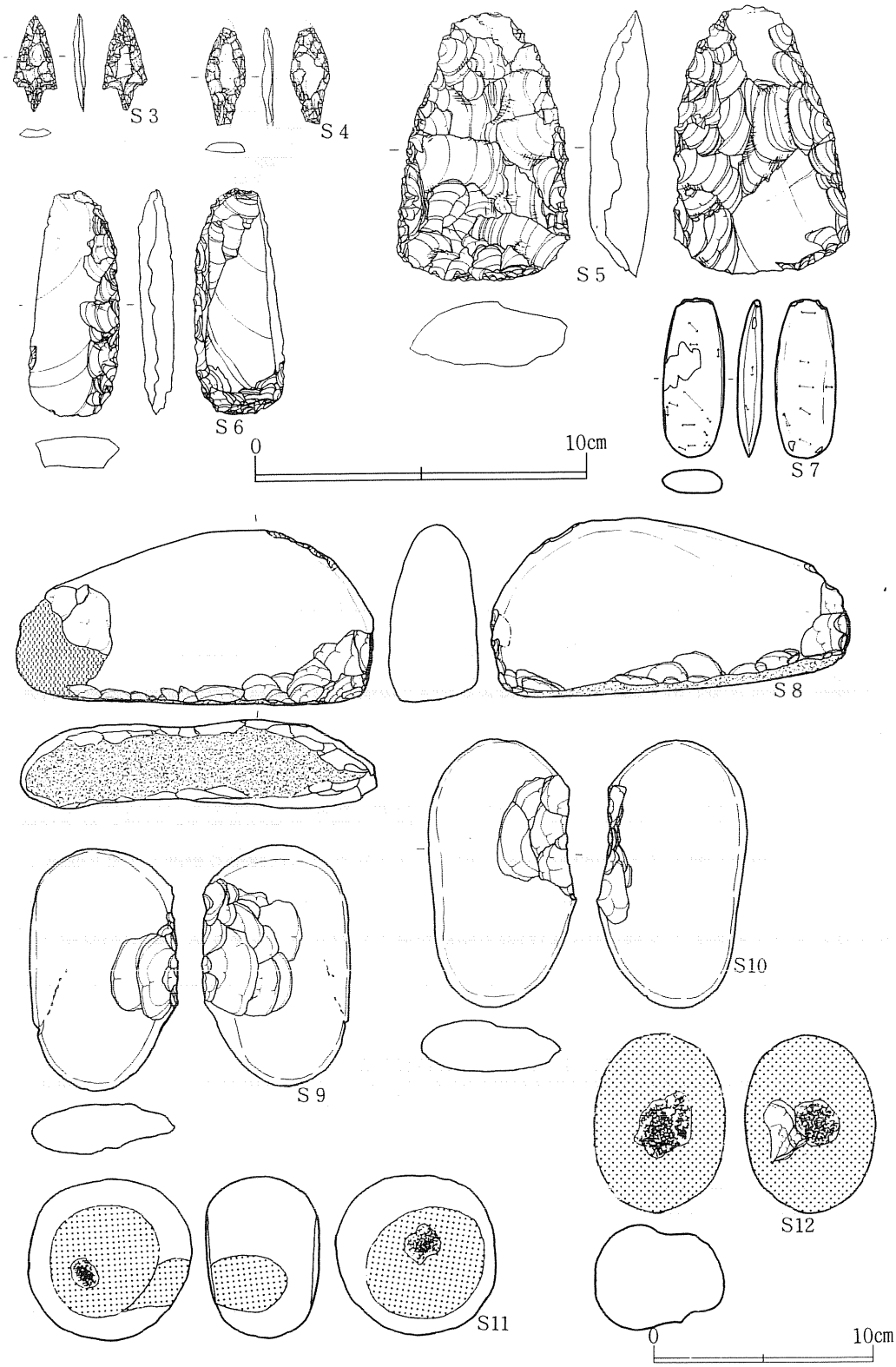
第192図　AⅣ区　遺構内出土遺物（3）・石器



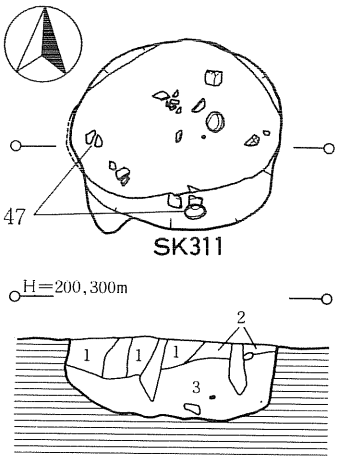
第193図　AⅣ区　遺構外出土遺物（１）・土器（１）



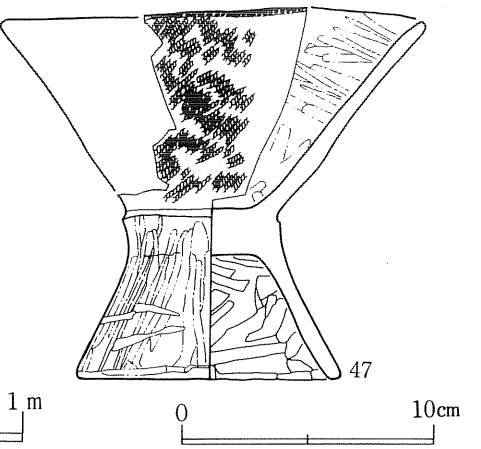
第194図　AⅣ区　遺構外出土遺物（２）・土器（２）



第195図　AⅣ区　遺構外出土遺物（３）・石器



第196図　SK311土坑



第197図　AⅣ区　遺構内出土遺物（３）・SK311

195図27～38が前期の土器で、全て後葉のものである。27～35は、短い口頸部文様帯の下端に、形ばかりの低い隆帯が付されたものである。27・28は同一個体の上半と下半である。４つの波頂部を持つ波状口縁を呈し、口頸部の縄文の側面圧痕文も波頂部を単位として施文されている。胴部には、付加条のある羽状縄文が横位に施されている。他の土器の隆帯上には、30・32が棒状工具による、31・38が半裁竹管による刺突列が施され、35は縦位の側面圧痕列が付されている。37は波頂部から垂下する隆帯が、38は口縁端にも縦位の側面圧痕列が付された隆帯が貼付されている。

後期の土器は、39・40が前葉に、21・23が中葉～後葉に属するものである。21は、５つの波頂部がある。波状口縁を呈する深鉢形土器である。無文化された口縁部と胴部下半との間に、沈線と磨消縄文手法によって、５単位と考えられる文様が横位に展開している。23は、磨消縄文手法によって描かれた文様に中にいわゆる貼瘤が施された注口土器である。胴部の貼瘤は、コーヒー豆を縦位に張り付けたものであるが、小破片で出土している口縁部の瘤は先端が尖る突起状を呈している。

晩期の土器は、前葉のもので、22・24・41がこれに当たる。

26・42～46は後期～晩期の粗製深鉢形土器で42と46は同一個体である。25も、この頃のミニチュア土器である。

⑵　**石器**　（第196図）

196図Ｓ３～12が遺構外から出土した石器である。石鏃（Ｓ３・４）、箆状石器（Ｓ５）、削器（Ｓ７）、半円状扁平打製石器（Ｓ８）、くぼみ石（Ｓ11・12）が出土している。Ｓ９・10は、扁平な円礫の一方の側辺に裏表両面から剥離したもので、その部分がわずかに使用されており、半円状扁平打製石器の仲間と考えられる。

第３節　平安時代の遺構と遺物

１　平安時代の検出遺構と遺物

ＡⅣ区で検出した平安時代の遺構は、竪穴住居跡７軒、土坑１基、焼土遺構１基、溝状遺構４条を挙げることができる。遺構の立地は、ＡⅢ区と同じ関上段丘上面であり、標高200ｍ前後である。

(1)　竪穴住居跡　（第198～208図、図版83～90）

確認した７軒の竪穴住居跡は、そのいずれも一部ないしは半分が調査区外に及んでいる。ただし調査区西端に位置する５軒は、昭和57年調査において住居西半分を精査していた遺構であり、実に６年ぶりに完掘されたことになる

ＳＩ300　（第198・199図、図版82・83）

位置・確認状況　ＫＡ43、ＫＢ42・43グリッド、第Ⅶ層地山面にて検出した。この近辺は畑作による削平を受けており、表土（＝耕作土）の下が地山面となっている。遺構南東部は調査区外である。

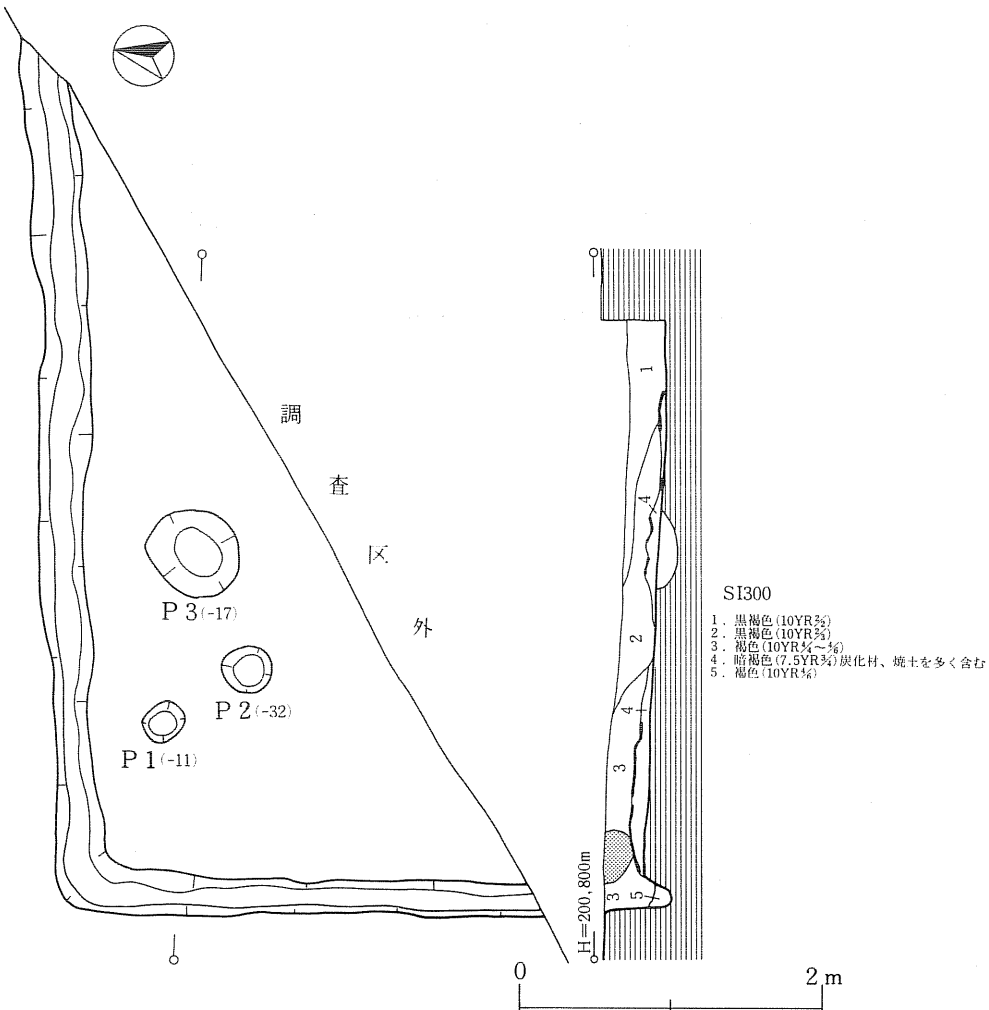
形態・規模　遺構の大部分が調査区外であるので形態・規模は明らかにできないが、東西長5.8ｍ以上、南北長3.2ｍ以上になる。主軸方位はＮ－10°－Ｗを示す。

覆土　確認面では大湯浮石・地山小ブロックが斑状に多く含まれており、人為的に埋められた様を呈している。これを掘り進めると、炭化材（物）が多量に現れ、同一面から下位には焼土が広がり、焼失家屋であることが分かる。

床・壁　床面はやや凹凸しているが、比較的堅く締まっている。壁高は最大で37㎝を計測する。床面もしくは床面直上から多量の炭化板材が確認できた。材の一部（下端）が壁溝に入り込んでいることから、材を壁溝に立てて板壁としていたことが明らかにである。壁板は少なくとも西壁で６枚、北壁で14枚確認できる。北西隅では北面する材と西面する材が90°の角度で接して遺存していた。材１枚あたりの大きさは、最大で長さ135㎝、幅42㎝、厚さ1.5㎝である。壁板の直下には、棒状の材（幅10～15㎝、厚さ５㎝前後）が数箇所で認められる。出土位置と、壁板と直交方向にあることから、棒状の材は板壁の押さえとしての役割を果たしていたものであろう。なお、柱をなしていたと考えられる角材は検出できなかった。

壁溝・柱穴　検出した範囲内には壁溝が巡る。その幅20～35㎝、床面からの深さは15～28㎝である。床面上からＰ１～３を確認しているが、本住居の主柱とは考えられない。

カマド・炉　出土遺物　調査範囲内では確認できなかった。



第198図　SI 300竪穴住居跡

ＳＩ301　（昭和57年調査ＳＩ006、第200図、図版84～86）

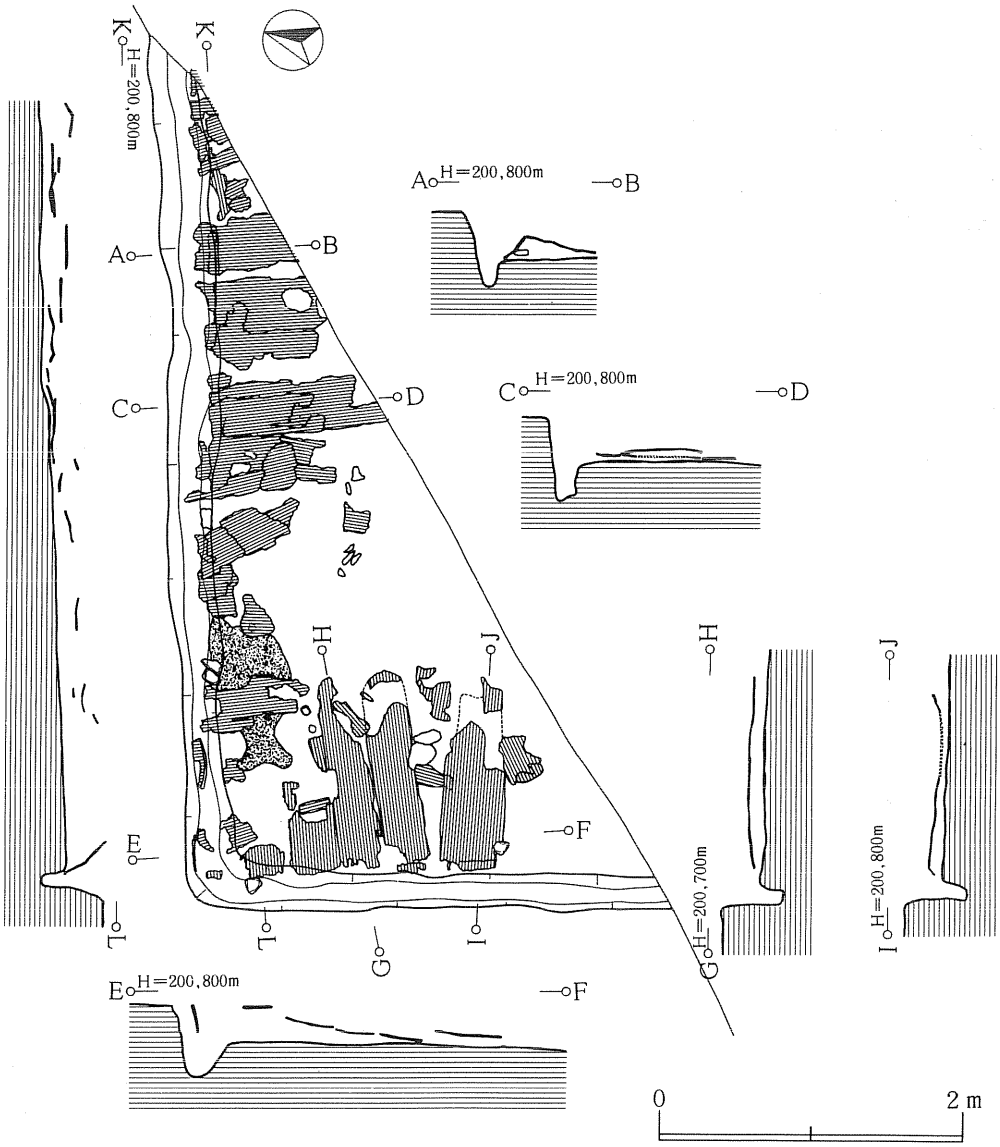
位置・確認状況　ＫＧ・ＫＨ23～25グリッド、第Ⅴ層で検出した。ＳＩ310と重複、これを切っている。遺構西半分は昭和57年の調査において確認している。

形態・規模　東西長7.1m、南北長７mの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－５°－Ｗを示す。

覆土　確認面（２層）では大湯浮石・地山小ブロック（径３～40mm）を斑状に多く含んでいるものの、土層の堆積状態は自然堆積のようである。

床・壁　床面は平坦で堅く締まっており、ＳＩ310重複部分ではこれを埋め、黒褐色シルト質土で貼床している。床面積は45.6㎡である。壁高は、北壁で20～32cmあるが、南壁では10cm未満の数値となる。

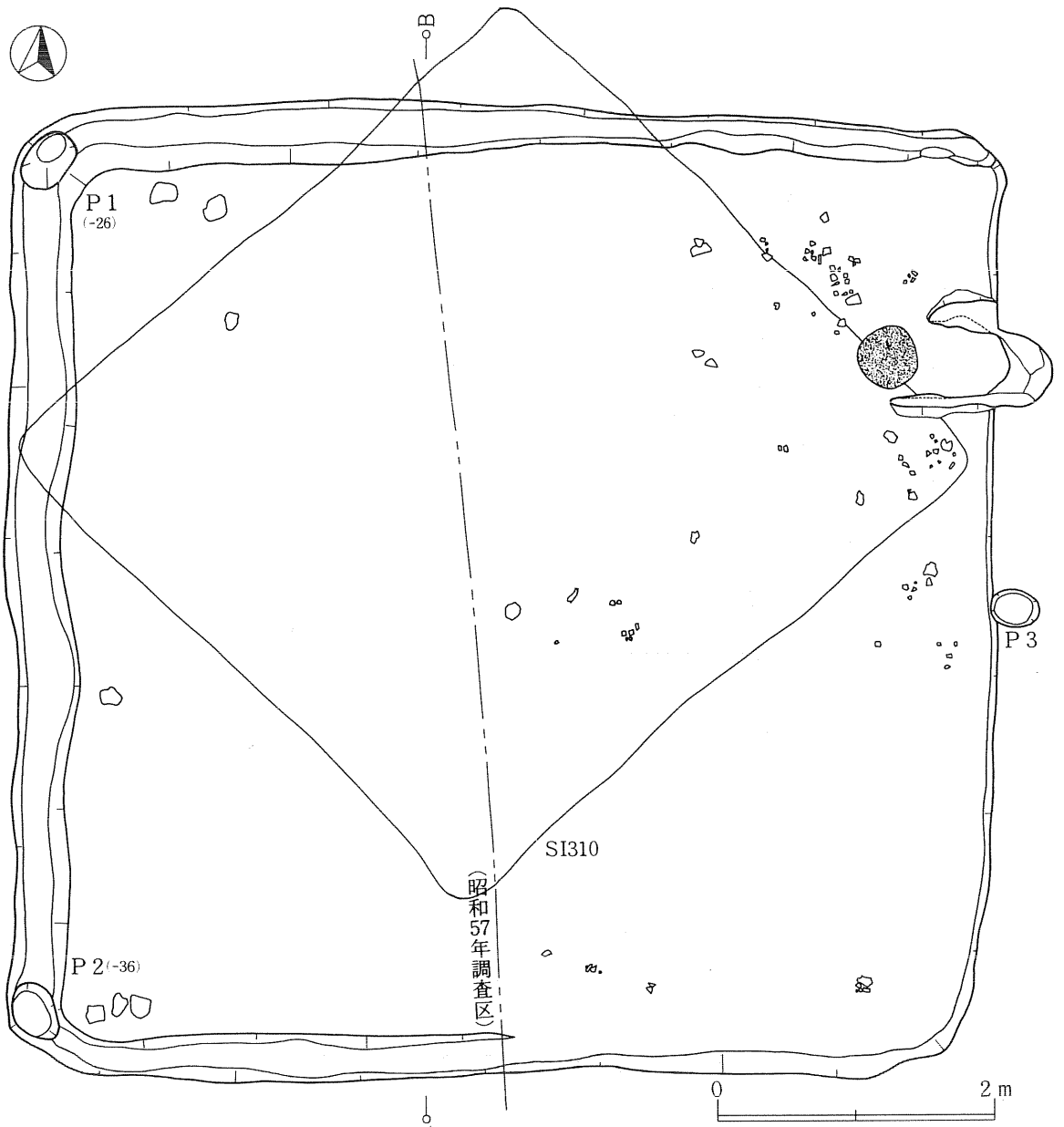
壁溝・柱穴　壁溝は東壁と南壁東半を除き巡る。その幅は、西壁で40～45cm、北・南壁で25～



第199図　SI 300竪穴住居跡炭化材出土状況

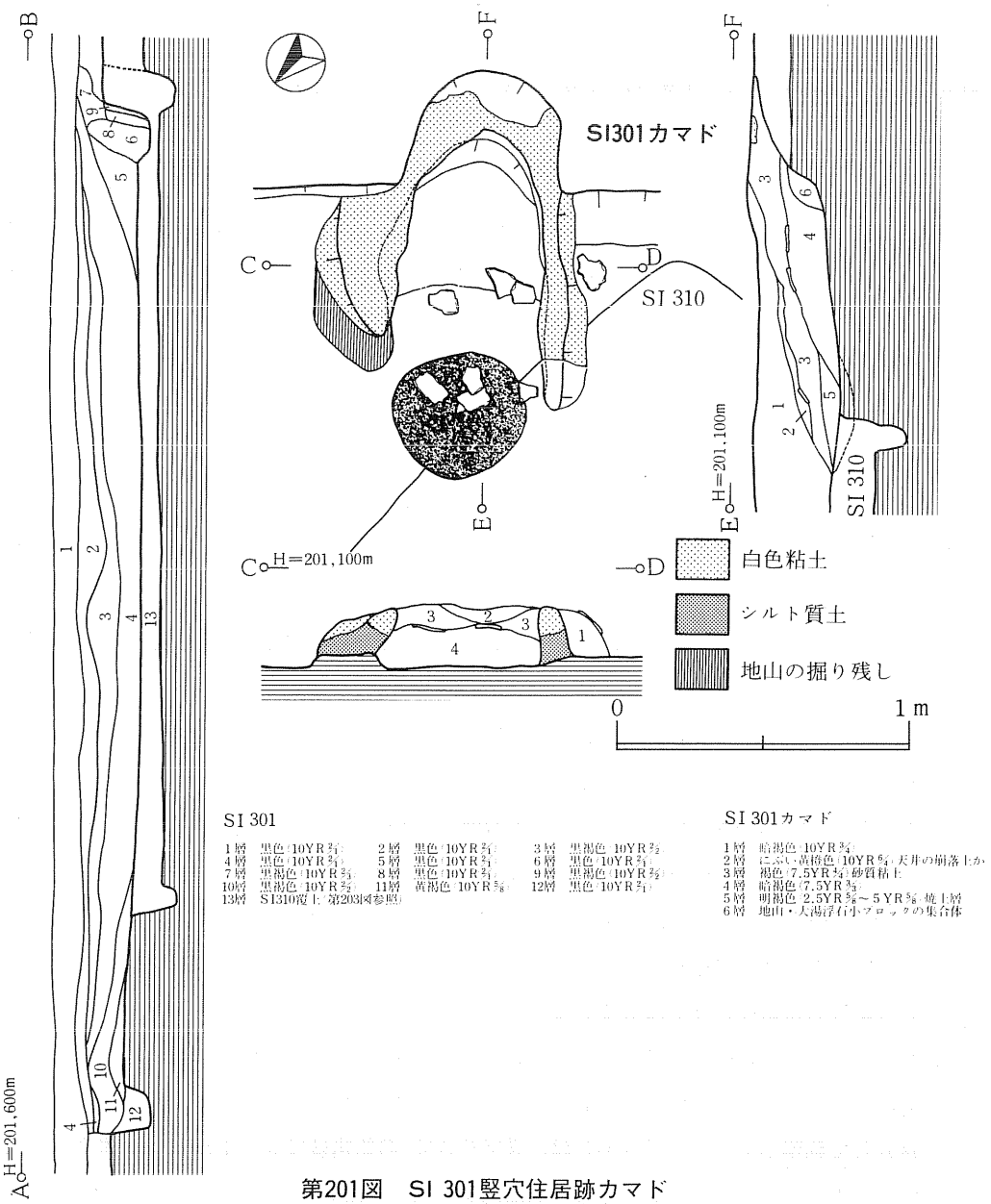
40cm、床面からの深さは10～20cmを測る。壁溝内に掘り込まれているＰ１・２は、本住居の柱穴として認知できるが、東壁中央のＰ３は、住居より新しい時期の掘り込みと考えている。

カマド・炉　カマドは東壁北側で確認している。煙道を壁外に40cm掘り込んでおり、全長140cm、燃焼部内法幅55cmである。袖部構築にあたっては、左袖基底は地山の掘り残しを利用し、黒褐色シルト質土に地山（粘土）を少量混ぜた土の上に白色粘土を積むように架構している。白色粘土は煙道部にも貼られ、天井部の一部が残存していた。



第200図　SI 301 (SI006) 竪穴住居跡

出土遺物（第209図48～56）　土師器甕（13個体）、鉄滓が出土している。48・50・52～54は、カマド内、55は昭和57年調査の出土遺物である。54は、口縁部から体部の３／４が欠損しており、器形と二次火熱を受けていることから、把手付であった可能性がある。



第201図　SI 301竪穴住居跡カマド

ＳＩ302　（昭和57年調査ＳＩ020、第202図、図版87）

位置・確認状況　ＫＩ29～31グリッド、第Ｖ層中で検出した。遺構西半分は昭和57年の調査で確認している。ＳＤ324とした溝状遺構に一部切られている。

形態・規模　東西長7.4m、南北長7.2mの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－５°－Ｗを示す。

覆土　第１次堆積土は北壁付近の５層で、人為的に投棄された可能性が高く、他層は自然堆積を示している。

床・壁　床面は平坦で堅く締まっている。床面積は48.5㎡である。壁高は、北壁で最高48cmを測る。

壁溝・柱穴　壁溝は、南壁東側で60cm途切れる以外は、15～20cmの幅で巡っている。床面からの深さは、13～23cmである。壁溝内にはＰ１～７の柱穴が掘り込まれている。床面上には１箇所（Ｐ８）で柱穴が確認できたが、これに組み合う柱穴は検出できなかった。

カマド・炉　カマドは昭和57年調査時に、南壁西側で確認している。壁外に掘り込みを伴う煙道構築方法は採用しておらず、カマド本体は壁溝を埋めて架構している。全長110cm、燃焼部内法幅約50cmである。火床面は、床面を僅かに掘り込んでいるようである。

出土遺物（第211図62）　土師器甕、鉄滓が出土している。62は、昭和57年の調査で出土した遺物である。

ＳＩ310　（昭和57年調査ＳＩ018、第203・204図、図版84～86）

位置・確認状況　ＫＨ23～25グリッド、ＳＩ301床面で検出した。遺構西半分は昭和57年調査で確認している。

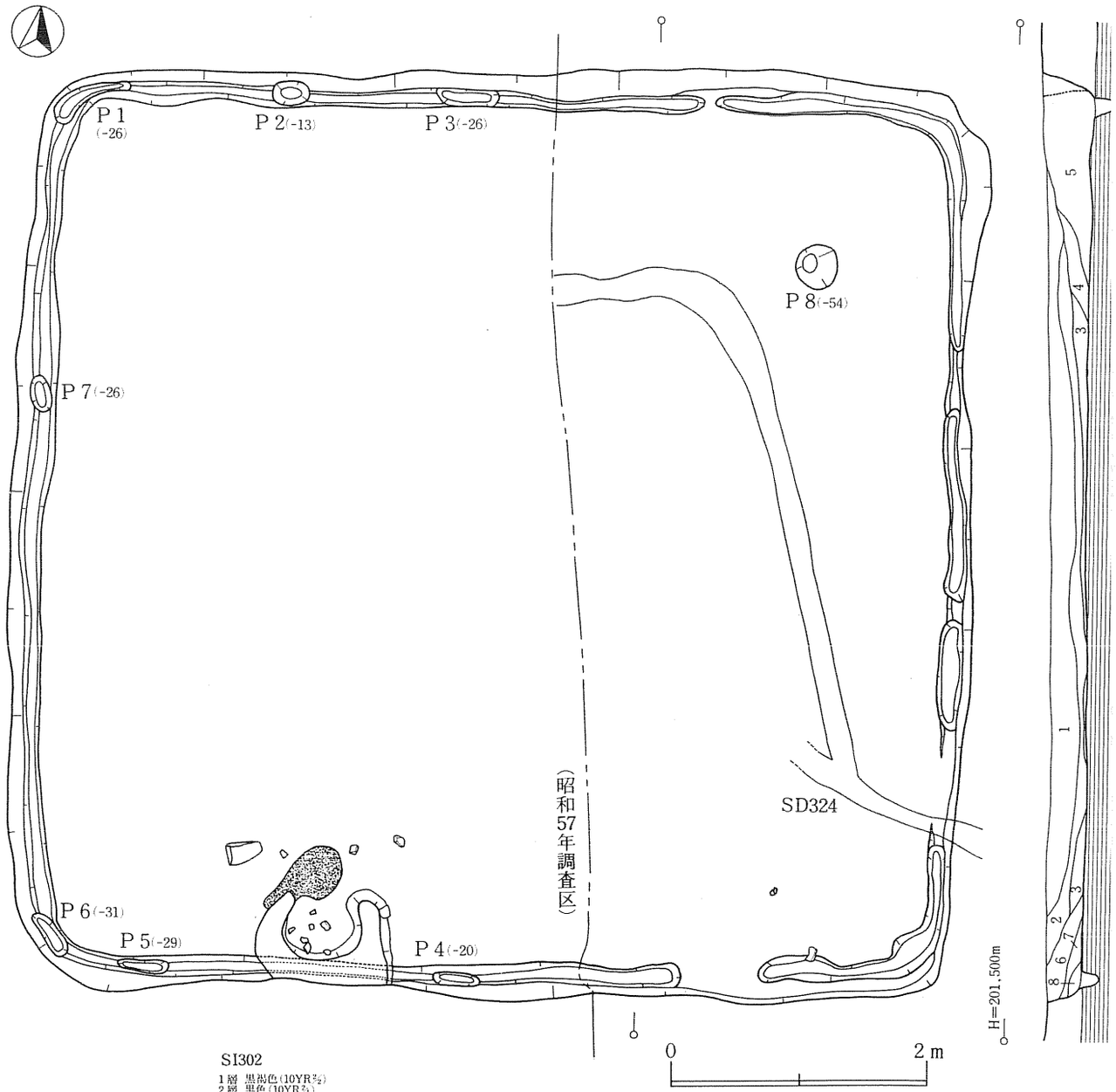
形態・規模　ここではカマドの位置する壁を南とすると、東西長4.9ｍ、南北長4.75ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－40°－Ｅを示す。

覆土　地山・大湯浮石粒子を斑状に多く含む暗褐色土が充填されており、検出位置と合わせて明らかに人為的に埋められた土と解することができる。

床・壁　床面は平坦で堅く締まっている。床面積は21.5㎡である。床面南東寄りには焼土と炭化物の分布している範囲がある。壁高は10～23cmを測る。

壁溝・柱穴　壁溝はカマド部分を除き、幅15～20cm、深さ８～20cmで巡っている。壁溝内の２箇所に柱穴が確認できる。北・西壁中央部に位置し、平面楕円形の小さな柱穴ながら深くしっかりした掘り込みを残している。

カマド・炉　カマドは南壁西側で確認している。ＳＩ301構築に際し整地（削平）されている。現存する全長95cm、燃焼部内法幅45cmを測る。袖部は白色粘土を主とし、一部に石を補強材として利用している。煙り出しは、周壁を約35°の急角度で立ち上がらせ、壁外は粘土などで架構していたと想定できる。袖部内壁は火熱の影響で硬化している（第204図、黒塗部分）。火床面奥左袖寄りに、自然礫の支脚を検出した。礫の尖った部分を火床面に突き刺す方法で設置している。この支脚に並行するようにして、右袖に取り付く長さ20cm、幅15cm、高さ５cmの粘土塊が存在する。これは袖部の白色粘土とは異なる地山粘土を主とする土のようである。精査の結果、天井部などからの崩落に伴うのではなく、支脚同様原位置を保っていることを確認している。この位置は、支脚が物語るように燃焼部と煙道部を



SI302
1層　黒褐色(10YR 3/2)
2層　黒色(10YR 2/1)
3層　黒褐色(10YR 3/3)
4層　黒褐色(10YR 3/2)
5層　暗褐色(10YR 3/4)
6層　黒褐色(10YR 3/2)
7層　黒色(10YR 2/1)　2層に類する
8層　黒褐色(10YR 3/2)

第202図　SI 302(SI 020)竪穴住居跡

画する部分にあたる。粘土塊は、礫と共に支脚としての役割を果たしていたか、あるいは熱効率との係りをもつ“障壁”材としての付設であった可能性を指摘しておきたい。

出土遺物（第210図～211図61）　須恵器坏（１個体）、土師器甕（６個体）、鉄滓が出土している。カマドの東側、南壁近くに遺物が集中している。確認面上では椀形滓を確認した。61と57破片の１／３は、昭和57年調査で出土している。58は、ＳＩ301カマド出土破片と接合した。57～60は、形態・整形方法に相異はあるものの、口径20～21cm、器高約30cmの近似した法量を示す大型の甕である。57、58底部はナデ、60は砂底であり、内外面の整形はハケメによる。

ＳＩ314　（昭和57年調査ＳＩ005、第205図、図版88）

位置・確認状況　ＫＧ17・18グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。遺構の西半分は、昭和57年の調査で確認している。

形態・規模　東西長4.2m、南北長4.1mの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－７°－Ｗを示す。

覆土　カマド部分を除くと、基本的には大湯浮石粒子を斑状に含む黒～黒褐色土単層である。

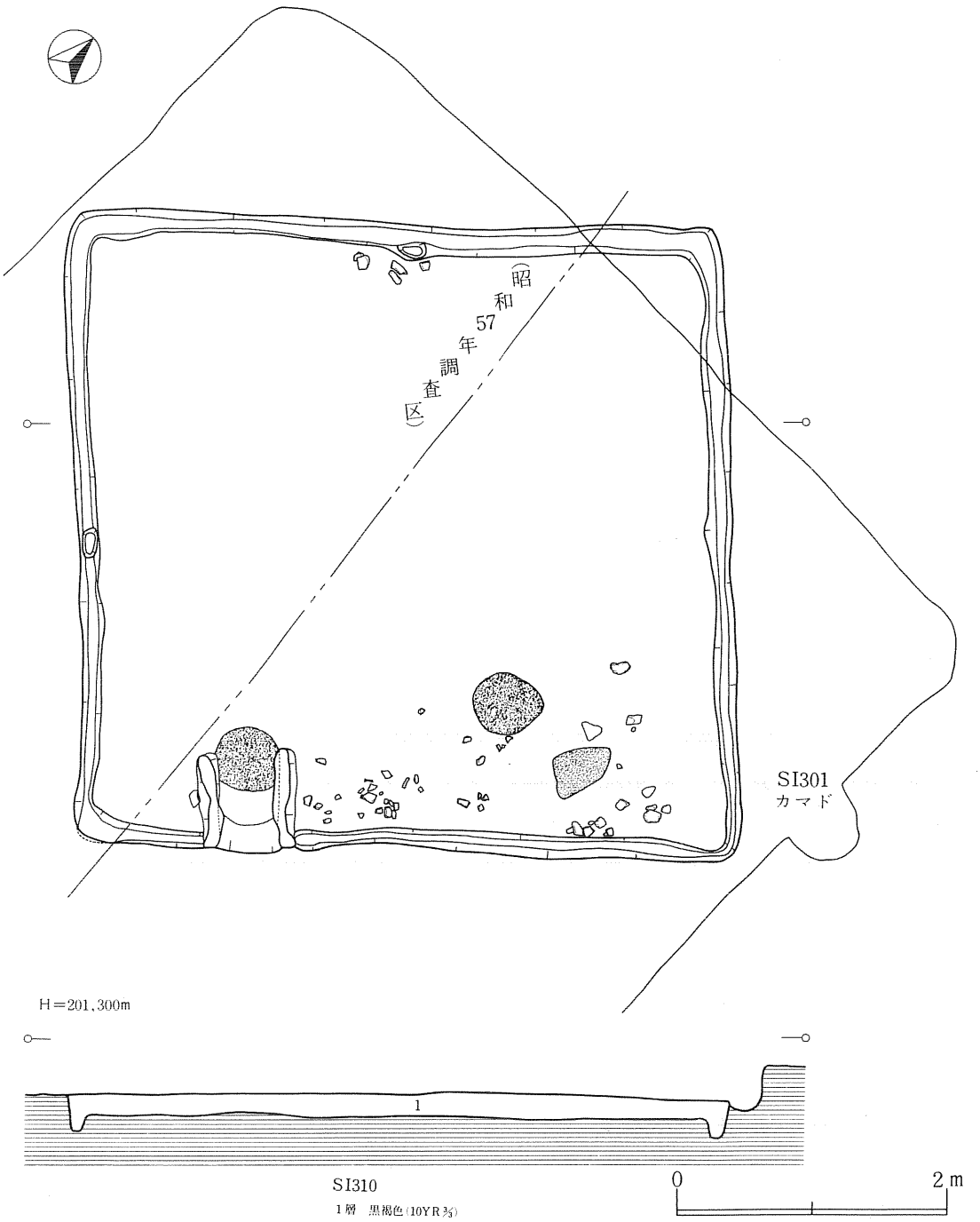
床・壁　床面は凹凸あることから、覆土と同じ黒～黒褐色土の貼床が存在していたと考えられるが、これを確認はできなかった。床面積は14.9㎡である。壁高は、北壁で15～20cm、他では概ね10cm以下である。

壁溝・柱穴　壁溝は、南壁東半分を除き巡る。その幅15～25cm、床面からの深さは10cm前後を測る。柱穴は、４隅（Ｐ１～Ｐ４）及び東西壁各２本（Ｐ５～Ｐ８）の計８本の壁柱穴で構成される。床面からの深さは、西壁４本が19～28cm、東壁４本は10～15cmと浅い。

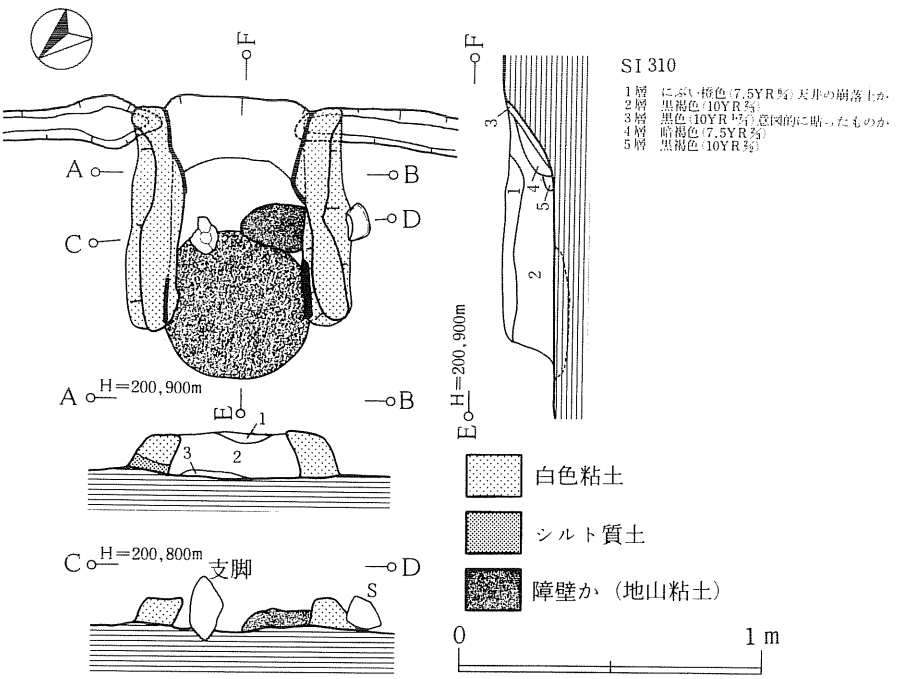
カマド・炉　カマドは昭和57年調査時に、南壁西側で確認している。煙出しは、周壁を掘り込むことなく壁溝を埋め、戸外には粘土などで架構し排煙していたものと考えられる。全長135cm（煙道長45cm、燃焼部長90cm）、燃焼部内法幅55cmを計測する。袖部は黒褐色シルト質土に、粘土、大湯浮石・地山粒子を混ぜた用土を使用している。

その他の付属施設　床面中央よりややカマド寄りに径25cmの柱穴（Ｐ９）が存在する。

出土遺物（第211図Ｍ１・Ｓ13・63～212図66）　土師器甕（２個体）、土製品（丸玉、勾玉）、鉄製品（刀子）、砥石が出土している。Ｍ１・63～65は昭和57年調査において確認している遺物である。今次は土師器甕破片（66）と砥石（Ｓ13）が出土したのみである。



第203図　SI 310(SI 018)竪穴住居跡



第204図　SI 310竪穴住居跡カマド

ＳＩ323　（第206・207図、図版88・89）

位置・確認状況　ＫＥ・ＫＦ37・38グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。確認の状況はＳＩ300と同じである。遺構北東部とカマドの一部は調査区外となる。

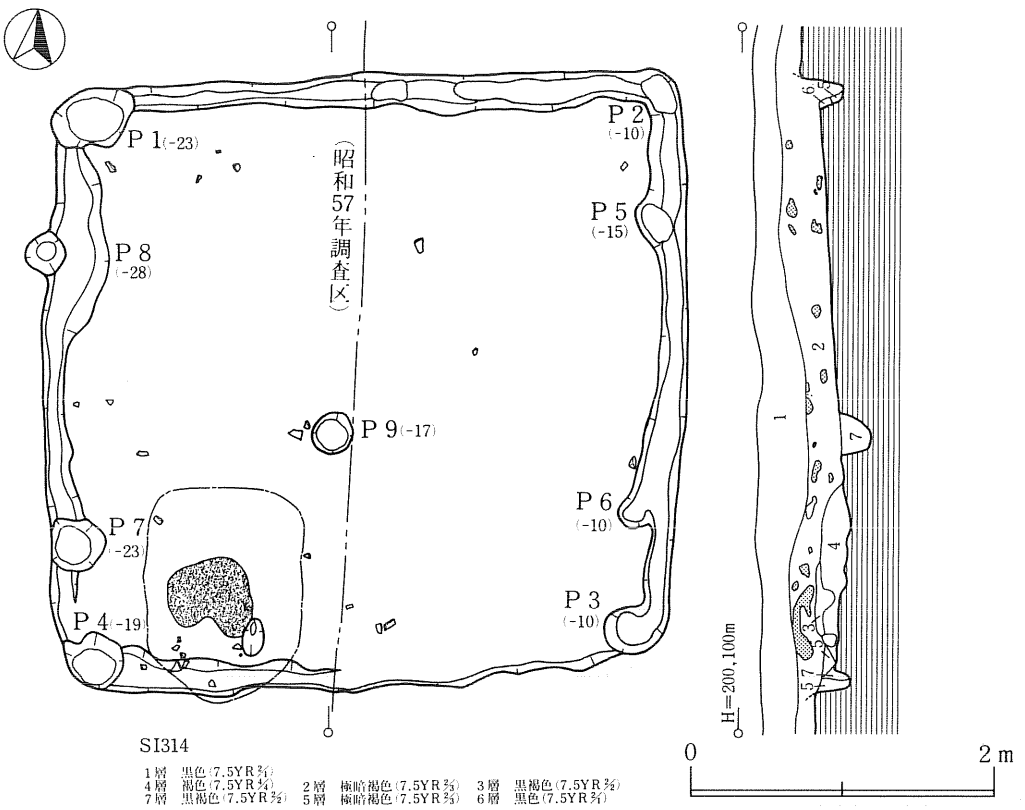
形態・規模　南北長4.9m、東西長4.7mの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－42°－Ｗを示す。

覆土　大湯浮石粒子を多量に含む３層黒褐色土のあり方から、自然堆積が考えられる。

床・壁　中央部を除いた床面は、地山粘土に黒褐色シルト質土を混ぜた土で貼床し、平坦化されている。壁高は、残りの良い南西隅で27cm、畑作による深耕を受けている他の箇所では10cm未満の数値を示している。

壁溝・柱穴　幅20cm前後、床面からの深さ15～32cmの壁溝が巡っている。壁溝内にはＰ１～３の柱穴が掘り込まれている。

カマド・炉　カマドは東壁南側で確認している。煙道先端部は調査区外になるが、壁外に17°の上り勾配で45cm以上の煙道を有している。燃焼部長は50cmである。袖部から煙道部は、いわゆる白色粘土を用いて架構している。左袖上には河原石や土器片が認められ、袖部の補強の役割を果たしていたのかも知れない。現存する袖部の高さは18cmある。壁外の煙道はほとんど掘り込みを伴わないことから、地上式の煙道と言える。燃焼部奥右袖寄りには粘土を芯とし、この上に土師器甕を倒立させてある支脚(高さ15cm)が存在する。この位置



第205図　SI 314(SI005)竪穴住居跡

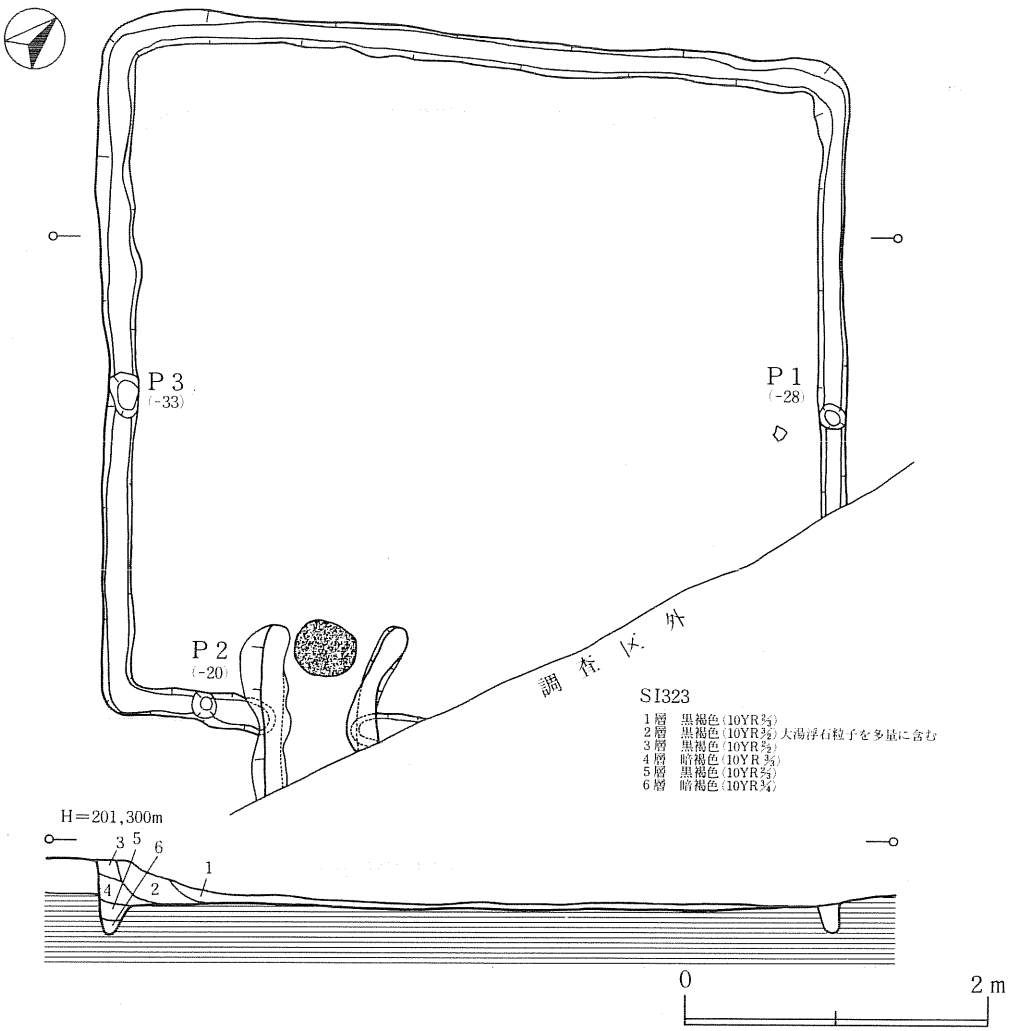
での燃焼部内法幅は50cmである。

出土遺物（第212図67～70、図版89）　土師器坏、甕、壺が出土している。いずれも床面あるいは床面直上で検出している。底部に木葉痕をもつ坏67は、黒色処理された内面に径約5.5cmの円形の擦面を観察でき、破片を利用した転用硯と考えられる。69は支脚に用いられた甕である。70は、胎土に径の大きい砂粒を多く含んでいるが、焼成極めて良好であり、頸部に成形時の弱い段（沈線）を残している。外面は丁寧なハケメ（カキメ）整形がなされている。

ＳＩ325　（昭和57年調査ＳＩ038、第208図、図版90）

位置・確認状況　ＫＦ５・６グリッドで検出した。第Ⅶ層地山面まで削平を受けており、遺存状態は良くない。遺構の西側１／３は、昭和57年の調査で確認している。

形態・規模　長軸2.85ｍ、短軸2.1ｍの南北方向に長い長方形を呈する。主軸方位はＮ－25°－Ｗを示している。



第206図　SI 323竪穴住居跡

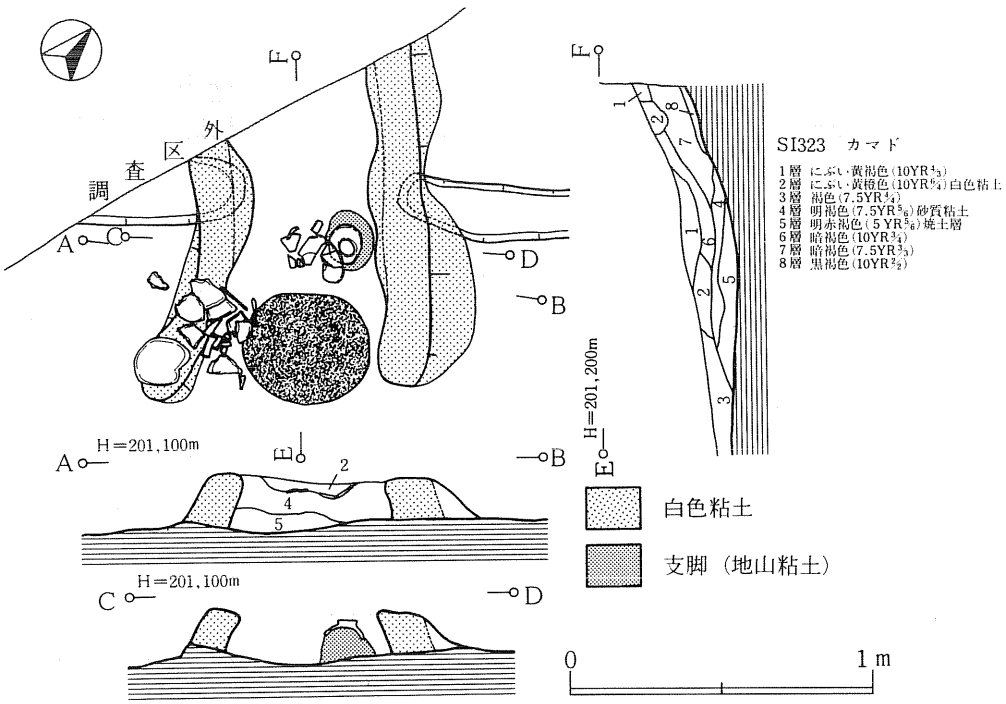
覆土　地山・大湯浮石小ブロック（径２～10㎜）を斑状に比較的多く含む黒褐色土（しまり・粘性ややあり）が充填している。

床・壁　床面は平坦であるが、特段締まっている様子はない。床面積は5.4㎡である。残存する壁高は、５～15㎝である。

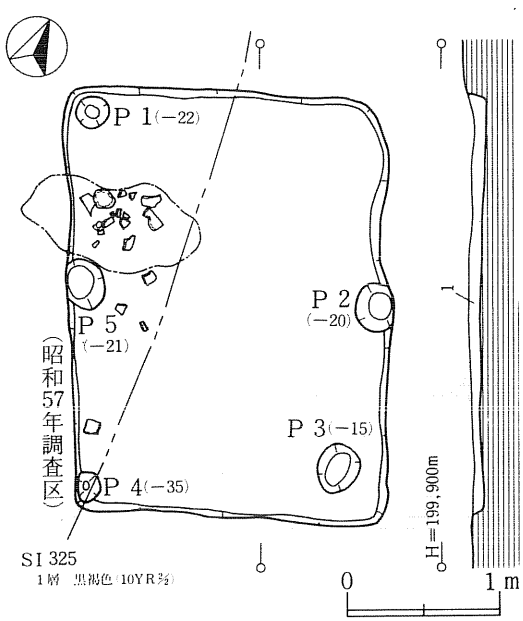
壁溝・柱穴　壁溝はなく、壁際にＰ１～５の柱穴を検出している。

カマド・炉　昭和57年調査時、西壁北半部でカマドを確認している。崩壊著しく、原形を留どめてはいない。

出土遺物（第213図71・72）　土師器甕が出土している。図示した２個体は昭和57年調査において検出されたものである。今回の調査では１点も確認できなかった。



第207図　SI 323竪穴住居跡カマド



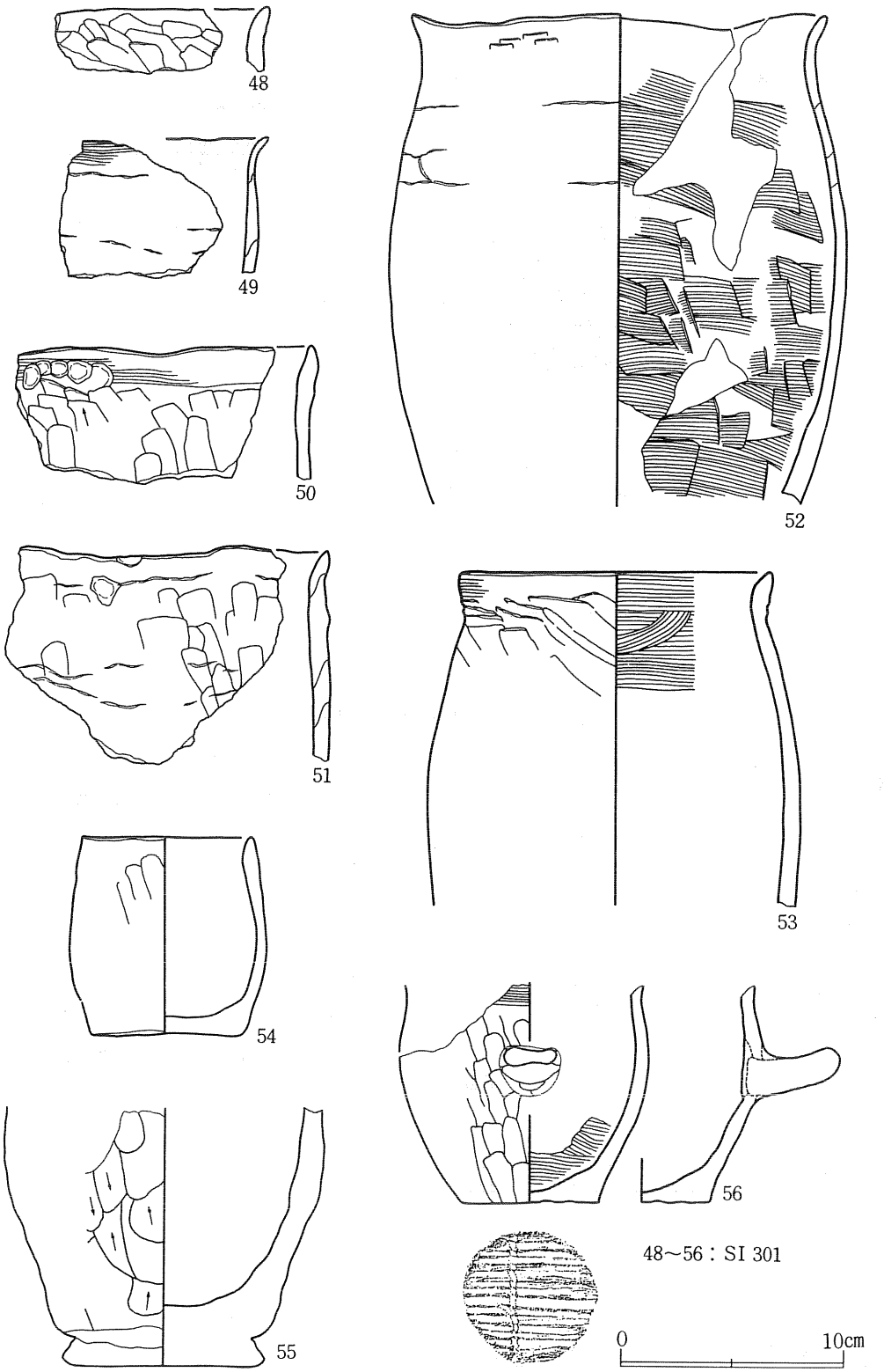
第208図　SI 325(SI 038)竪穴住居跡

(2)　土坑　（第214図、図版89）

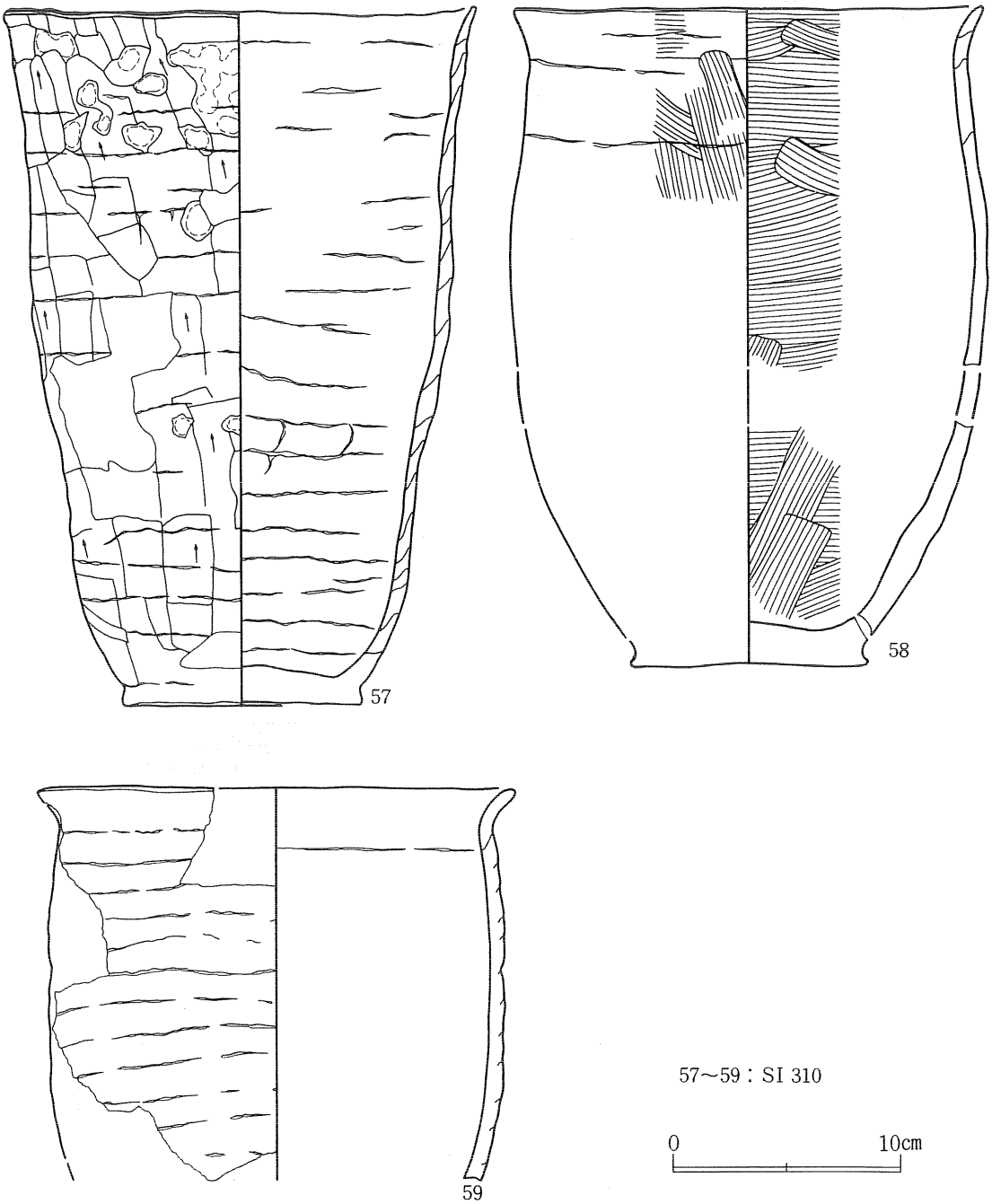
ＡⅣ区における平安時代の土坑は、覆土中に大湯浮石を含んでいるＳＫ305とした１基だけである。

ＳＫ305は、ＫＧ21グリッド第Ⅴ層上面で検出した。長軸70cm、短軸45cmのやや歪つな楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深で35cmである。

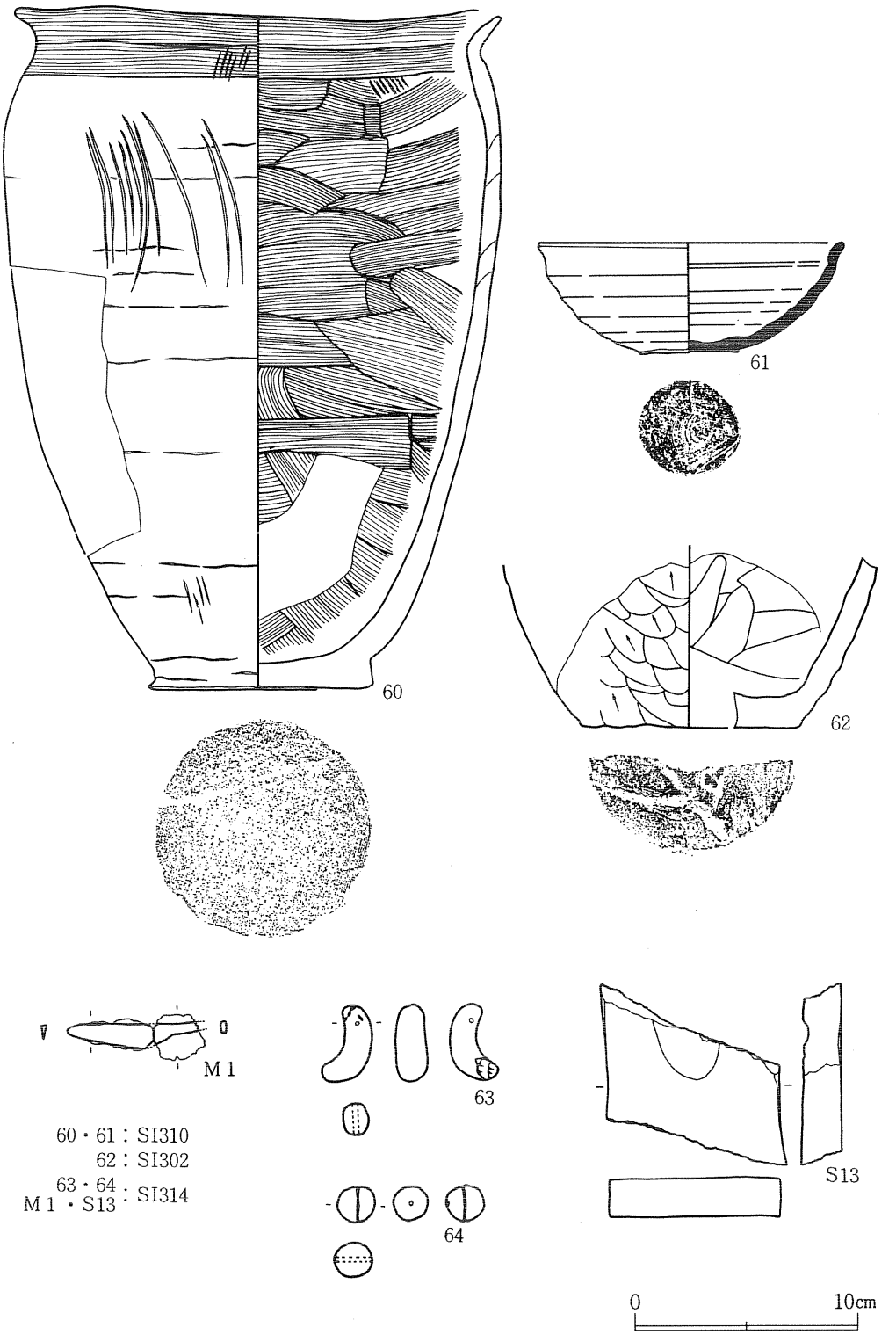
確認面において土師器甕（73）が倒立して出土している。



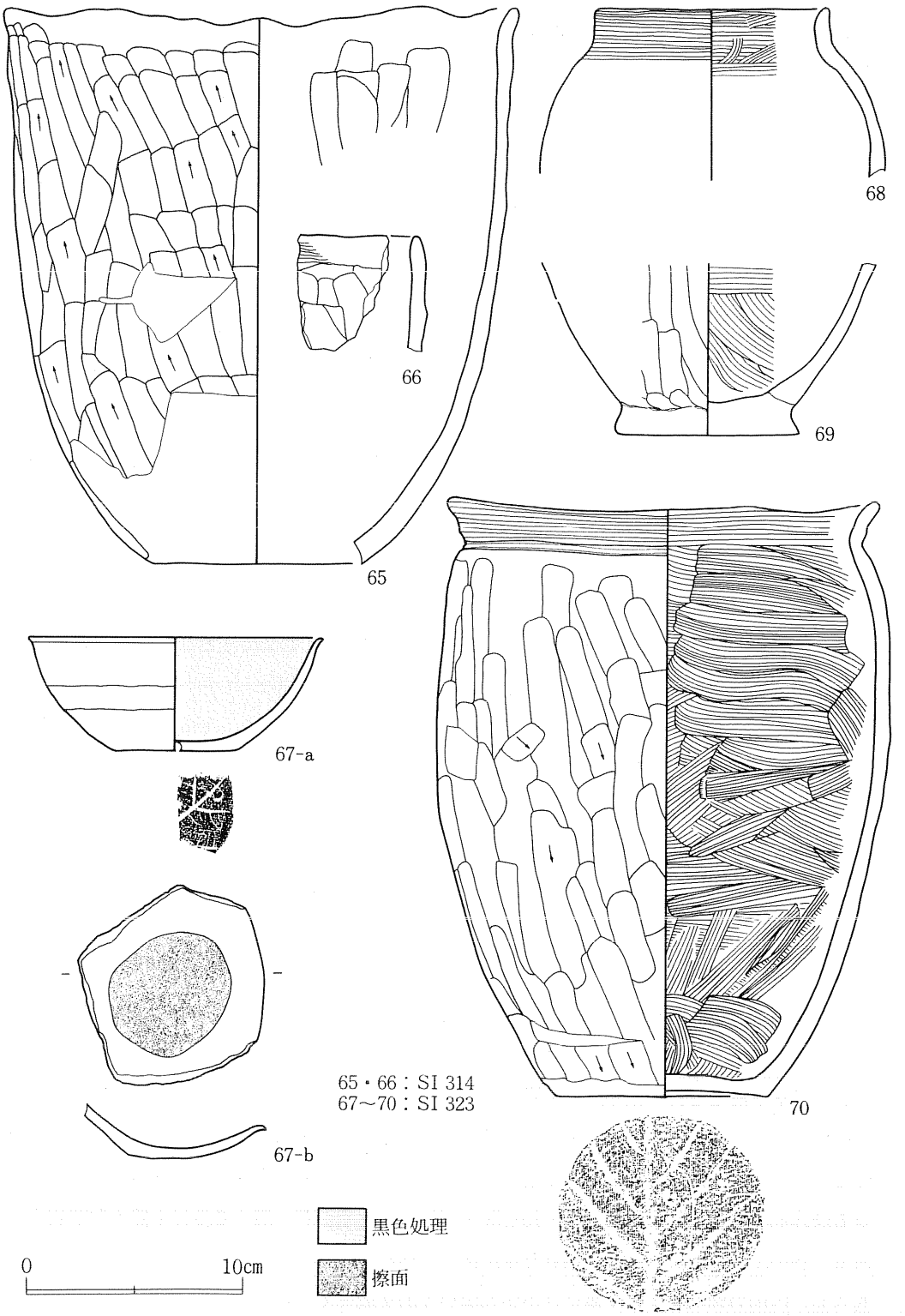
第209図　AⅣ区　遺構内出土遺物（４）・土器（３）



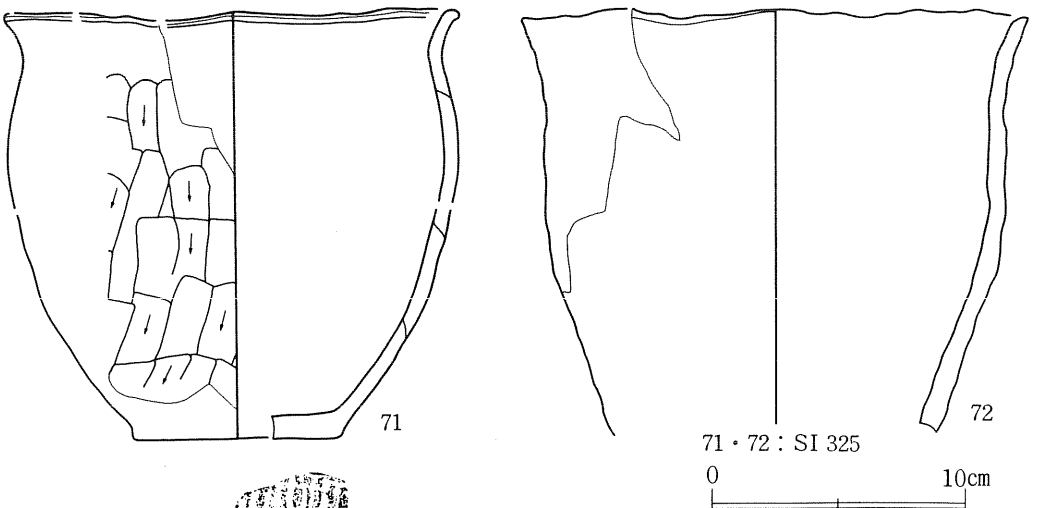
第210図　AⅣ区　遺構内出土遺物（５）・土器（４）



第211図　AⅣ区　遺構内出土遺物（6）・土器（5）・土製品・鉄製品・石製品(砥石)



第212図　AⅣ区　遺構内出土遺物（7）・土器（6）



第213図　AⅣ区　遺構内出土遺物（８）・土器（７）

(3)　焼土遺構

縄文時代の遺構が集中する区域で１基確認している。

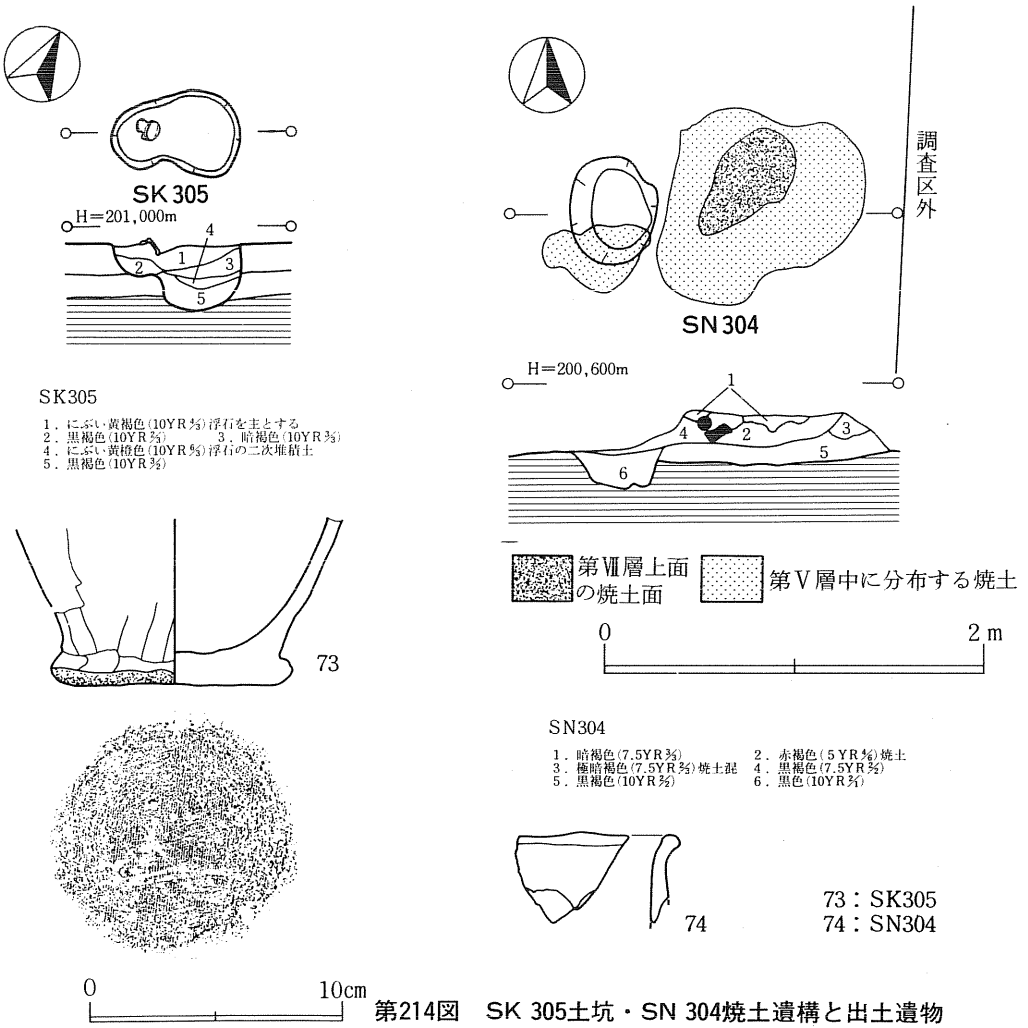
ＳＮ304　（第214図、図版80）

ＫＦ17グリッド、第Ⅴ層中で検出した。同層面で比較的多くの縄文土器片と径１ｍ前後の焼土の分布が認められたことから、縄文時代の焼土遺構と考えていた。しかし、この焼土を少しずつ除去していくと、土師器破片が３点ではあるが確認できるに至り、平安時代の遺構と考えざるを得なくなった。第Ⅴ層縄文時代の包含層を掘り込んで構築したため、縄文土器と土師器が混在する結果となったのであろう。

第Ⅶ層上面での精査により、長さ65cm、幅45cmの焼土面と、この西側で長さ55cm、幅45cm、深さ20cmの土坑を確認できた。本遺構は、これ単独の焼土遺構として完結するのか、東側の調査区外から延びる遺構の一部、例えば竪穴住居跡に伴うカマドなどであったのか、調査・検証によってもその判断はできなかった。

出土遺物は、覆土１～４層より縄文土器、土師器が得られている（第191図３、192図16～20、214図74）。

３はバケツ形をした小型深鉢形土器で、全面にＬＲ単節斜縄文が施され、底部には網代痕がついている。内外面ともに煤状炭化物が付着し、内面のみがきは丁寧である。16・17は同一個体で、小さな底部から外傾して立ち上がった胴部が、上半でややすぼまり、外傾する口頸部に至る深鉢形土器と考えられる。18・19も同一個体で、後期後葉に属する注口土器の胴部破片である。19の左上部分には注口の剥れた痕があり、補修のためのアスファルトが付着している。器外面と内面の頸部までは丁寧にみがかれ黒い光沢を放っている。



第214図　SK 305土坑・SN 304焼土遺構と出土遺物

ＳＮ304構築時の遺物と考えられるのは、３点の土師器だけである。図示した１片（74）は、小型の甕形土器口縁部である。

(4)　溝状遺構　（第186図）

ＡⅣ区では４条の溝状遺構を検出している。遺構確認面から２時期の構築が考えられる。１つは、第Ⅲ層大湯浮石層面で確認できるＳＤ303・306・317であり、いま１つは第Ⅱ層で確認できるＳＤ324である。前者は竪穴住居跡等と同様に平安時代に構築時期を求めることができる。これらの溝は、幅15～30cm、深さは最深でも15cm足らずであり、溝底面は第Ⅴ層上面までで収まる。南北方向に延びるＳＤ303は、確認できる長さ約40ｍある。後者は、確認面よりの深さが50cm程あり、前者より新しく近現代の構築である可能性が高い。

第４節　小　　結

ＡⅣ区では、縄文時代の竪穴住居跡１軒、Ｔピット３基、土坑６基、弥生時代の土坑１基、平安時代の竪穴住居跡７軒、土坑１基、焼土遺構１基、溝状遺構４条の遺構、および縄文時代前期・後期・晩期の土器、石器の遺構外出土遺物を検出している。

ＡⅣ区は、昭和57年調査区の東側に当たり、縄文時代のＴピット１基、平安時代の竪穴住居跡５軒は、２度の調査で完掘することができたものである。

本節では、縄文時代の竪穴住居跡についてふれることとし、平安時代の遺構については、ＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ区を含めて、第12章にまとめる。

ＳＩ332Ａ・Ｂ竪穴住居跡について

ＳＩ332Ａ・Ｂは、ＡⅣ区南端部で検出された重複する２つの竪穴住居跡である。古い方がＳＩ332Ｂ、新しい方がＳＩ332Ａで、332Ａは332Ｂの中心を変えることなく、それよりも１回り大きな住居に建て替えたもので、２つの住居跡ともに、壁側の床面が住居中央部の床面よりも一段高くなる、いわゆる二段構造となっている。住居の規模はいずれも推定値でＳＩ332Ａが長径8.2m・短径6.4m・床面積44.2㎡、332Ｂが長径5.9m・短径4.7m・床面積19.3㎡で両者共に隅丸長方形を呈する。ＳＩ332Ａのベッド状床面から第190図１の円筒土器下層ｄ$_2$式の最終段階のものと考えられる深鉢形土器が出土しており、本住居跡の時期を示している。このような二段構造の床面を持つ竪穴住居跡は、昭和57年調査区の南端部からも３軒検出されている。ＳＩ007・015・014とされた竪穴住居跡で、007はＳＩ332Ａの南西約８ｍ、015は同じく南西約４ｍ、014は西約８ｍに位置している。３軒の竪穴住居跡の規模は、ＳＩ007が長径9.4m（推定）・短径6.2m・床面積50㎡、015が推定で長径13.5m・短径8.0m・床面積93㎡、014が長径10.8m・短径8.1m・床面積72㎡である。３軒の竪穴住居跡の時期は、覆土中から出土した遺物によって前期円筒土器下層ｄ式期とされている。

以上のことから、ＡⅣ区とＳ57調査区から検出された５軒の竪穴住居跡は、形態・規模・構造・出土遺物・位置的関係などから、前期末葉に構築された一連の竪穴住居跡であると見ることができる。これらの竪穴住居跡群は、はりま館遺跡における上位関上面の最南端部に位置し、未調査であるＡⅣ区東側の平坦面にその存在が予想される数軒の竪穴住居跡と共に、前期末葉の１集落を形成していたものと思われる。

ところで、Ｓ57調査で検出された３軒の竪穴住居跡は、「集落の中で大きいという意味で」大型住居跡とされているが、今回検出されたＳＩ332Ａの規模はＳＩ007の規模に近い。また、「集落の中で大きい」とした場合に、集落を構成する竪穴住居跡中の「大きくない竪穴住居跡」と「大きい竪穴住居跡」の比率などが問題となろうが、大きくないものはＳＩ332Ｂ１軒だけ

で、他の4軒は、すべて大きいものとなる。未調査部分に、同時期の大きくない竪穴住居跡が多数存在する可能性も無いわけではないが、この集落が存在する地形等を考慮すると、これまで検出されている5軒の竪穴住居跡と同形態・同規模のものが数軒存在すると考えるのが自然である。従って、ＳＩ007・014・015・332Ａをして大型住居跡とし、ＳＩ332Ｂを普通規模の住居跡とするよりは、はりま館遺跡のこの位置に形成された前期末葉の集落の竪穴住居跡は、二段構造の床面を持つもので、その中には規模の上で相当に差のあるものも含まれている、とするのが妥当と思われる。S57調査では、ＳＩ007・014・015が二段構造の床面を持つということも考慮されて「大型住居跡」とされたものとも思われるが、同様の構造で中・小規模のものが同時に存在したと判明し、規模の上で明確な「大型」・「普通」の線引きもできない状況となった。従って、ＳＩ007等が「大型住居」ではなく、この時期におけるこの集落の一般的な住居跡であったと考えられる。ただし、この集落の竪穴住居跡は、他の円筒土器下層様式期の竪穴住居跡に比べて大型化している、と見ることができる。

第７章　Ｃ区の調査の記録

第１節　Ｃ区の概要

１　Ｃ区の位置と立地

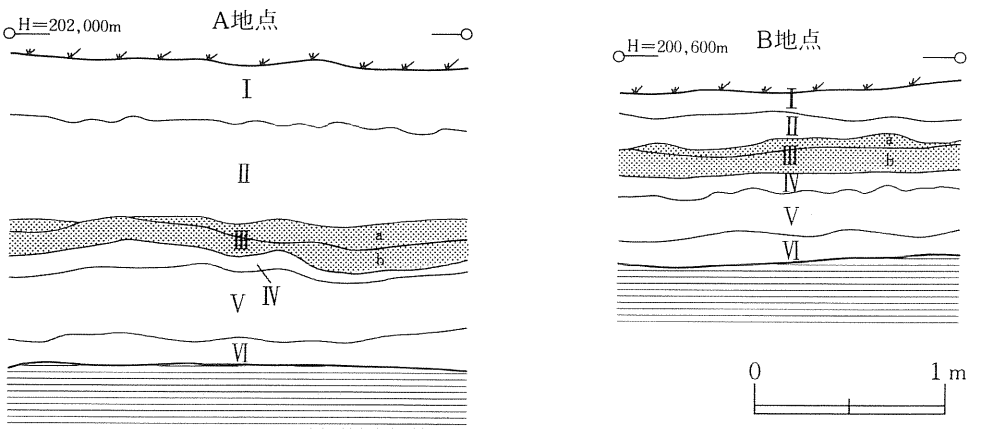
Ｃ区は、はりま館遺跡の南端部に位置し、南北に細長い調査区である。昭和57年調査区は、この東側に隣接している。Ｃ区は関上段丘上位面に立地し、調査区南端は堤沢川によって画され、北端は上位段丘である鳥越面崖下にあたる。現地表での標高は、北端部の203ｍを最高位として南側に緩やかに下り、南端では約197ｍとなる。

２　遺構・遺物の分布

Ｃ区は、ＡⅣ区と同じく第Ⅲ層大湯浮石面で平安時代の遺構を、第Ⅴ～Ⅶ層面で縄文時代の遺構を検出している。調査区北側17ライン以北では遺構・遺物とも確認できなかった。

平安時代の遺構は、溝状遺構１条だけであり、遺構内及び同調査区内で該期の遺物は１点も確認されなかった。

縄文時代の遺構は、調査区南側99ライン以南に比較的多く集まっている。この傾向は、東側に隣接した昭和57年調査時の遺構分布と符合する。遺物は、大きく２箇所に集中している。最も集中しているのは、調査区北側ＳＫＴ21の南側、ＫＳ14グリッドを中心とする範囲（第216図遺構配置図に点線で呈示）である。遺物は、第Ⅴ層上面で集中的に検出され、Ｃ区遺構外出土遺物のうち全体の約40％がこの一角から得られている。次いで多いのは、調査区南側ＳＩ12竪穴住居跡を中心とするＫＱ98・99グリッドである。なお、野外調査時には弥生時代の遺構・遺物は存在しないものと考えていたが、整理作業の結果、ＫＲ08グリッドなどから弥生時代の



第215図　Ｃ区基本土層図

土器片が出土していることが明らかとなった。

3　基本層位

Ｃ区の基本層位は、第215図に示したようにＡ・Ｂ２地点で観察・記録している。層序は、基本的にＡ区と変わるものではない。

Ａ地点

Ⅰ層　黒褐色（10YR２/３）表土

Ⅱ層　黒褐色（10YR２/２）

Ⅲ層　ａにぶい黄橙色（10YR６/３）～
にぶい黄褐色（10YR５/４）大湯浮石細粒部分
ｂ明黄褐色（10YR７/６～６/６）同軽石部分

Ⅳ層　黒褐色（7.5YR２/２）

Ⅴ層　黒色（10YR２/１）

Ⅵ層　暗褐色（10YR３/４）～褐色（10YR４/４）

Ⅶ層　地山

Ｂ地点

Ⅰ層　黒褐色（10YR２/２）表土

Ⅱ層　黒褐色（10YR２/２）

Ⅲ層　大湯浮石層、Ａ地点に同じ

Ⅳ層　褐色（7.5YR４/３～４/４）

Ⅴ層　黒褐色（10YR２/３）

Ⅵ層　褐色（10YR４/４）～
にぶい黄褐色（10YR５/４）

Ⅶ層　地山

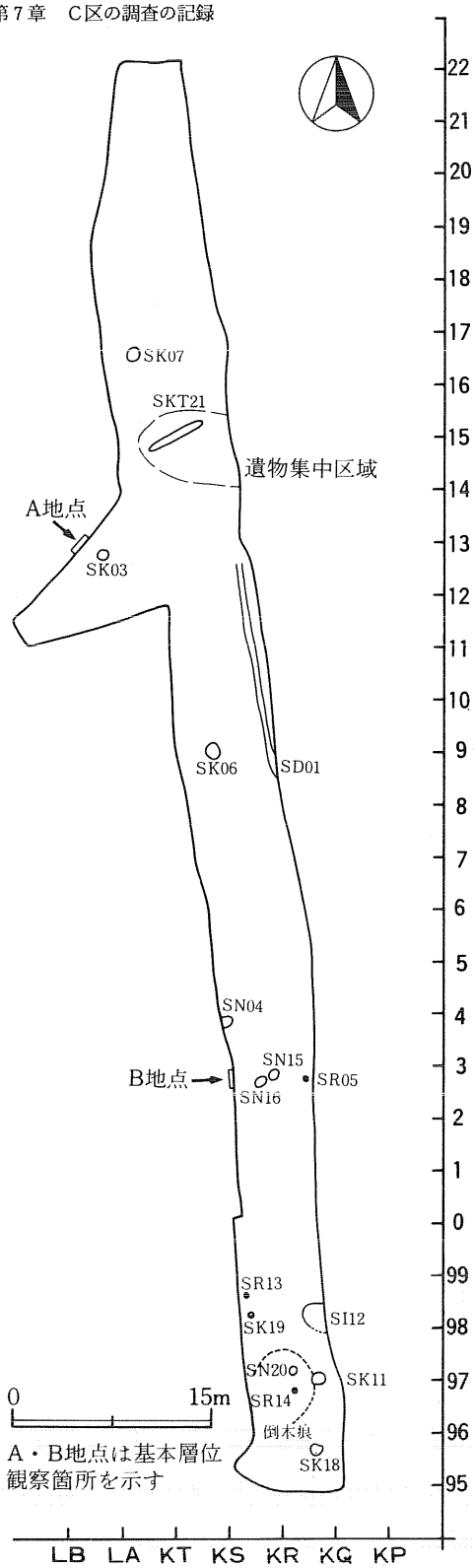
Ａ、Ｂ２地点を比較した場合、Ａ地点Ⅳ層は、Ｂ地点同層よりやや赤味（色相）が強く、Ａ地点Ⅵ層はＢ地点よりやや黄味が強い。なお第Ⅲ層大湯浮石の土色は、湿潤状態での記録である。乾燥すると層全体が白っぽくなり、Ⅲｂでは乾燥時には浅黄橙色（10ＹＲ８／３）となる。

4　調査経過

７月18日、調査開始。排土はＡ区まで運ばなければならないので、ベルトコンベアーとホイルキャリア３台の機械力を借りることにした。粗掘りは調査区北端より始める。26日、第Ⅲ層大湯浮石層までは、現地表面から平均30㎝前後下にある。同面で南北方向に延びる溝を確認する。大湯浮石層を切り込んでいる遺構である。28日、粗掘りは調査区両端部を残すのみとなった。

８月１日、粗掘りをほぼ終了し第Ⅲ層面が現れてきたので、この時点でグリッド杭打設を行う。３日、杭打設終了。第Ⅲ層面での精査によって確認できた遺構は過日検出した溝１条だけであった。４日、本日より第Ⅲ層面を除去し、第Ⅳ～Ⅵ層を掘り下げ遺構の有無を確認する調査に移る。５日、降雨の中での作業となる。次第に雨激しくなり午後の調査は中止した。

９日、ようやく第Ⅴ層中において焼土遺構、土器埋設遺構が検出できた。調査区北側15ライン以北では明確な第Ⅳ層の分布は認められない。12～15ラインでは、この第Ⅳ層が堆積している。同層中においては、遺物はなく、下位の第Ⅴ層上面で縄文後期前葉、第Ⅴ層中で前期の遺物が出土している。ＬＡ14グリッドでは地表面から第Ⅶ層地山面まで約150㎝ある。層厚10㎝の第Ⅲ層大湯浮石を介して、第Ⅴ層黒色土が70㎝堆積している。



第216図　Ｃ区遺構配置図

10日、14・15ライン第Ⅴ層中で縄文土器が多数確認できる。24日、竪穴住居跡を確認、遺存状態は良くないようである。25日、土器の集中していた14・15ラインは、第Ⅵ層以下には遺物を確認できない。

９月１日、調査区全景写真撮影を行う。５日、ＫＴ15グリッドを中心とする位置には倒木痕が確認できていたが、この部分を精査したところ倒木痕を切り込む形でＴピットが検出できた。等高線図作成に入る。６日、調査区２箇所で基本層位図を作成する。９日、最後まで残っていたＴピット（ＳＫＴ21）と調査区南端の土坑（ＳＫ18）の精査完了を以て、本Ｃ区の調査を終えることができた。

第２節　検出遺構と遺物

Ｃ区で確認した遺構は、竪穴住居跡１軒、Ｔピット１基、土坑６基、焼土遺構４基、土器埋設遺構３基及び溝状遺構１条である。これらの内、第Ⅲ層大湯浮石層面で検出したＳＤ01溝１条以外については、遺構の確認面と出土遺物から縄文時代の構築と考えることができる。

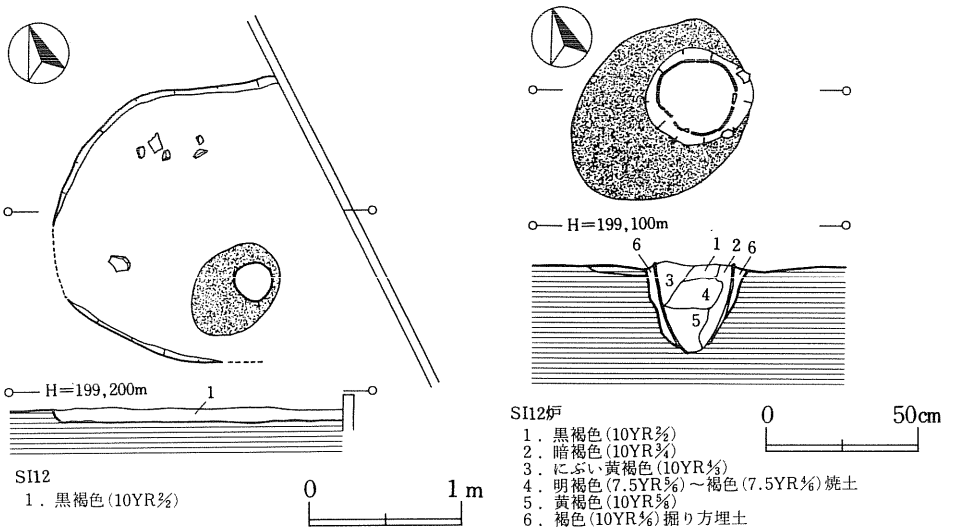
１　縄文時代の検出遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区南側で確認した１軒のみである。本遺構の東側は、調査区を画する農道側溝（Ｕ字溝）工事より破壊されている。

ＳＩ12　（第217・218図、図版94・95）

位置・確認状況　ＫＱ97・98グリッド、第Ⅶ層で検出した。この区域は、農道建設時と見



第217図　SI 12竪穴住居跡・炉

られる削平を受け、表土に第Ⅶ層地山土がブロック状に混じっており、地山面も削平されていることが窺える。

形態・規模　残存部分から判断して径（南北長）1.8mの円形、もしくは東西方向にに長い楕円形をなすものと想定される。

覆土　確認できた堆積土は、黒褐色土単層である。

床・壁　床面は堅く締まっているが、あまり平坦とは言えない。壁高は最大でも10cmである。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

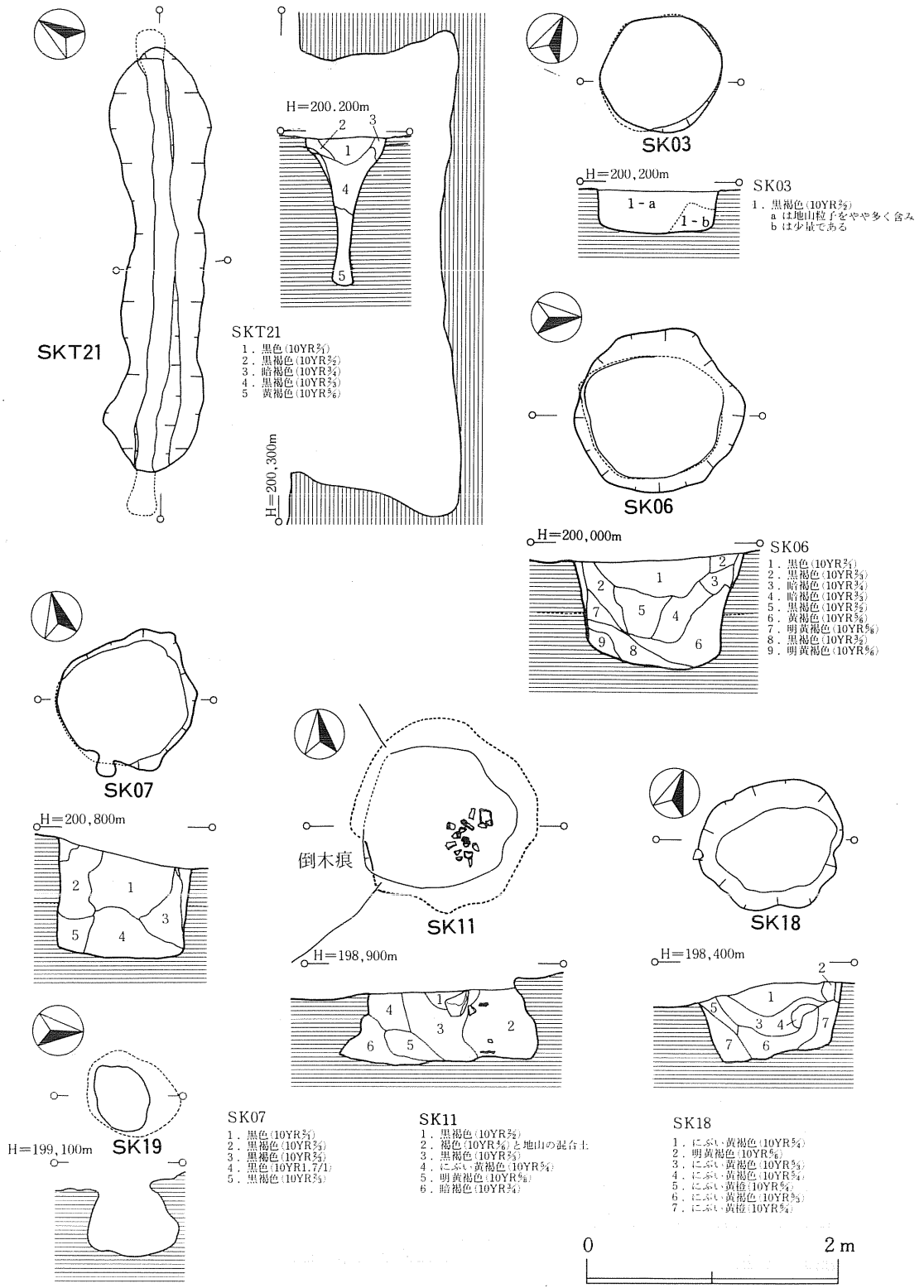
炉　南壁寄りに埋甕炉を検出した。口径25cmの土器に対し、径35cm前後の掘り方をもつ。土器底部は埋設時点で故意に打ち欠いたものと考えられる。埋甕の周囲（長さ65cm、幅50cmの楕円）には硬化した焼土面が認められる。

出土遺物　第221図１が炉に埋設されていた土器である。小さな底部を持つ薄手の深鉢形土器で、底部と口縁部を欠損している。器外面には煤状炭化物が付着し、胴部下半が受熱によって変色し脆くなっているところから、埋設炉として使用される前に煮炊きに使用されていたものと思われる。また残存部の上端から２～５cmの間が内外面ともに変色している。これは炉として使用されているときの火熱によって生じたものと考えられる。

(2)　Ｔピット

ＳＫＴ21　（第218図、図版95）

調査区北側、ＫＳ・ＫＴ14・15グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。長軸を北東－南西方向



第218図　SKT21Tピット・SK03・06・07・11・18・19土坑

に取り、その確認面での長さ3.4ｍ、底面での長さ3.9ｍ、幅0.6～0.8ｍ、深さ1.1～1.3ｍの規模を有する。覆土最下層は、地山の二次堆積土である。

出土遺物は、縄文土器が認められる（第221図12、223図７～11）。

２は、埋土中からと本Ｔピットの周辺から出土した破片が接合したものである。平口縁の深鉢形土器で、口縁部がわずかに外反するが、胴部は筒状を呈すると考えられる。前期後葉の土器であると考えられる。全面に無節の細かい羽状縄文が施されており、口縁部文様帯がない。７～11も前期後葉の土器で、７は口縁部文様帯下端の刺突列がわずかに見えている。７・８・10の胴部文様は、横位回転の羽状縄文であるが、７は結束第一種、８・10は結束第二種である。９・10は同一個体。胎土には繊維をわずかに含むが、微細な孔が多くあり軽い。

(3) 土坑

ＳＫ03　（第218図、図版96・98）

ＬＡ12グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。径95cmの円形を呈し、確認面からほぼ垂直に掘り込まれ、その深さ35cmを測る。本土坑は、覆土の状態から人為的に埋められたものと判断できる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ06　（第218図）

ＫＳ８・９グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。径1.3ｍの円形を呈し、確認面からの深さは最深で90cmである。覆土６層以下は、壁崩落土あるいは人為的埋土の可能性が高い。遺物は、出土しなかった。

ＳＫ07　（第218図）

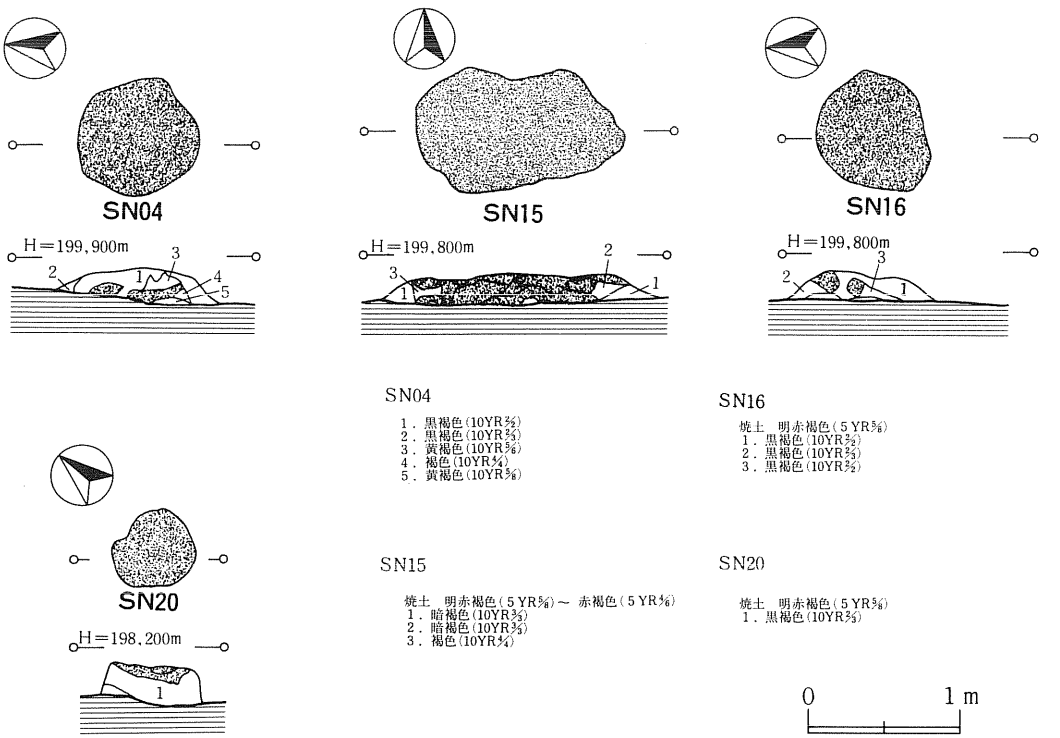
ＫＴ16グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。平面は概ね径1.1ｍの円形を示している。確認面からほぼ垂直に掘り込まれている壁高は90cmある。出土遺物は、出土していない。

ＳＫ11　（第218図）

ＫＱ96・97グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。遺構西側で径５ｍ程の倒木痕と重複し、これを切り込んで構築している。口径1.1～1.2ｍ、深さ50～65cmのフラスコ状土坑である。

遺物は、覆土２層中より縄文土器片が出土している（第221図３、223図12～15）。

３は、平らな底部から外傾して立ち上がった胴部が、上半で内湾し、直立する短い口縁部に至る前期後葉の深鉢形土器である。口縁は、４つの波頂部を持つゆるい波状口縁で、口縁部には縄文の側面痕文による４単位の文様が施されている。口縁部下端には、形ばかりの低い隆帯があり、細い棒状工具による刺突列が付されている。胴部には、結束第二種の羽状縄文が横位に施されているが、下方ほど文様がうすくなり、下端4.5cmほどは無文である。胎土には繊維をほとんど含まず、焼成良好で、器面の調整も丁寧である。12・13も前期後葉で、14～16は後



第219図　SN04・15・16・20焼土遺構

期か晩期の粗製深鉢形土器と考えられる。

ＳＫ18　（第218図）

ＫＱ95グリッド、調査区南端第Ⅶ層で検出した。長径1.2m、短径１ｍの東西方向にやや長い楕円形を呈している。確認面からの深さは、55cmを測る。遺物は、出土しなかった。

ＳＫ19　（第218図）

ＫＲ98グリッド、第Ⅶ層地山面で検出した。口径40～55cm、確認面からの深さ60cmの小さなフラスコ状を呈する。遺物は出土しなかった。

(4)　焼土遺構　（第219図、図版99）

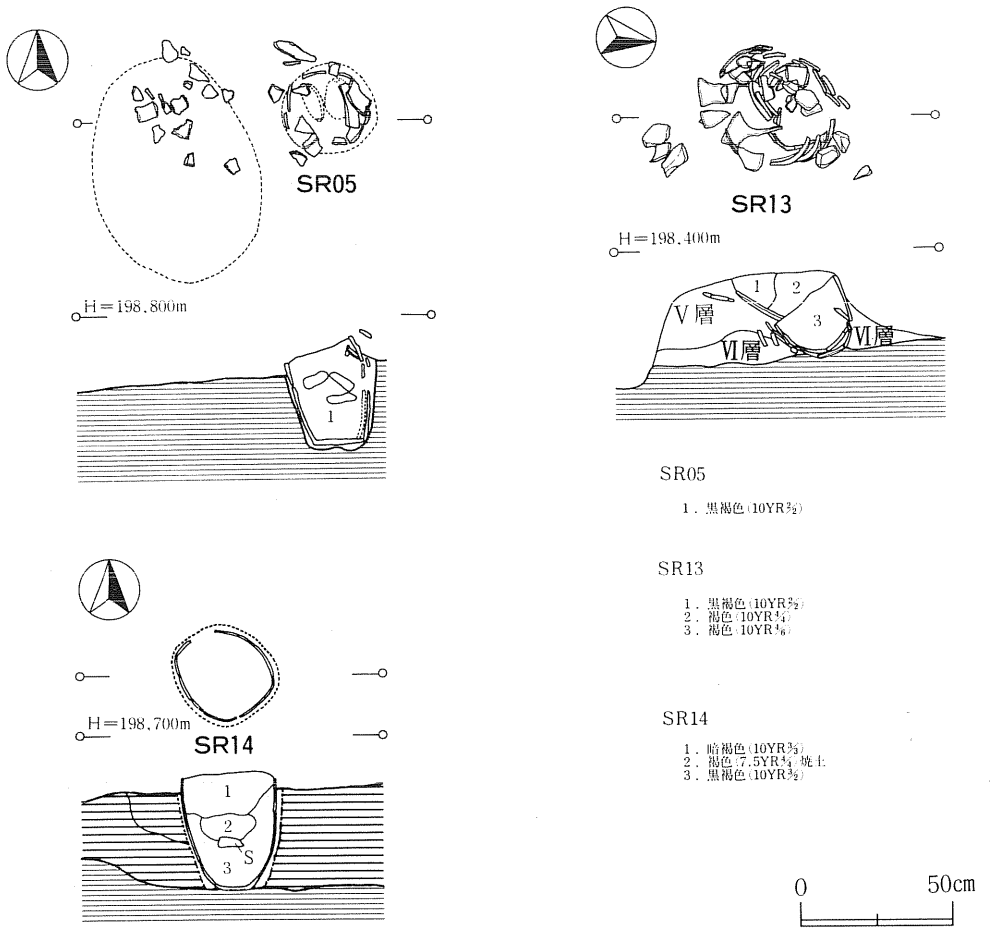
Ｃ区検出の焼土遺構は４基ある。遺構確認面は第Ⅴ層であり、掘り込みを伴うものはない。各遺構の検出位置と規模・形態は以下のとおりである。

ＳＮ04（ＫＳ３グリッド）径約80cmの円形

ＳＮ15（ＫＲ２グリッド）長さ1.35m、幅0.85mの不整楕円形

ＳＮ16（ＫＲ２グリッド）径約70cmの円形

ＳＮ20（ＫＱ97グリッド）径約55cmの不整円形



第220図　SR05・13・14 土器埋設遺構

(5)　土器埋設遺構　（第220図、図版100～102）

ＳＲ05　（第220図、図版100）

ＫＱ２グリッド、第Ⅴ層下面で検出した。確認時は、埋設土器西側に長径1.5ｍ、短径1.1ｍの黒色土のプラン（図中の点線内）と土器の分布を確認でき、下面に土坑の存在が考えられたが、明確に掘り込みを伴う遺構とはなり得なかった。埋設土器は、第Ⅶ層地山面を掘り下げ、正立状態を保っていた。土器内部中位には、緑色凝灰岩製の半円状扁平打製石器（擦石）が３点確認できた（第221図４、223図17～19、224図Ｓ１～４）。

４が埋設されていた土器である。４は、外傾して立ち上がった胴部が、上端近くで内面に屈折してわずかに外反する口縁部に至る前期後葉の深鉢形土器である。このため、器最大径はこの屈折部にある。口縁は平口縁と思われるが、極くゆるやかに波打っており、口縁部の縄文の側面圧痕文も横位に４単位で展開している。口縁部文様帯の下端に付された低い隆帯上には、

１条の側面圧痕文が廻っている。胴部には、付加条の羽状縄文が横位に施されているが、上端には２条の綾繰文が付されている。胎土は多孔質で、繊維や砂粒をほとんど含まず、比較的軽い。器内面と外面下端のみがきは光沢を放つ程に丁寧で、外面に煤状炭化物が付着しているものの、脆くはなっていない。17〜19は、埋設土器西側の黒色土の落込みから出土している。これらも前期中葉から後葉の土器である。

224図Ｓ１〜３の石器は、この埋設土器の埋土中にあったもので、Ｓ１・２がほぼ同一レベルに併存し、この下にＳ３が埋められていた。Ｓ１・２は非常に丁寧に作られ使用された半円状扁平打製石器（擦石）である。Ｓ３は刃部以外は擦られていない。Ｓ４も埋設土器西側の落込み内出土のくぼみ石である。

ＳＲ13　（第220図、図版101）

ＫＲ98グリッド、第Ｖ層上面で検出した。埋設土器の掘り方は明確ではなく、第Ⅶ層地山面を底面としている。正立していたと考えられるが、土圧の影響か口縁方向が南側に倒れる状態で検出された。

第222図１は、平らな底面から外傾して立ち上がった胴部が、直線的に上昇し口縁に至る前期後葉の深鉢形土器である。平口縁で短い口縁部には、縄文の側面圧痕文が４条平行に走り、条間に小さい径の棒状工具による刺突列が施されている。口縁部下端には低い隆帯が貼付され、隆帯上には、口縁部の刺突列と同じ工具で、正立させた土器の右方向から刺突した刺突列が付されている。胴部には、結束第二種羽状縄文の結束部とＲＬ原体側のみが施文されている。胎土にはわずかに砂粒を含むが、繊維はほとんど含んでいない。器外面には煤状炭化物が付着しており、焼成器面調整ともに普通である。

ＳＲ14　（第220図、図版102）

ＫＱ96グリッドで検出した。ＳＫ11、ＳＮ20と重複している倒木痕と同じ倒木痕を掘り込んでいる。掘り方は明確ではないが、正立して埋められている。覆土２層は、焼土を主とし、３層には、地山に含まれる亜角礫が１点混じっている。

第222図６は、小さな底部から比較的強く外傾して立ち上がった胴部が、外傾を弱めながらわずかに内湾する口縁部に至る深鉢形土器である。後期の可能性もあるが、晩期のものと思われる。平口縁で、口唇は狭い幅ながらも平坦面となっている。器外面、全面にＲＬ単節斜縄文が施されている。ところで、この土器の器面の色調が部位によって大きく異なっている（巻頭図版四を参照）。それは内面において著しい。内面では、底部から胴上半（口縁端から約５㎝下）までは黒色を、その上が浅黄橙色を呈しており、その境目が明瞭で色調の変化が漸移的でない。内面の調整は横位のユビナデが主体で、磨かれておらず、内面の黒色部は器面調整や煤状炭化物の付着とは関係ない。このことは器外面もほぼ同様であるが、外面の場合、一般的に

粗製深鉢形土器が最も火熱を受けて脆くなる胴下半部が、やはり受熱によってうすく赤変している。この埋設土器が検出された時点では、この土の上や周囲で焚いたような痕跡は認められなかった。とすると、口縁部の赤変とそれ以下の内面が黒色を呈することの要因を他に求めなければならないが、現在のところそれはわからない。ただし、口縁部内外面の赤変は、一般的には受熱によって生じたものとするのが妥当と思われる。外面胴部中位には煤状炭化物が多く付着しているが口縁部ではそれが痕跡程度である。この土器が埋設される前の段階に、何らかの特別な扱いを受けた結果の可能性もある。

3　平安時代の検出遺構と遺物

該期の遺構は、第Ⅲ層大湯浮石層面で確認している溝１条である。溝内から同時代の遺物は出土しなかったが、Ａ区の事例を参照して平安時代の遺構として扱う。

ＳＤ01　（第216図、図版92）

調査区中央北側、ＫＲ８～13グリッドで確認している。およそ南北方向に直線的に延びるが、溝の南端ではいくらか東に曲がっていくようである。確認できた長さ約16ｍ、幅30～40㎝、深さは僅か５～10㎝で溝底面は第Ⅴ層中に収まる。

覆土中からフレークが２点出土している。

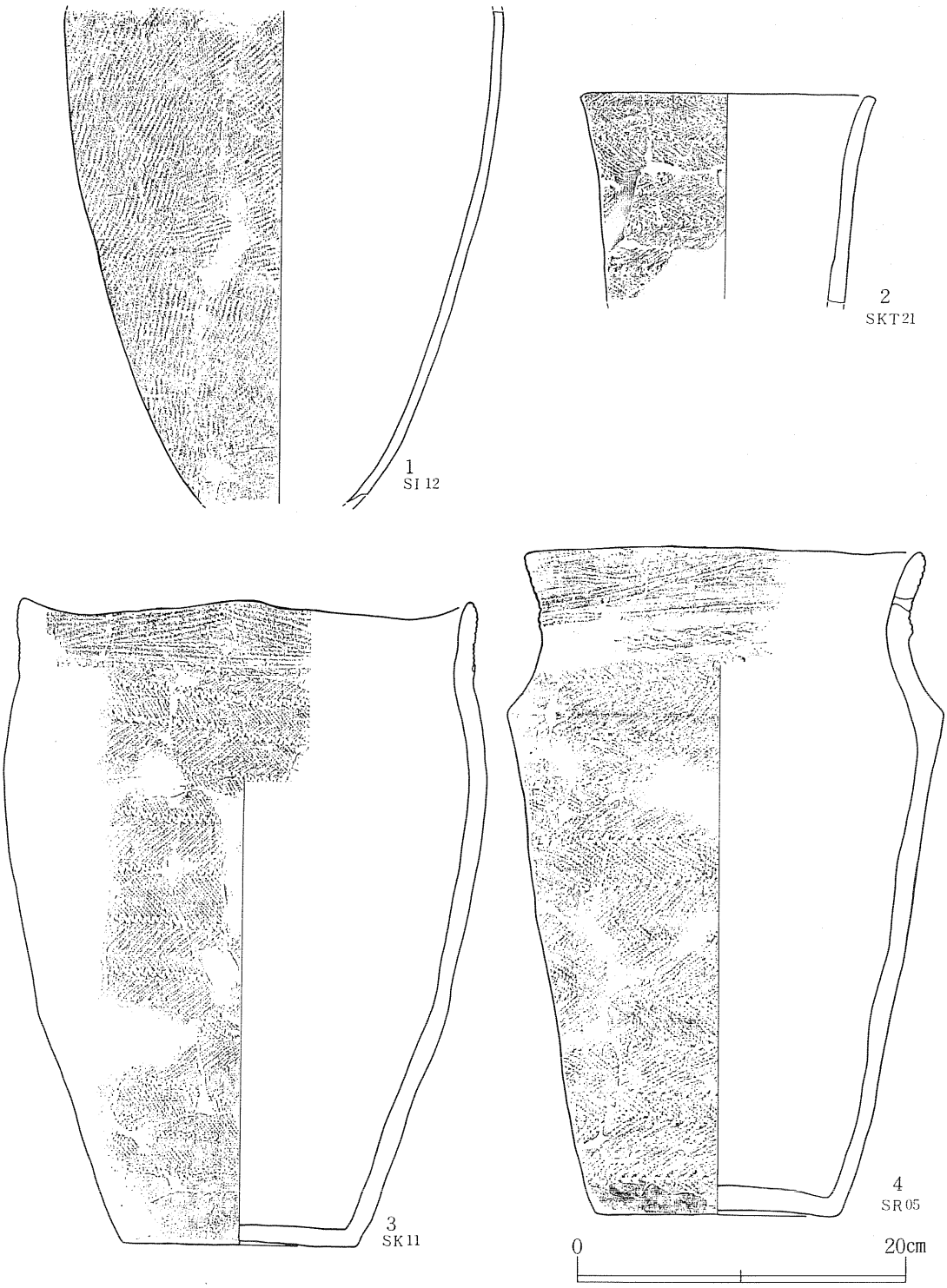
4　遺構外出土の遺物

(1)　土器

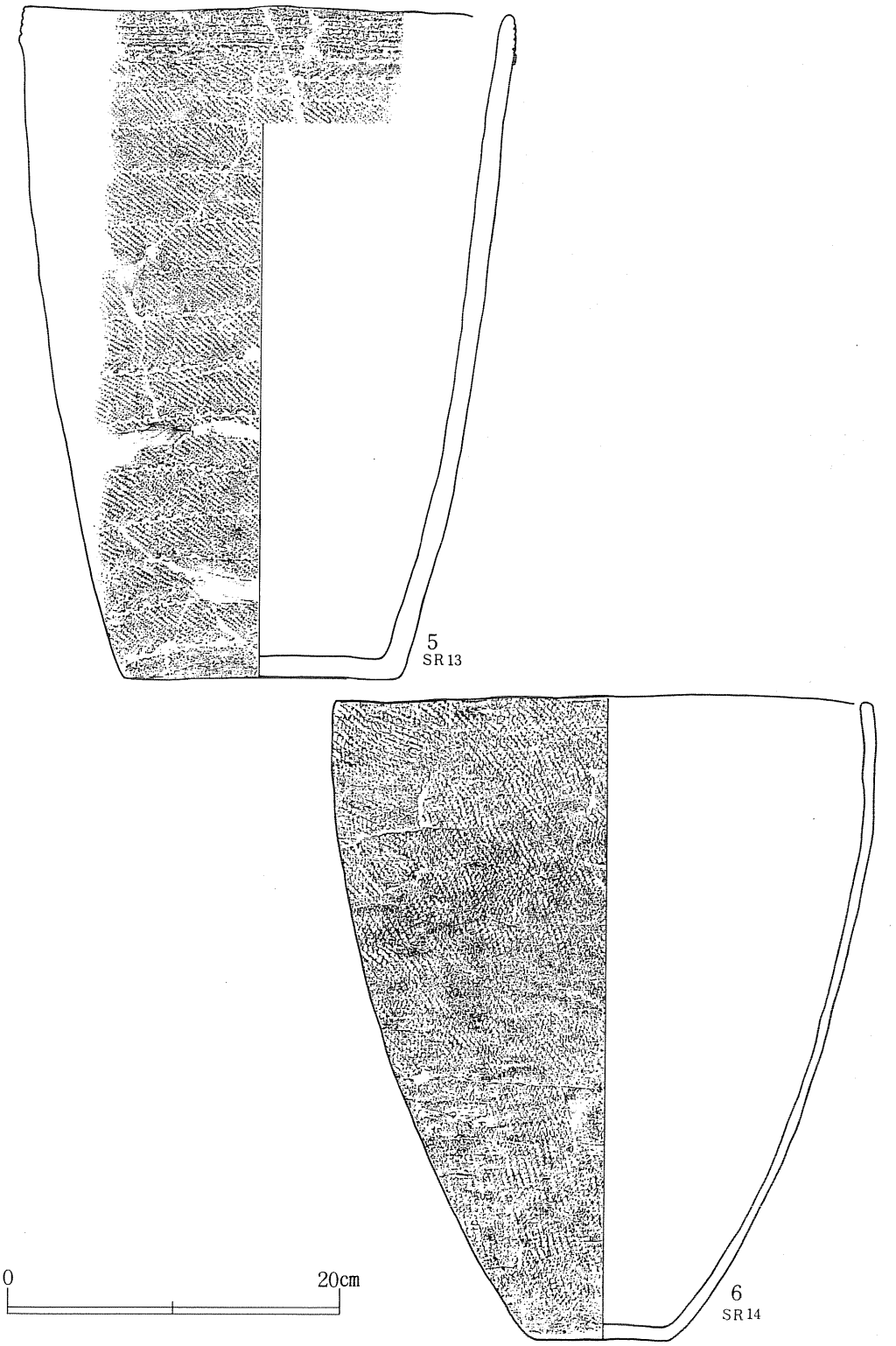
遺構外から出土した土器の大部分は前期のもので、次いで後期のものがあり、晩期のものは少量である。

①　前期の土器　（第225図19～24、226図26～227図69）

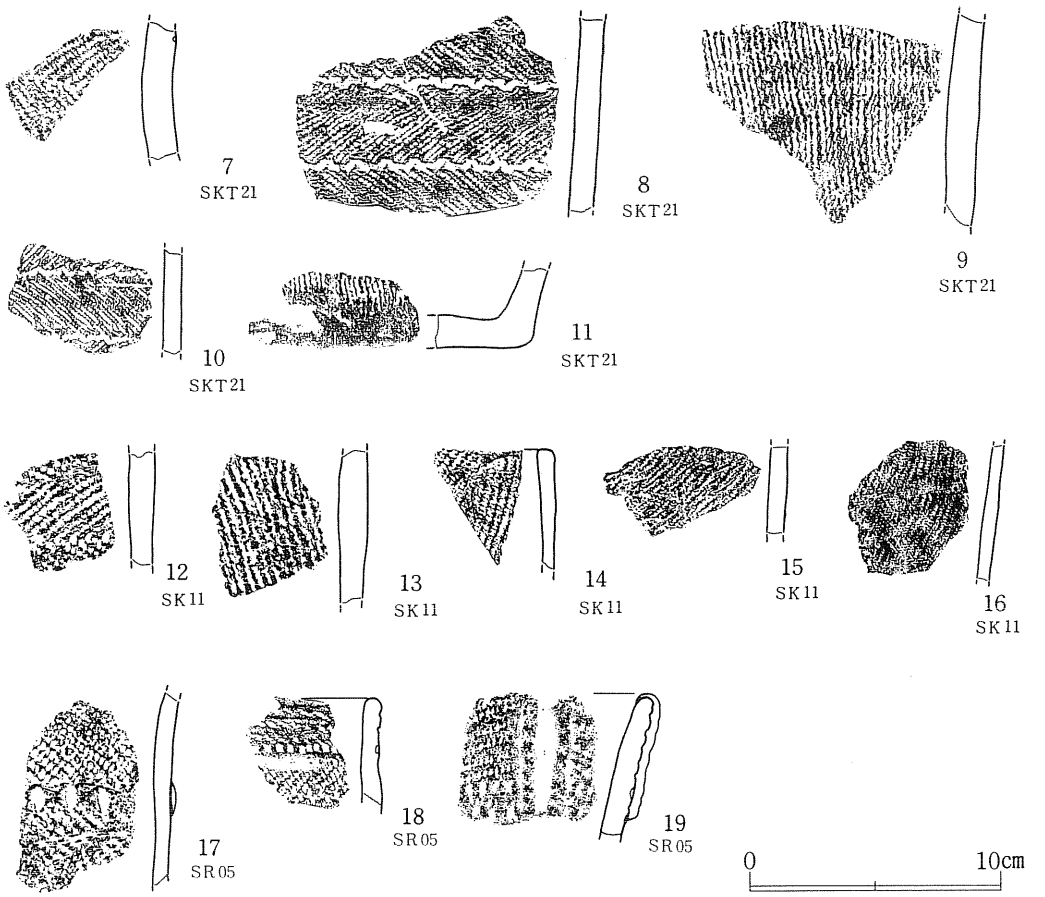
26～28は、口縁部文様帯の幅が比較的広く、口縁部が外反する類である。26は、ＳＫＴ21出土の破片（223図17）と同一個体である。27は、口縁部にＬＲとＲＬの縄文を２本一組にして押圧したもので、その下に不整の撚糸文を施文している。焼成が良く、胎土には砂粒を多く含んで繊維をほとんど含まない。内面には器本体の胎土とは全く異なる粘土を厚さ0.5㎜以下に塗っており、これがみがきによって平滑にされ、光沢を放っている。19・20、29～55は、ほとんどが直立かわずかに内湾する短い口縁部の下端に低い隆帯を有する類である。口縁部文様帯は、縄文か撚糸の側面圧痕文によっており、これに刺突列の加わるものもある。58を除く56～66と21は側面圧痕文のみで隆帯を有しないものや、縄文だけのものなどである。66は、平坦にされた口唇部の中央に側面圧痕を１条施し、その両側に刺突列を加えている。22～24と67・68は、波頂部から隆帯や側面圧痕文が垂下するものである。22は、口縁部の最もくびれた部分の



第221図　Ｃ区　遺構内出土遺物（１）・土器（１）



第222図　Ｃ区　遺構内出土遺物（２）・土器（２）

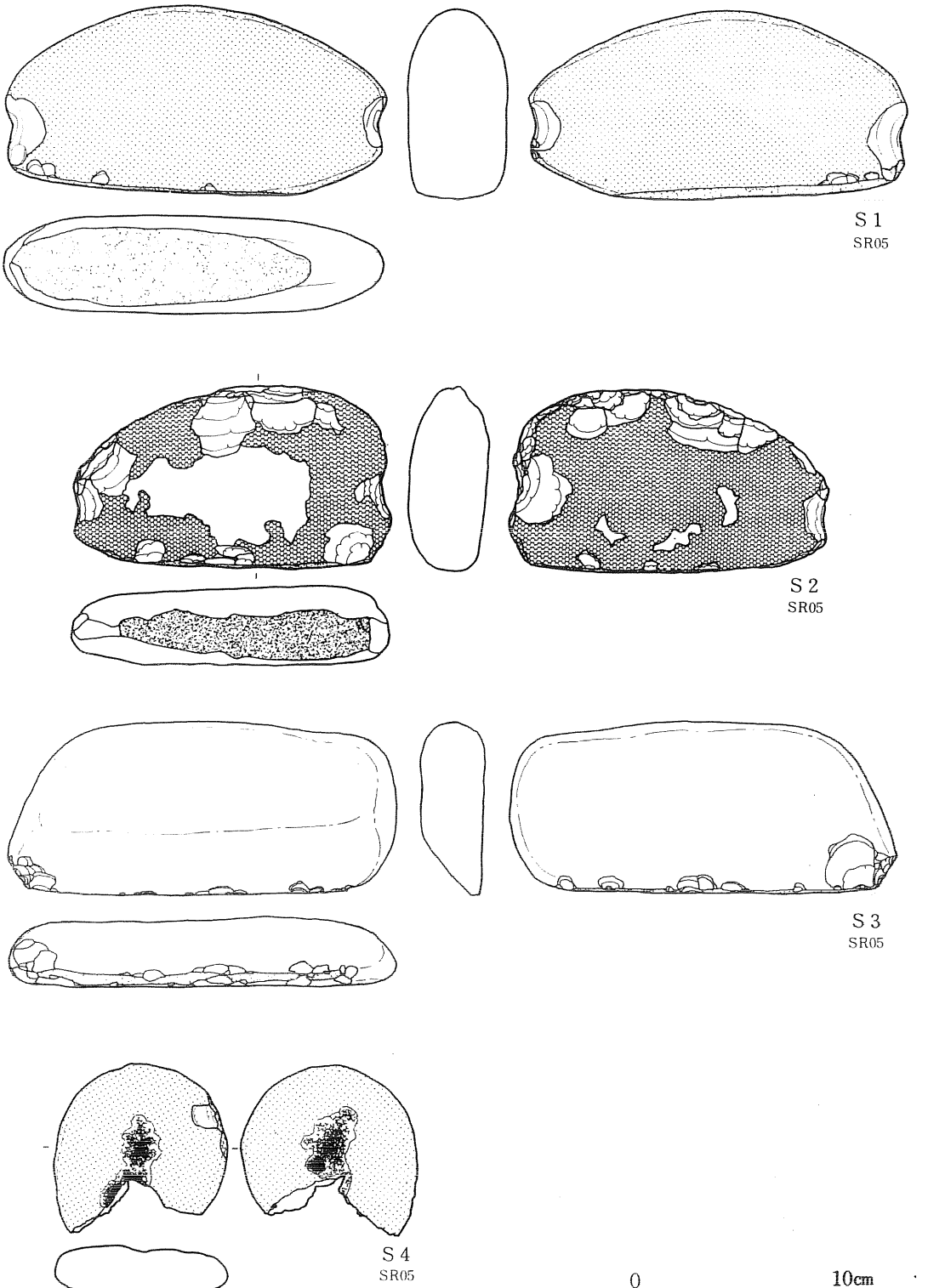


第223図　Ｃ区　遺構内出土遺物（３）・土器（３）

上に低い隆帯があり、４つの波頂部から幅広の隆帯が前者の隆帯まで垂下している。胴部の上端には３～４条からなる綾絡文帯が施され、同じ綾絡文帯が４つの波頂部とその中間の計８箇所にも垂下している。23・24は、短い円柱に、上下から押し潰した球をのせたような胴部に、外反ないしは口縁端部で内湾する口縁部の付く形の深鉢形土器である。23の口縁部は、縄文の側面を直線的に押圧した後、その間を短い側面圧痕による矢羽根状の文様で埋めている。口縁部下端には、半截竹管による刺突の施文された隆帯を有し、４つの波頂部からは３本一組の隆帯が垂下している。

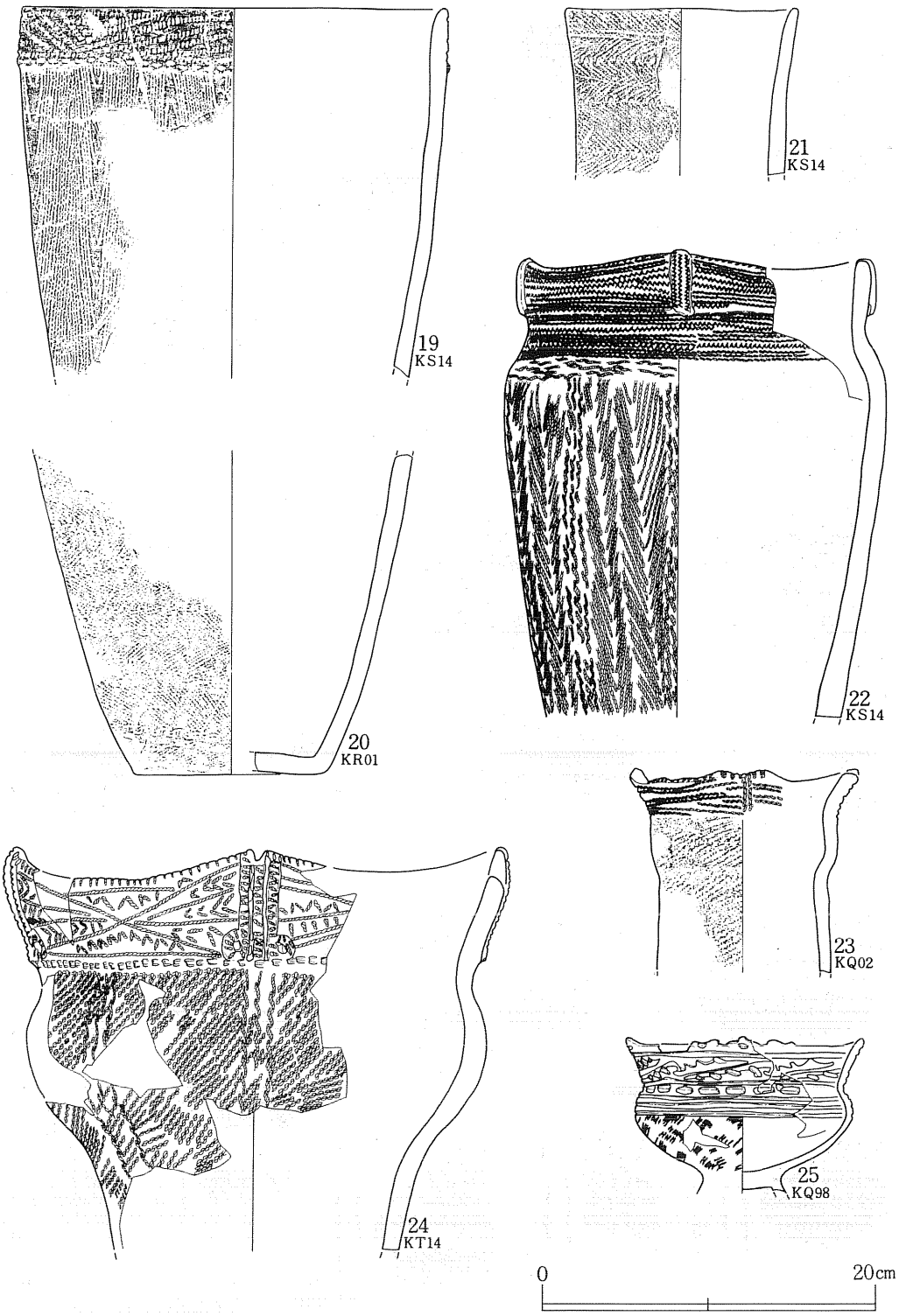
②　後期の土器　（第227図58・70～228図92）

69は内湾する波状口縁の深鉢形土器破片である。口縁波頂部分には縦位に粘土紐が貼り付けられ、３箇所に竹管状工具による刺突が施される。口縁に沿って沈線が巡るが、特に文様帯が設けられるということはなく、波頂部下に施される紡錘形のモチーフと一体となって描かれている。地文にはＬＲ縄文が左上―右下の方向で回転施文されている。口縁波頂部は４単位と推

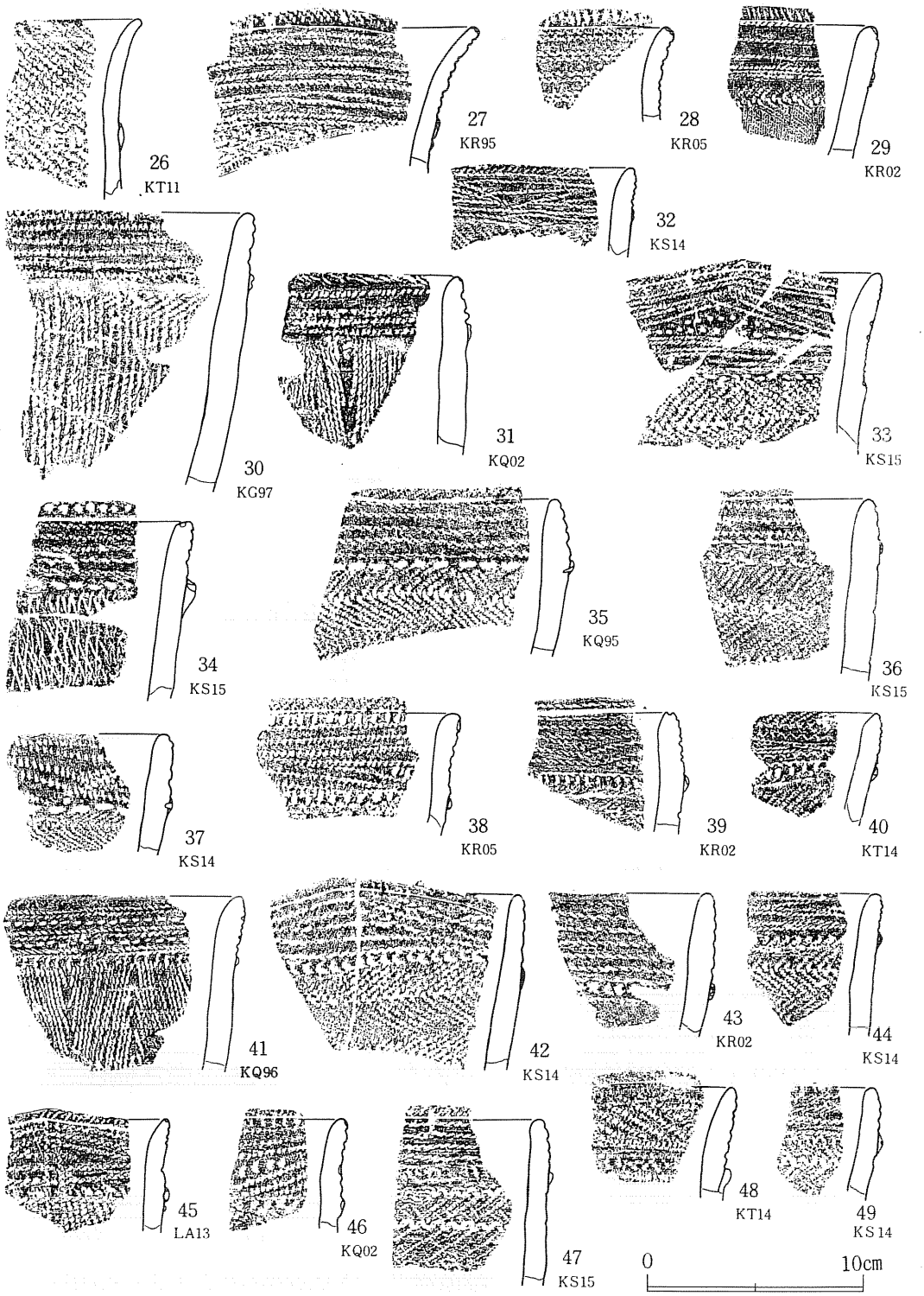


第224図　Ｃ区　遺構内出土遺物（４）・石器

定される。70～73（同一個体）はおそらく４単位の波頂部をもつ小形の鉢形土器に復元される。口縁部は外反肥厚し、体部下半で大きく膨らむ器形を呈するものと推定される。口唇部は外そぎぎみに作られ、折り返し口縁状に肥厚した口縁はその下端に粘土接合痕が観察され、上面には１条の沈線が巡らされている。口縁部文様帯には波頂部からＳ字状沈線が降ろされ、各波頂部間は２条の斜位平行沈線が連絡するものと思われる（73）。地文にはＬＲ縄文が横位回転施文される。74も70～73と同様の器形を呈する鉢形土器の波頂部片と推定されるが、この資料の口縁は次第に厚さを増して内湾ぎみに外傾する。口縁には波頂部下で反転して描かれる２条の並行沈線が施され、さらにその下位に弧線文等が描かれている。地文にはＬＲ縄文が縦位に回転施文されている。75～77（同一個体）も70～73、74の個体同様の器形を呈する鉢形土器である。口唇部は丸みを帯び、折り返し口縁状に肥厚した口縁部には70～73同様１条の沈線が施され、その下端には粘土接合痕が観察される。また波頂部では焼成以前の上下の穿孔が行われている。口縁下からの体部では３条１組の線による縄文帯が文様を構成しているが、沈線は３条が平行に描かれるのではなく上下の沈線が部分的に枠状の構図を作りながら描かれている。縄文は帯状の区画に沿ってＬＲ原体の回転方向を変えて充填的に施されている。78、79は内湾する口縁の深鉢形土器片である。口唇上には竹管状工具の刺突文が施され、口縁～体部には帯状区画を作る沈線文が描かれ、ＲＬ縄文が充填的に施されている。80は波状口縁の深鉢形土器片である。折り返し口縁状に肥厚する口縁部にはＬＲ縄文が横位回転施文され、波頂部下には上向きの弧線文が描かれる。81は小形鉢形土器の口縁部破片である。口縁上端は短く外反するが、口縁下を巡る沈線の施文状態から、口縁はやはり波状を呈するものと推定される。口縁下の文様は狭い帯状区画をつくる沈線文によって構成され、ＬＲ縄文が充填的に施されている。82は深鉢形土器の体部片である。２本のＲ｛｝の撚紐を軸に巻き付けた原体（単軸絡条体第５類）により、網目状撚糸文が施文されている。83もまた深鉢形土器の体部片である。器面を水平に巡る隆線下にＬＲ縄文を充填的に施した帯状区画文による文様が施される。84は波状口縁の鉢形土器口縁部片である。70～73、75～77の個体同様、口縁上端が折り返し口縁状に肥厚して沈線が１条加えられるほか、口縁下にも隆帯が巡り一部で口縁の肥厚部分と連絡し、おそらくは波頂部下に加えられるリング状の隆帯とも連続する。隆帯上にはＬＲ縄文がその展開方向に沿って回転施文される。隆帯の作出が沈線および縄文施文後の無文部分の削り出しによって行われること、および口唇部が平らに面とりされることが70～73、75～77の個体と異なる点である。86は平口縁の小形鉢形土器の破片である。口縁部には２条の浅い沈線が巡り、それと交差して３条の弧線が施されている。87・88は折り返し口縁の深鉢形土器である。87ではＬＲ縄文が口縁部で横位、体部で縦位に回転施文され、88ではＲ｛｝の撚紐を軸に巻いた原体（単軸絡条体第１類）による平行撚糸文が口縁部では横位に、体部では斜めにおいて縦位に回転施文されて



第225図　Ｃ区　遺構外出土遺物（１）・土器（１）



第226図　Ｃ区　遺構外出土遺物（２）・土器（２）

いる。89～92は縄文のみの施された深鉢形土器である。89・90（同一個体）は口縁が外反し体部が膨らむ器形を呈するものと推定され、ＲＬ縄文が縦位回転施文される。口縁の内側および、外面の一部に赤色顔料の塗布が認められる。

以上の土器は縄文時代後期前葉に属する。主体となるのは十腰内Ｉ式土器であるが、第227図69の土器のみは文様帯および紡錘形のモチーフを中心とした文様構成法の点で他の有文の土器と異なる。むしろその特徴は東北中南部に分布の中心をおく宮戸Ｉｂ式土器に多く認められるものである。宮戸Ｉｂ式との弁別は波頂部に貼り付けられた刺突文施文の粘土紐によって可能であるが、この特徴は米代川、馬淵川両河川の流域および以北の地域の十腰内Ｉ式の旧い段階に共通する。おそらく、この土器は広義の宮戸Ｉｂ式に含まれ、十腰内Ｉ式土器の旧い段階の特徴の一部を備えた資料として評価できると思われる。（註１）

③　晩期の土器、土製品　（第225図25、228図92～102）

92～94は口縁から体部が内湾して降りる鉢形土器である。口縁上端は、92では幅広い刻目、94ではＢ突起が施され、93は平らに面とりがなされる。口頸部文様帯（Ⅱｃ文様帯）中には92・93では三叉文、94ではおそらくは羊歯状文を構成する截痕列が施されている。94の体部にはＬＲ縄文が横位回転施文される。25、95～99は口頸部が外反ぎみに外傾し、体部との境で屈曲して張り出し、以下緩いカーブをもって降りる鉢形土器である。いずれも101のような上部に膨らみをもつ台部がつく土器であろう。25は口縁に５単位の山形のＡ突起をもつが、そのうちの一つは両脇にＢ突起を伴って土器の正面を呈するように見える。口頸部文様帯（Ⅱａ文様帯）は上下を１条づつの沈線によって画され、点列化した支線を伴う三叉文――末端が入り組んで右傾する羊歯状文に変化する過程にある――が７単位施されている。口頸部文様帯下には、縄文時代後期末～晩期初頭にかけての有文の深鉢形土器からの系統を汲む、ⅡａおよびⅡ文様帯分帯の短沈線列が巡り、さらにその下、体部の最も張り出す部位に３条の沈線が巡っている。体部には細かい撚りのＬＲ縄文が横位回転施文される。台部は欠損する。95は口唇上にＢ突起が付けられ、口縁直下には幅の狭い縄文帯が設られ、その下の口頸部文様帯に三叉文が描かれている。さらに屈曲部の上にも縄文帯が巡る。縄文はＬＲの横位回転施文である。この土器は口頸部の外反の程度が強く、あるいは25などの器形とは異なる可能性もある。96は25と同様、屈曲部に短沈線列が巡り、短沈線列下には２条の沈線が巡る。沈線の施文は25が浮彫的に行われるのに対し、本資料では沈線施文後の調整は弱い。縄文はＬＲの横位回転施文である。97は口唇部にＢ突起列が並び、口頸部文様帯の上限の沈線はこの突起列に連絡して施されている。口頸部文様帯中にはクランク状の沈線と粗大な截痕列が施され、下限は１条の沈線で画されている。縄文はＲＬの横位回転施文である。98も口唇上にＢ突起列が並び、口頸部文様帯の上限の沈線はやはり突起に連絡して描かれる。文様帯には粗大な截痕列が並び下限は２条の沈線に

よって画される。体部の縄文はＬＲ縄文を横位回転して施文されている。99はｃ字文がⅡ文様帯として残った（あるいはⅡｃ文様帯として生成された）例で、文様帯は体部の最も張り出した部分に設けられている。100・101は鉢形土器の台部片である。100では下部に鍵手状の浮彫文が連続して施され、下端には狭いＬＲの縄文帯が設けられる。101は上部が膨らみ、下部に広いＬＲの縄文帯が設けられている。

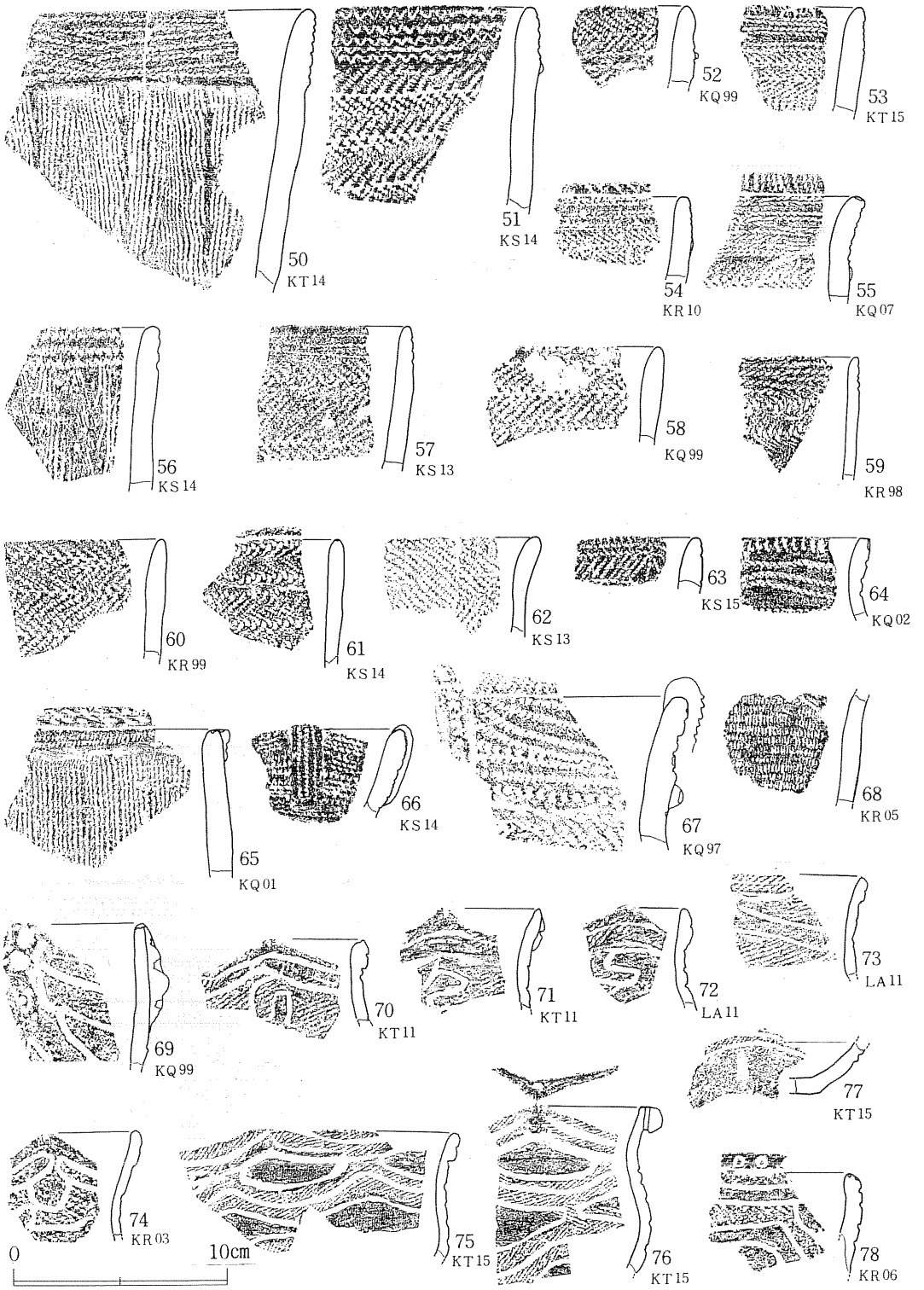
以上の土器は縄文時代晩期前葉の時期に属し、92・93・95・96・101は大洞Ｂ式、25及び94・97〜99・100は大洞ＢＣ式に比定される。

縄文時代に属する土製品として102の土製円盤が出土している。土器片の破断面を擦って作られた小円盤で、表面に描かれた２条の曲線的な沈線から後期前葉の土器片を利用したものと思われる。

④　弥生時代の土器　（第228図103〜111）

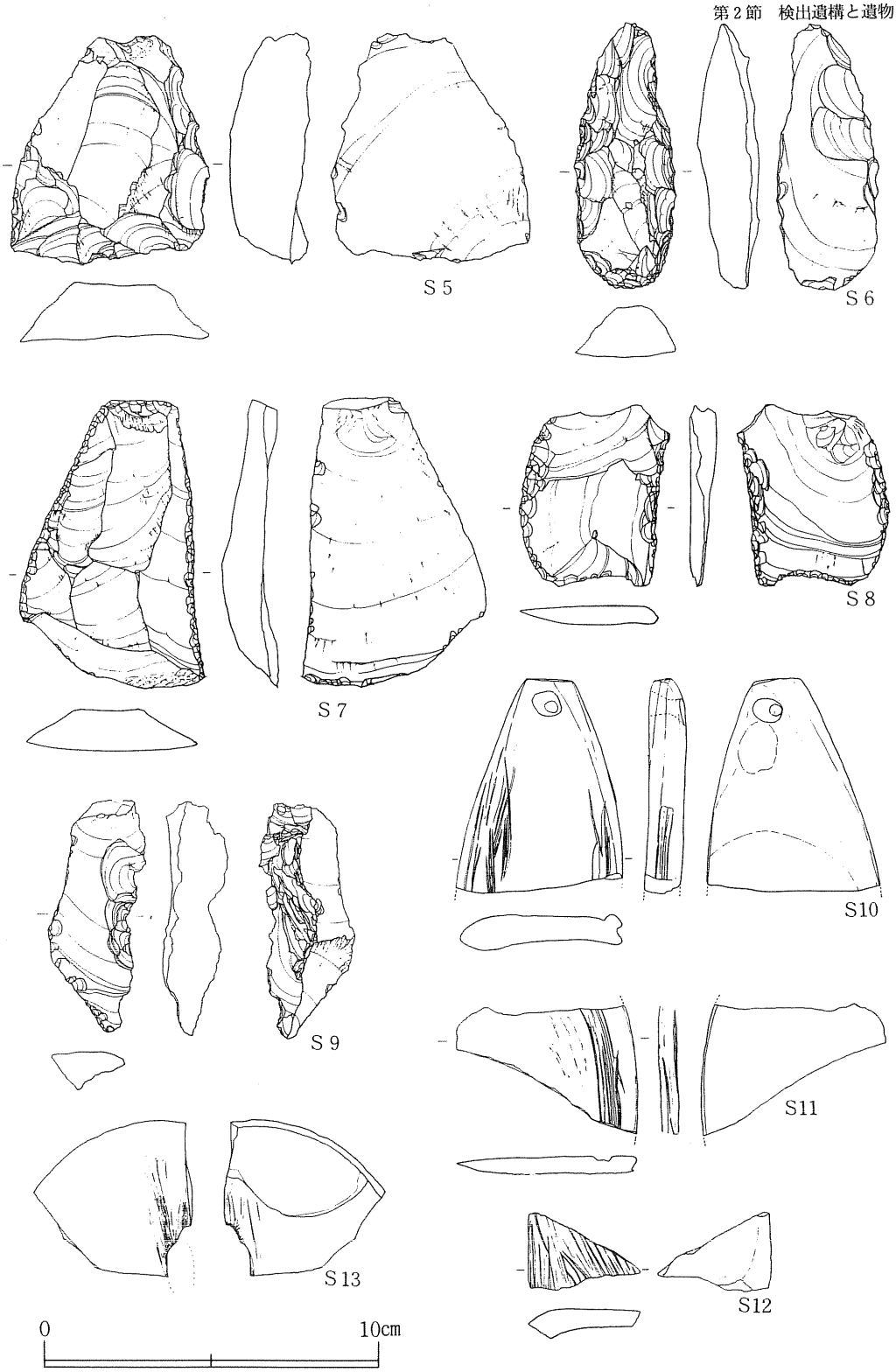
103・104（同一個体）は外傾する口縁をもった深鉢形土器に復元される。口縁の肥厚部分（103）は幅広の粘土帯を接合して、受け口状に作られている。上端外面と下端には刻目列が施され、その間には３条の沈線が巡る。緩く膨らんだ体部上半に設けられる文様帯部分（104）では縦走するＲＬ縄文を施文した後、細い沈線によって弧線文、平行沈線文などが描かれている。105も受け口状の外傾口縁をもつ深鉢形土器の破片である。口唇は平らに面とりされ、口縁部以下に施されるのと同じＲＬ縄文が施文される。地文のＲＬ縄文は口縁部では横位回転の斜行縄文、体部では斜位置き縦位回転の縦走縄文として表される。口縁上端では２条、口縁下の屈曲部には３条の平行沈線が巡り、さらにその下には２条の沈線によって鋸歯文が描かれている。106・107（同一個体）は外傾口縁の深鉢形土器に復元される。口縁上端は外側に張り出し、頸部の屈曲部位から底部まで緩く膨らんで降りる器形を呈する。口縁から底部近くまで全面縦走するＲＬ縄文が施される。108も外傾口縁の深鉢形土器である。体部は緩く膨らんで降りる。口唇は平らに面とりがなされ、Ｒ｛縄文が施される。口縁以下にはＲ｛とＬ｛の２種類の縄文が横位に回転施文される。109は口縁〜体部が外反ぎみに外傾する深鉢形土器である。口縁上端は幾分肥厚し、口唇上面は粗く面とりがなされる。器面は斜位の調整が行われた後、ＬＲ縄文が部分的に施文される。110は緩い膨らみをもった深鉢形土器の体部片である。縦走するＲＬ縄文が原体を左上一右下の方向で回転して施されている。111は底縁外面にＬ｛縄文が横位に回転施文された底部である。体部から膨らみながら下降し、底縁近くで垂直に近く降りる器形を呈する深鉢形土器のものと判断される。

以上は弥生時代後期に中心をおく土器と推定される。103・104は広義の天王山式土器に比定され、110の縄文施文の土器は小坂Ｘ式土器のうち、いわゆる「細縄文」を施す土器の範疇に属するであろう。(註２)

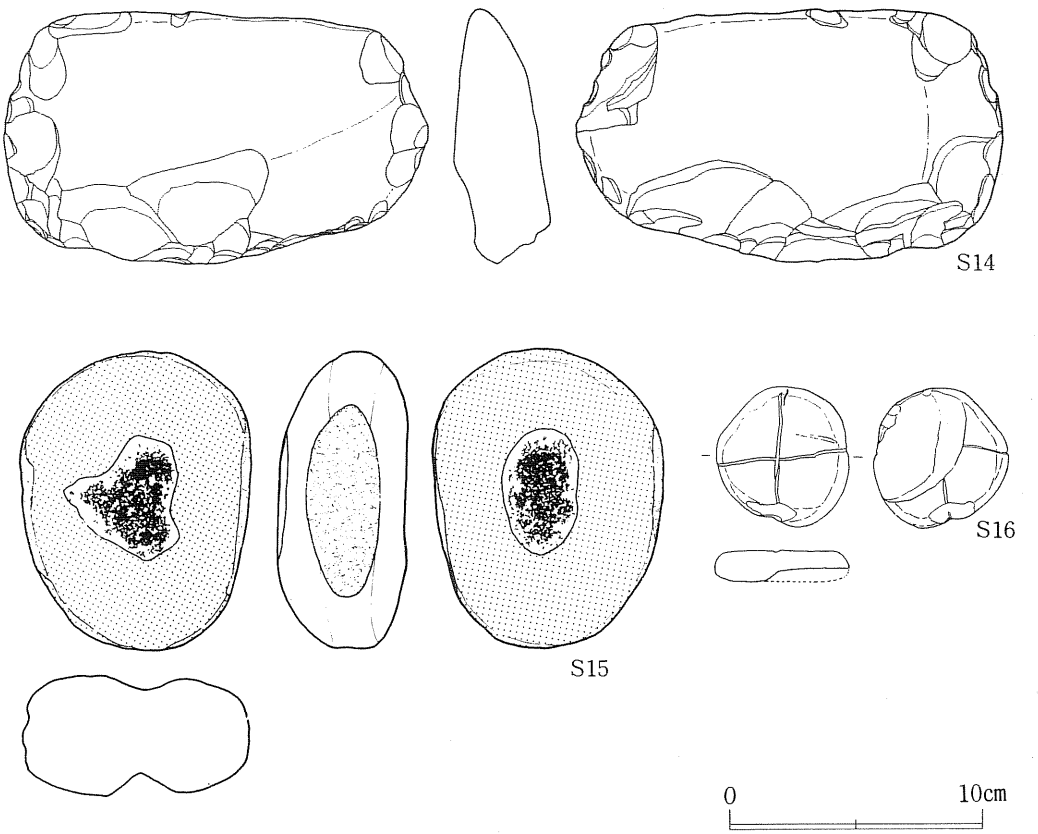


第227図　Ｃ区　遺構外出土遺物（３）・土器（３）

第228図　Ｃ区　遺構外出土遺物（４）・土器（４）



第229図　C区　遺構外出土遺物（５）・石器・石製品（１）



第230図　Ｃ区　遺構外出土遺物（６）・石器・石製品（２）

(2)　石器・石製品　（第229・230図）

遺構外から出土した石器と石製品で図示し得たのは、Ｓ５～９の石器と、Ｓ10～13・Ｓ16の石製品である。Ｓ６は箆状石器、Ｓ７・８は削器、Ｓ９はノッチのある石器で、Ｓ５は削器と思われるが下端を刃部とした掻器の可能性もある。Ｓ14は、半円状扁平打製石器で、Ｓ15は全面がすられているくぼみ石である。

Ｓ10～12は、同一石製品と思われる。Ｓ10の先端に小孔が両面から穿たれており、扁平で平面形が楕円形に近い形状を呈する垂飾品と考えられる。軟質の凝灰岩を原材としており、全面に擦痕が残っている。また、表面右側と右側面には浅い溝がある。Ｓ13は、板状に割れた軟質の緑色凝灰岩の中央部に楕円形と思われる小孔を穿ったもので、完形品の約１／４が残ったものと考えられる。小孔部分には溝状の擦痕が集中している。Ｓ16は、軟質の泥岩の小破片を粗雑に擦るなどして扁平な円形に仕上げ、表裏面に浅い溝で「＋」字を刻したものである。裏面の約半分は器面が剥落している。

第3節　小　　結

はりま館遺跡南端部に位置するC区では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、Tピット1基、土坑6基、焼土遺構4基、土器埋設遺構3基、平安時代の溝状遺構1条の遺構及び、縄文時代前期・後期～晩期、弥生時代の遺物を検出した。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡が後期、土器埋設遺構が前期（SR05・13）と晩期（SR14）と特定できる。Tピット・土坑・焼土遺構は、時期を決定づける遺物の出土に難はあるものの、確認状況も加味して、Tピットが前期かそれ以降、土坑・焼土遺構が後期～晩期と考えている。本節では、前期の土器埋設遺構について若干言及しておく。

縄文時代前期の土器埋設遺構について

調査区南部から、縄文時代前期に属する2基（SR05・13）の土器埋設遺構が検出されている。埋設された2つの土器は、いずれも前期後葉の円筒土器下層d式で、SR13がSR05よりも若干先行するものと思われる。

C区南部は昭和57年調査区南西端部に隣接し、昭和57年調査ではここからSR05・13と同時期の土器埋設遺構2基（S57調査のSR073・069）が検出されている。SR05・13とそれら2基の距離は、SR13とSR073が最も近くて約12m、SR05とSR069が最も離れて約27mである。これら4基はSR05・13・073が正立、SR069が倒立の違いはあるものの、器高40～48cmの前期後葉としては比較的大型の深鉢形土器を掘り方の中に人為的に埋設したもので、土器埋設遺構群として捉えられるものである。この土器埋設遺構群の南東側には、20m～45mの距離をおいて竪穴住居跡群が存在し、両者はほぼ同じ時期と考えられる。従って、住居跡群の東側と土器埋設遺構群の西側には未調査部分が存在し、そこにどのような遺構群が展開されるか不明の現段階では早急な結論は出せないものの、前期の後葉段階には、葬制に関連があると思われるこれら土器埋設遺構が、住居跡群から少し離れた場所に群をなして存在したという事実は明らかである。

註1　これに類似する資料は同じ米代川流域の竜毛沢館跡で出土している。

秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』1990（平成2年）

註2　奥山潤・安保彰「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態（上）・（下）」『考古学雑誌』第49巻2号・3号　1963（昭和38年）

図版一　はりま館遺跡Ａ－・Ⅱ区

はりま館遺跡航空写真（上が南）

ＡⅡ・Ⅲ区　平安時代の遺構の分布状況（上が南）

図版二　はりま館遺跡ＡⅠ・Ⅱ区

ＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ区　調査前の状況（北東▶）

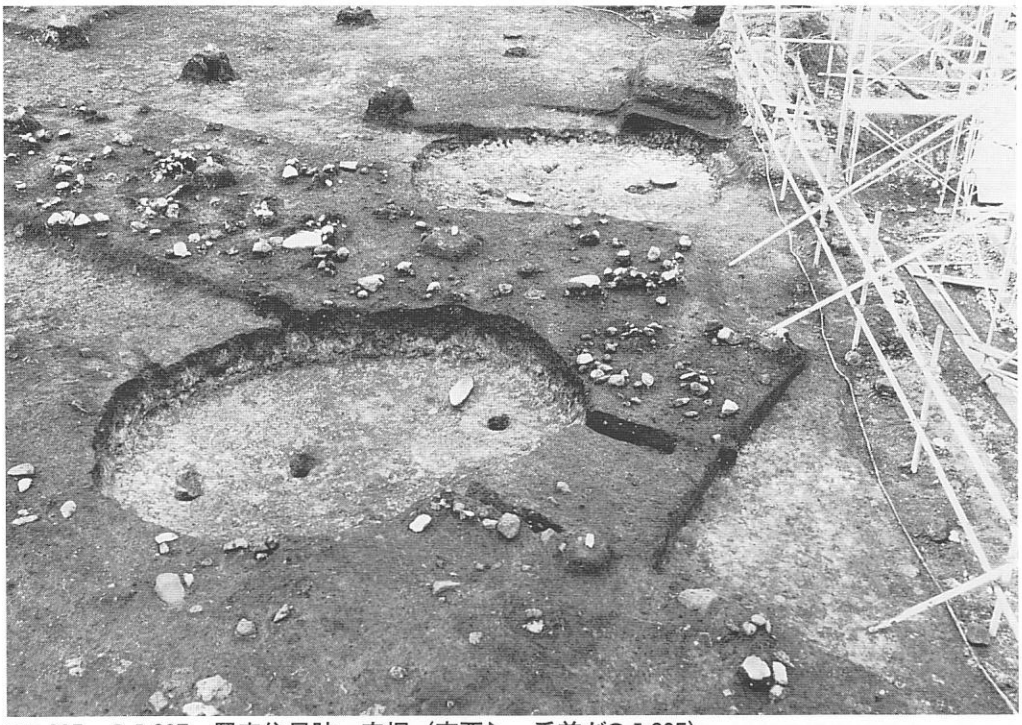
ＡⅠ区　調査後全景（西▶）

図版三　はりま館遺跡Ａⅰ・Ⅱ区

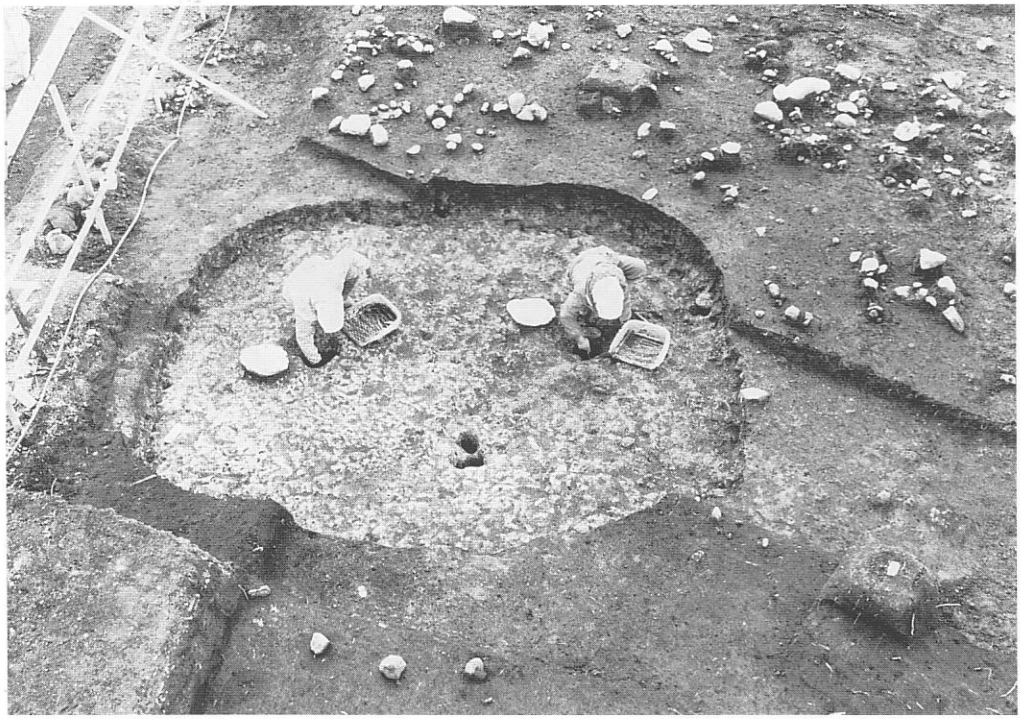
ＡⅡ区　北部の礫群の状況（南西▶）

ＡⅠ区　南部の礫群の状況（南▶）

図版四　はりま館遺跡Ａ－・Ⅱ区



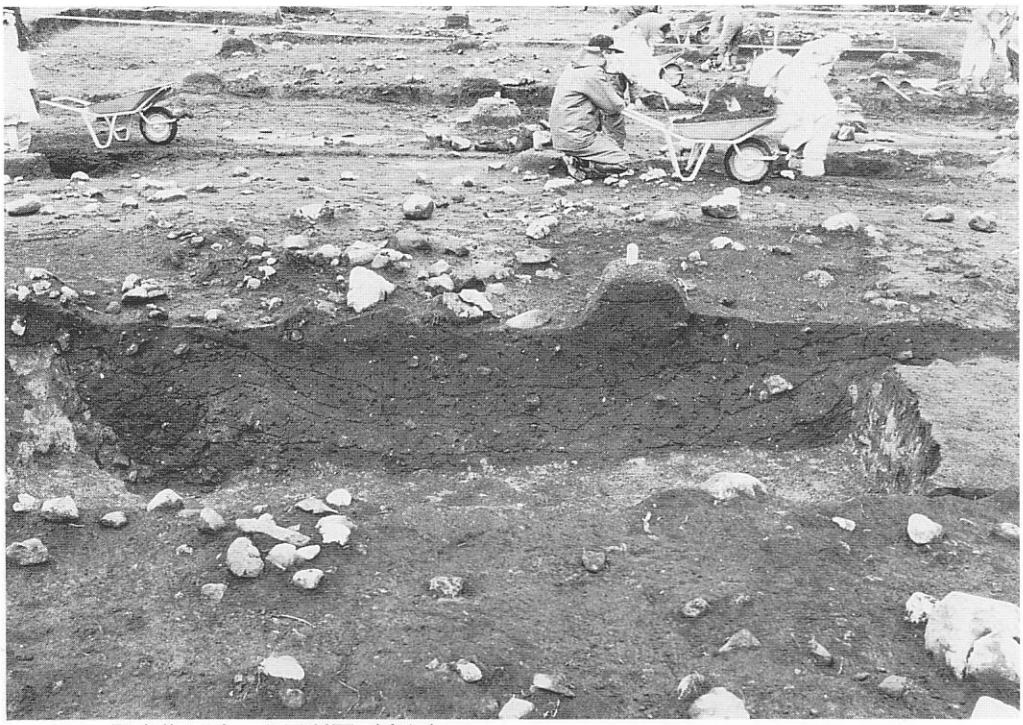
ＳＩ205・ＳＩ207　竪穴住居跡　完掘（南西▶　手前がＳＩ205）



ＳＩ207　竪穴住居跡　完掘（北東▶）

ＳＩ211　竪穴住居跡　遺物・亜角礫出土状況（南▶）

ＳＩ211　竪穴住居跡　完掘（西▶）



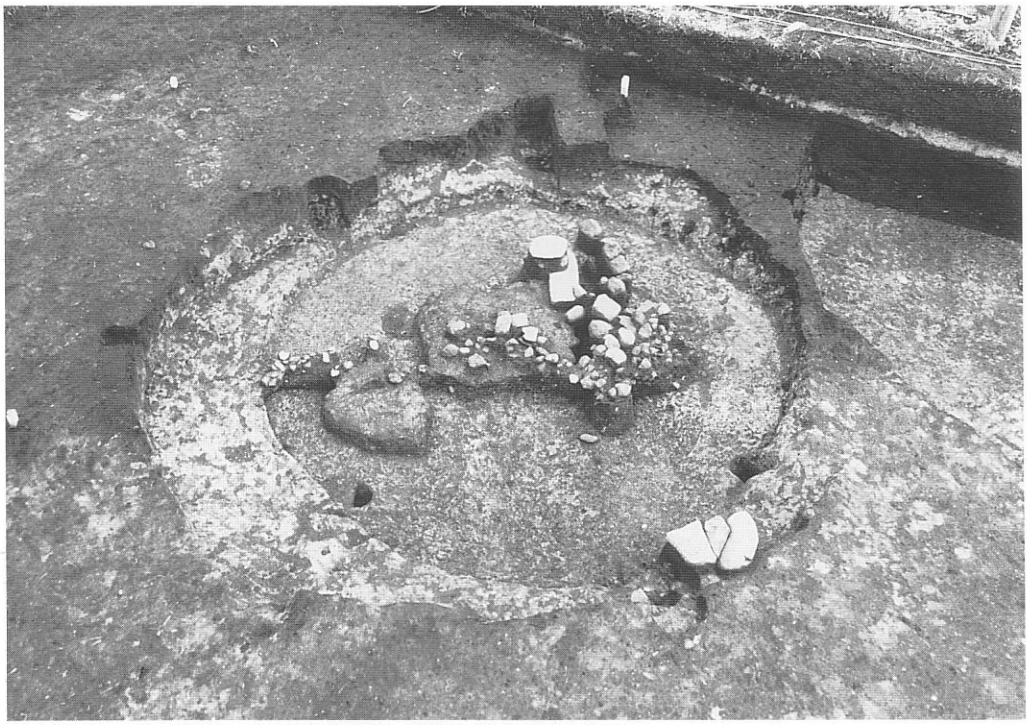
ＳＩ207　竪穴住居跡　土層断面（東▶）

ＳＩ207　竪穴住居跡　完掘（北東▶）

ＳＩ230・231・233・234・235・237　竪穴住居跡　完掘（西▶）

ＳＩ230・231・233・234・235・237　竪穴住居跡　完掘（南東▶）

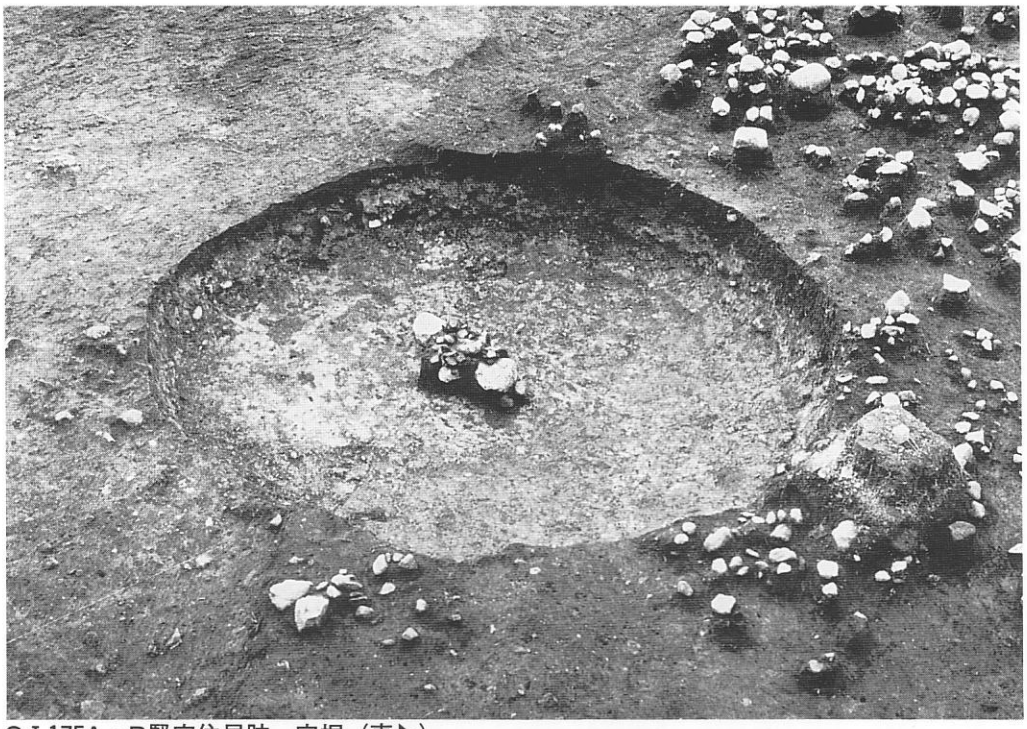
ＳＩ210　竪穴住居跡　完掘（東▶）



ＳＩ212Ａ・Ｂ、215Ａ・Ｂ竪穴住居跡　遺物出土状況（西▶）

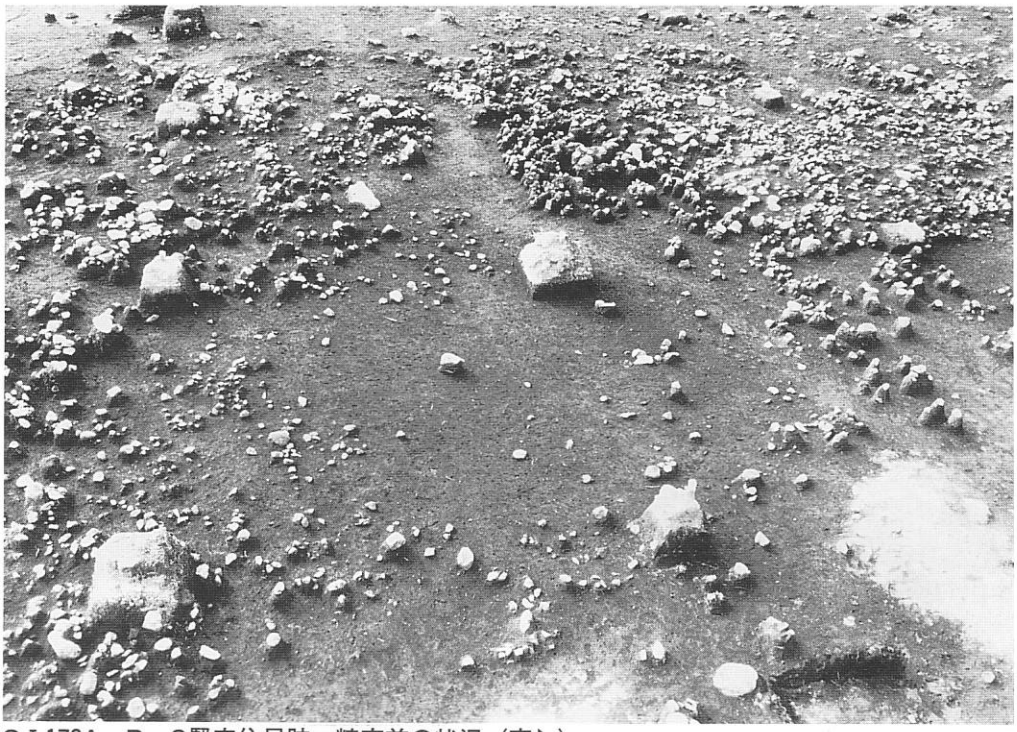
ＳＩ223、224A・B竪穴住居跡　土層断面（南▶）

ＳＩ223、224A・B竪穴住居跡　完掘（北▶）



ＳＩ175Ａ・Ｂ竪穴住居跡　完掘（東▶）

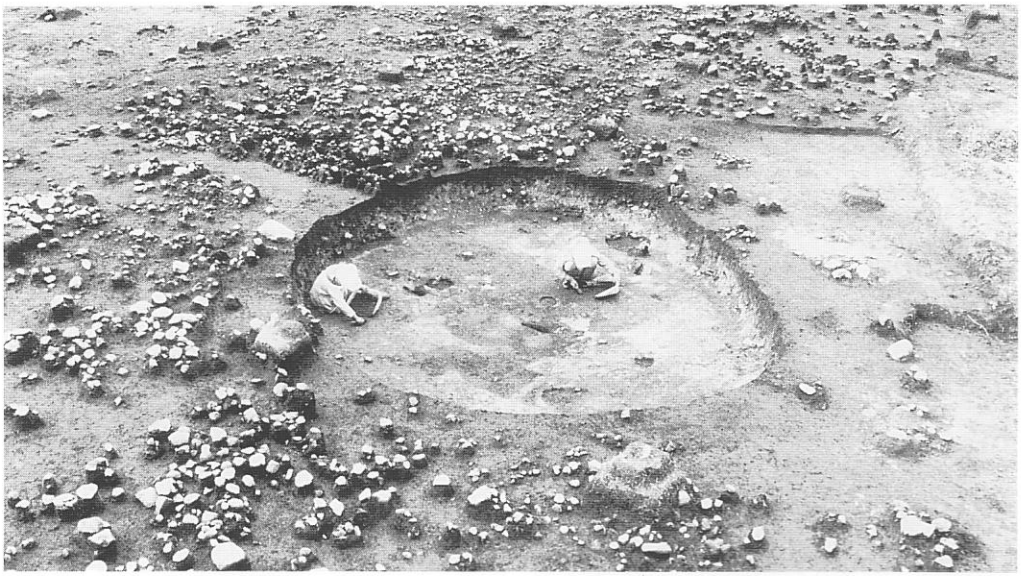
ＳＩ156Ａ・Ｂ竪穴住居跡　完掘（北▶）



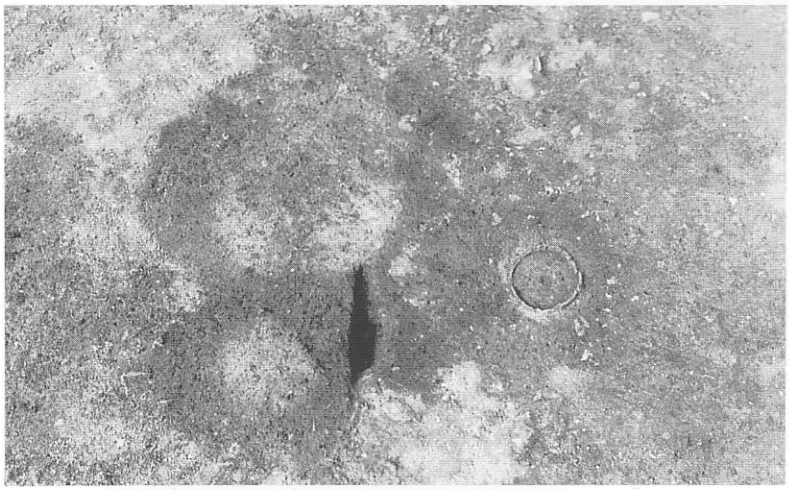
ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡　精査前の状況（東▶）

ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡　半截後の状況（東▶）

図版一二　はりま館遺跡Ａⅰ・Ⅱ区



ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡　完掘（南▶）

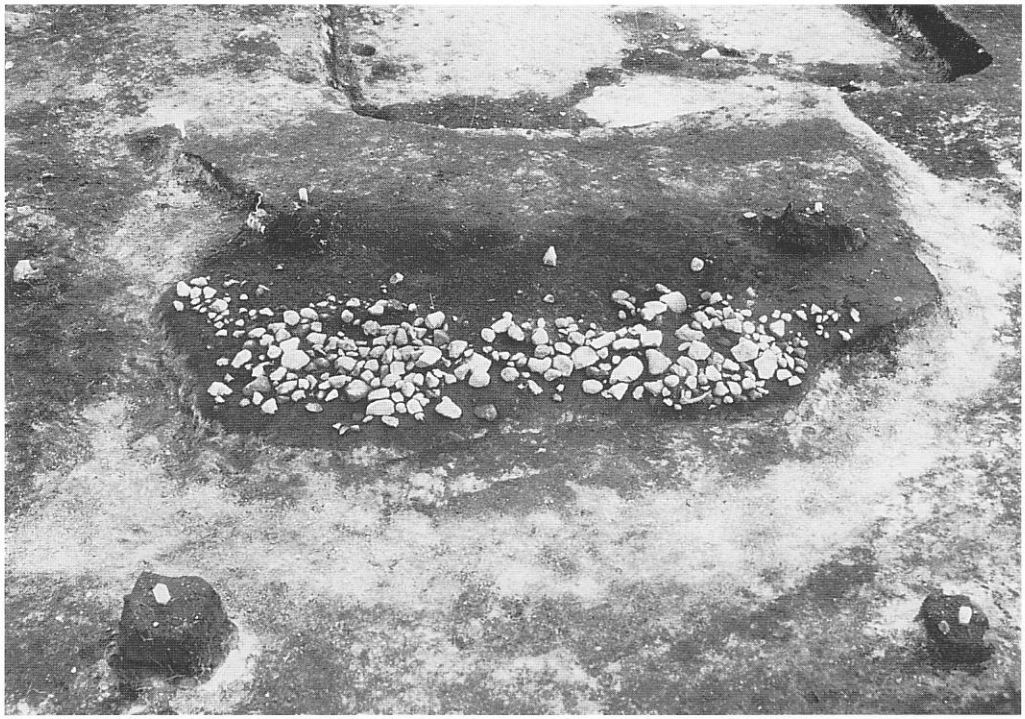


ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃの炉（東▶）

ＳＩ173Ａの土器埋設炉（東▶）

ＳＩ213A・B竪穴住居跡　1/4截の状況（北西▶）

ＳＩ213A・B竪穴住居跡　完掘（南▶）



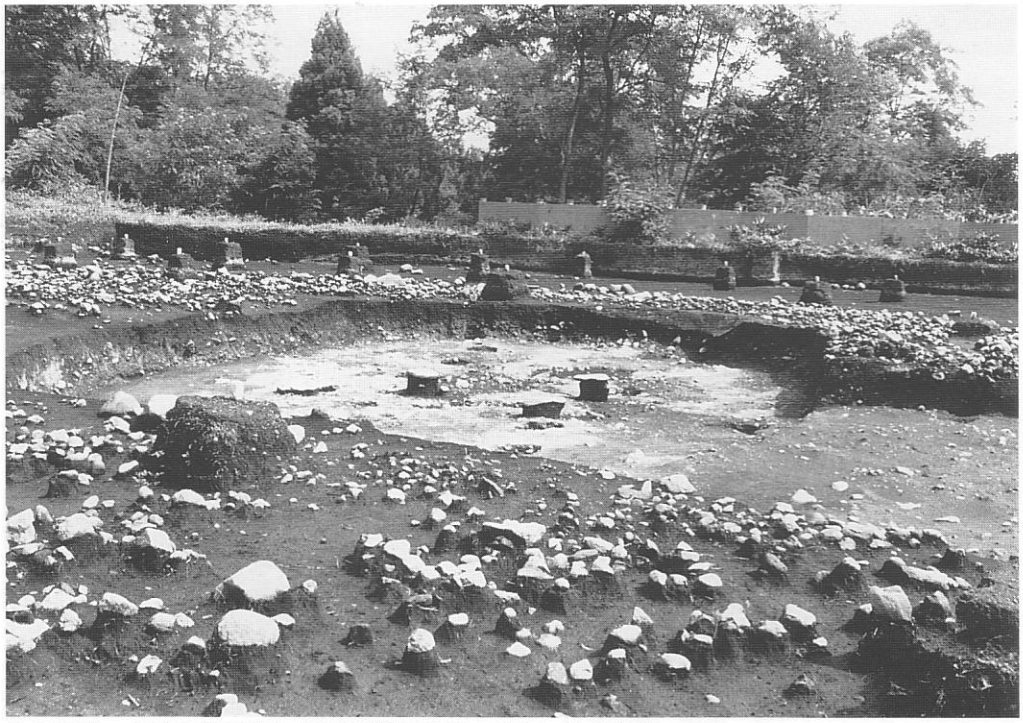
SQ146とその下の大湯浮石の状況（北▶）

ＳＩ152A・B竪穴住居跡に堆積した大湯浮石層の状況（東▶）

ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡とSQ153集石遺構の状況（西▶）

ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡　完掘（南▶）

ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡　西辺の柱穴検出状況（東▶）



ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡とSQ153集石遺構の状況（南西▶）

SQ153　集石遺構の断面状況（東▶）

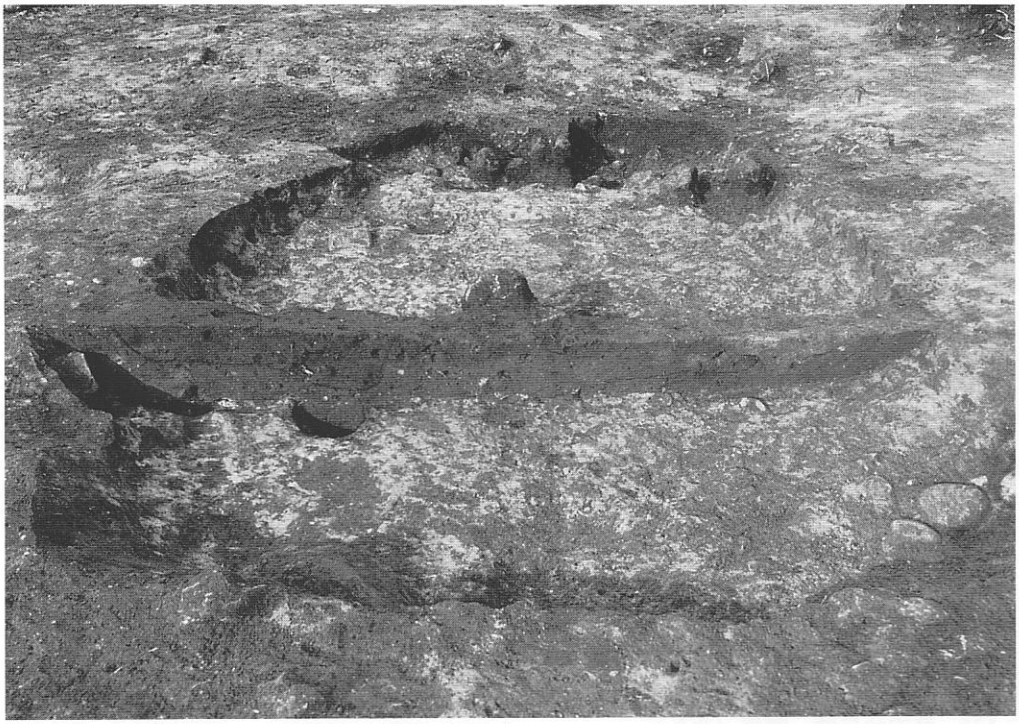
SQ153　集石遺構内の岩偶出土状況（南▶）

ＳＩ218　竪穴住居跡　完掘（上が北）

ＳＩ228　竪穴住居跡　完掘（東▶）

ＳＩ168　竪穴住居跡　完掘（北▶）

ＳＩ170　竪穴住居跡　完掘（西▶）

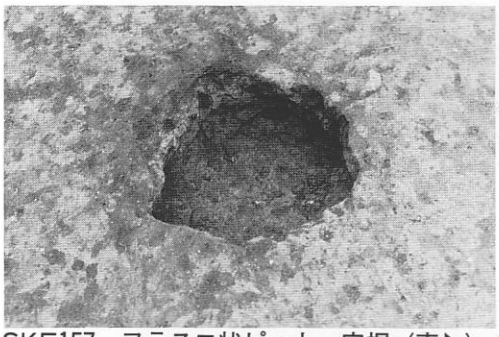


ＳＩ222　竪穴住居跡　土層断面の状況（東▶）

ＳＩ162・165　竪穴住居跡　完掘（北西▶）

SKT159　Tピット　完掘（東▶）

SKT167　Tピット　完掘（東▶）


SKF157　フラスコ状ピット　完掘（東▶）

SK239　土坑　土器出土状況（西▶）

SK168　土坑　完掘（南▶）

SR221　土器埋設遺構　半截（南西▶）

SR225　土器埋設遺構　半截（南▶）

SR226　土器埋設遺構　半截（南東▶）

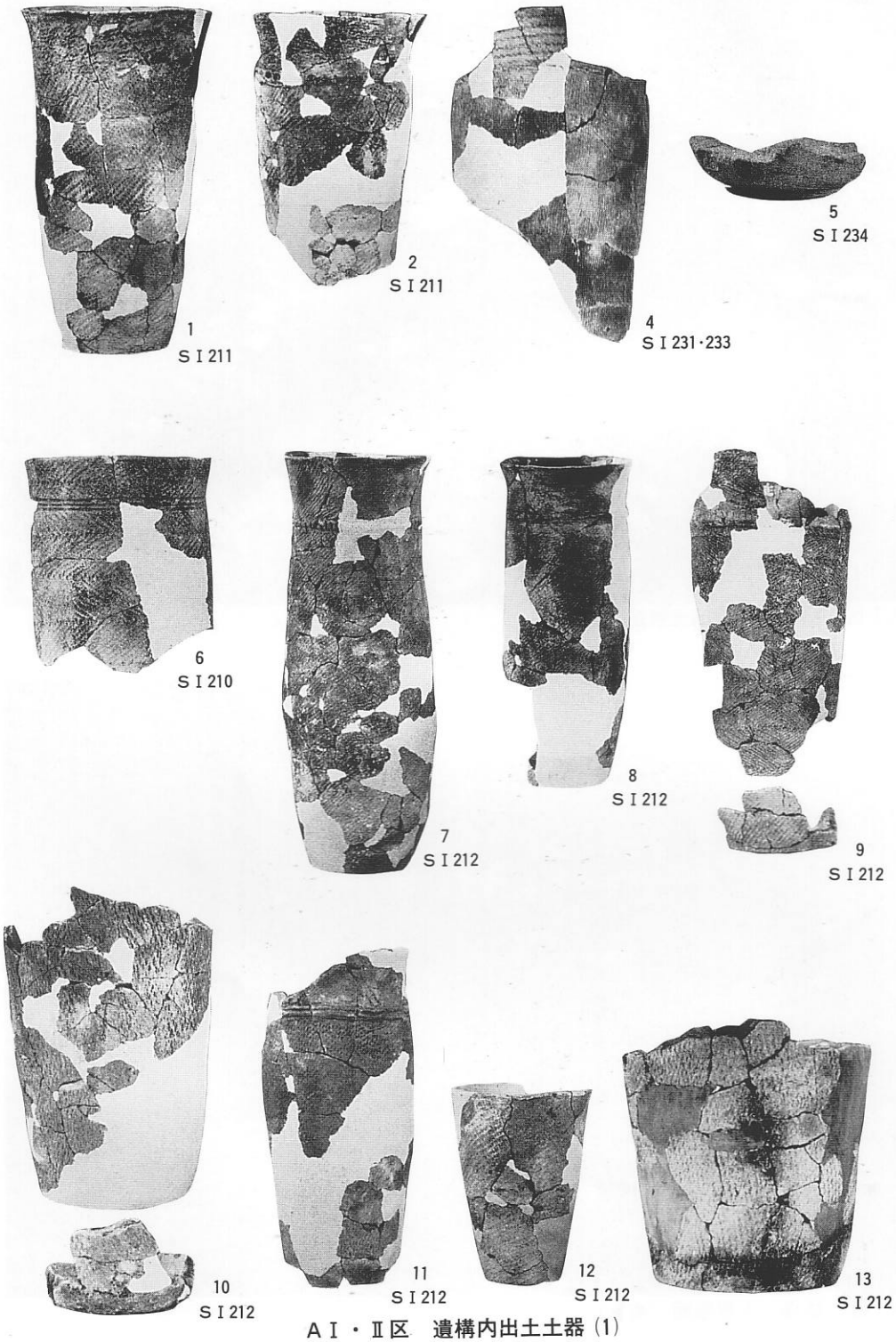
AⅠ区　捨場　調査状況（南東▶）

AⅠ区　捨場　遺物出土状況（南東▶）

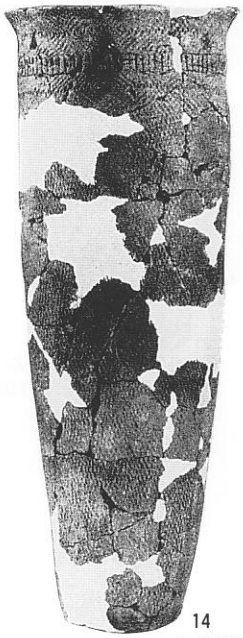
図版二三　はりま館遺跡ＡⅠ・Ⅱ区

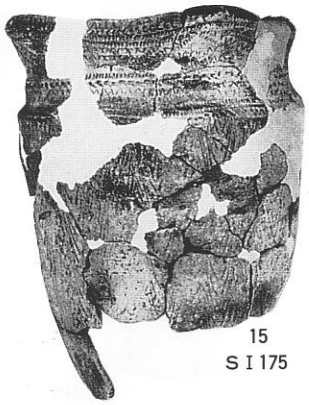
ＡⅠ区　捨場　遺物出土状況（北東▶）

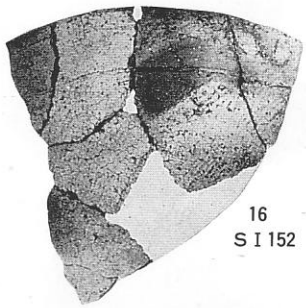
ＡⅠ区　捨場　土層断面（南▶）



AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土土器（1）


14
ＳＩ223

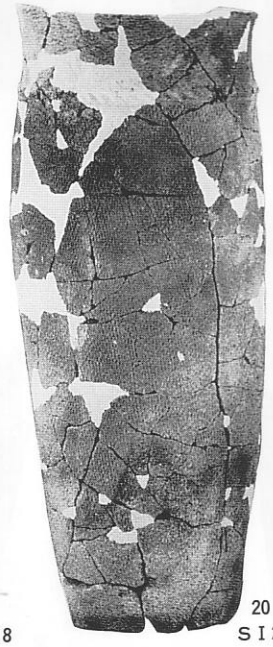

15
ＳＩ175


16
ＳＩ152

17
ＳＩ173

18
ＳＩ173

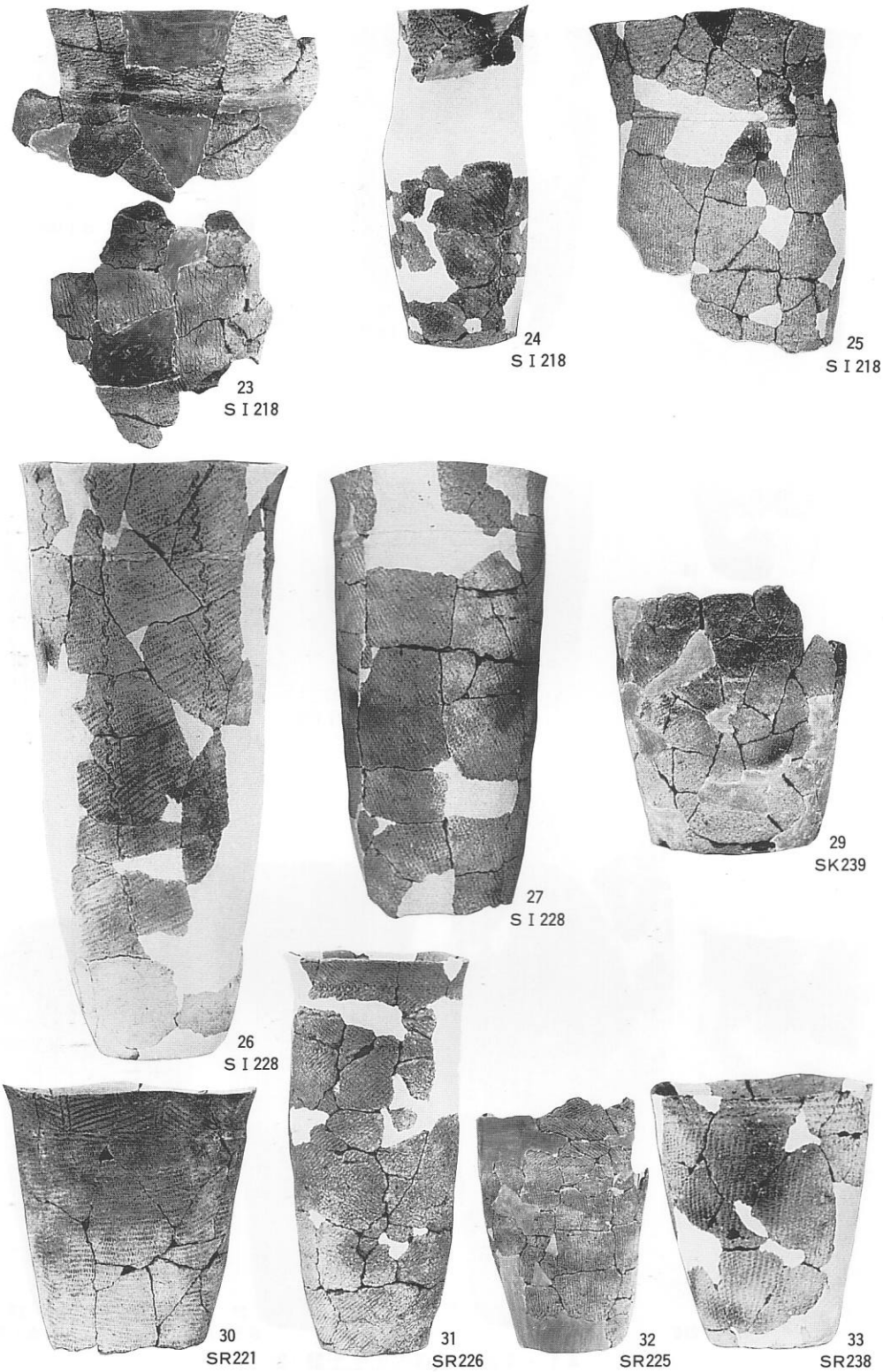
19
ＳＩ218


20
ＳＩ218

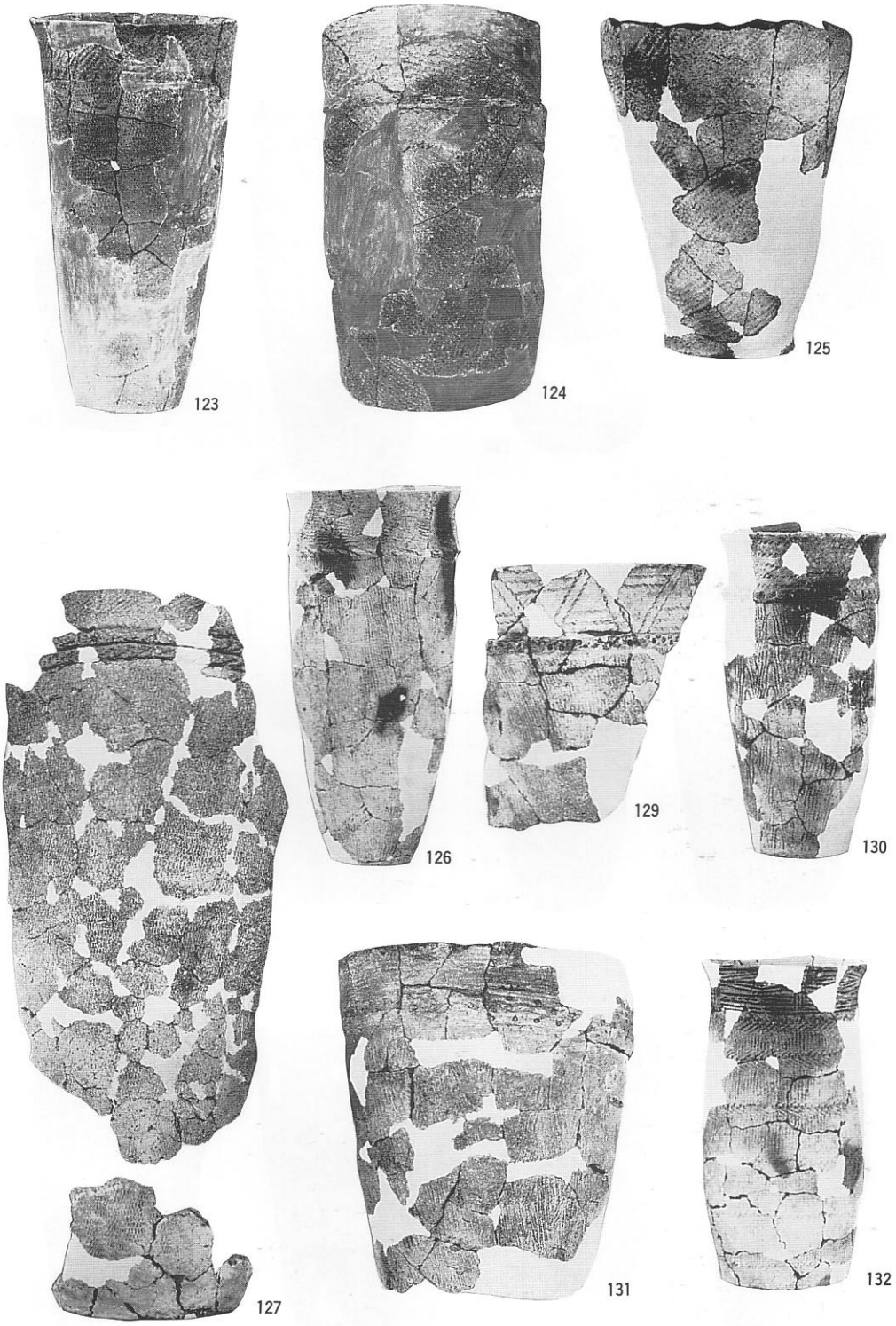
21
ＳＩ218

22
ＳＩ218

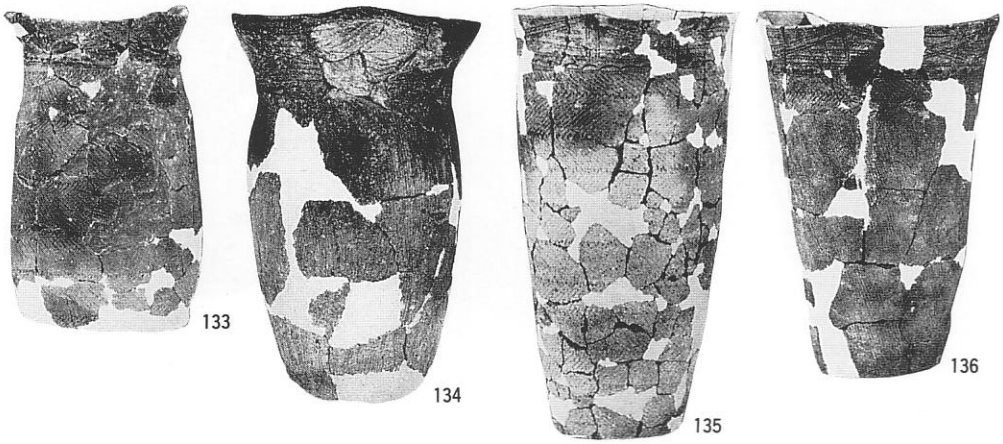
ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土土器 (2)

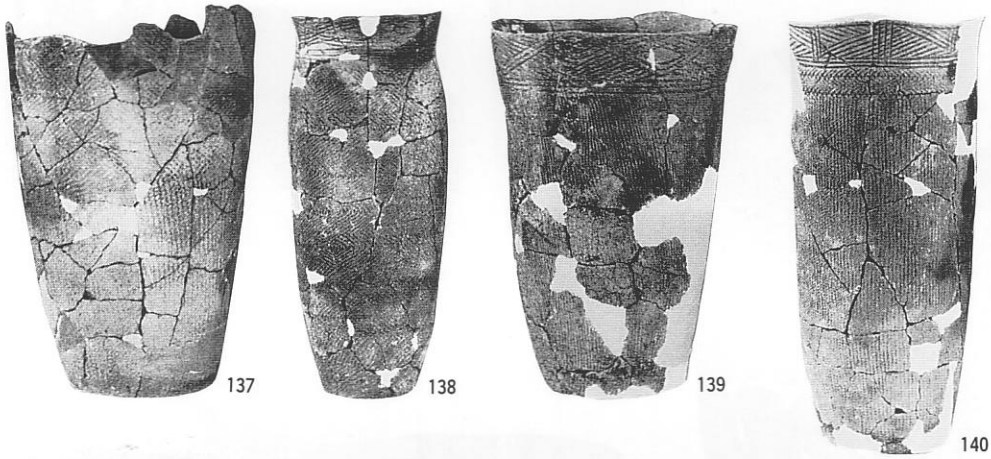


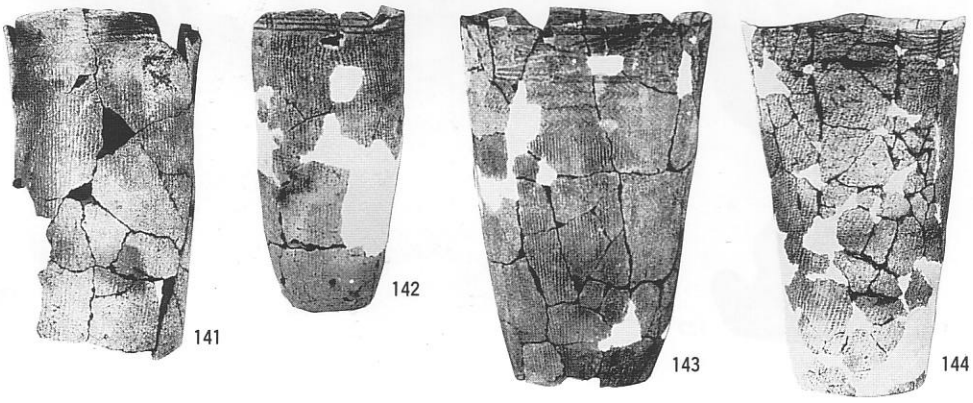
AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土土器（3）



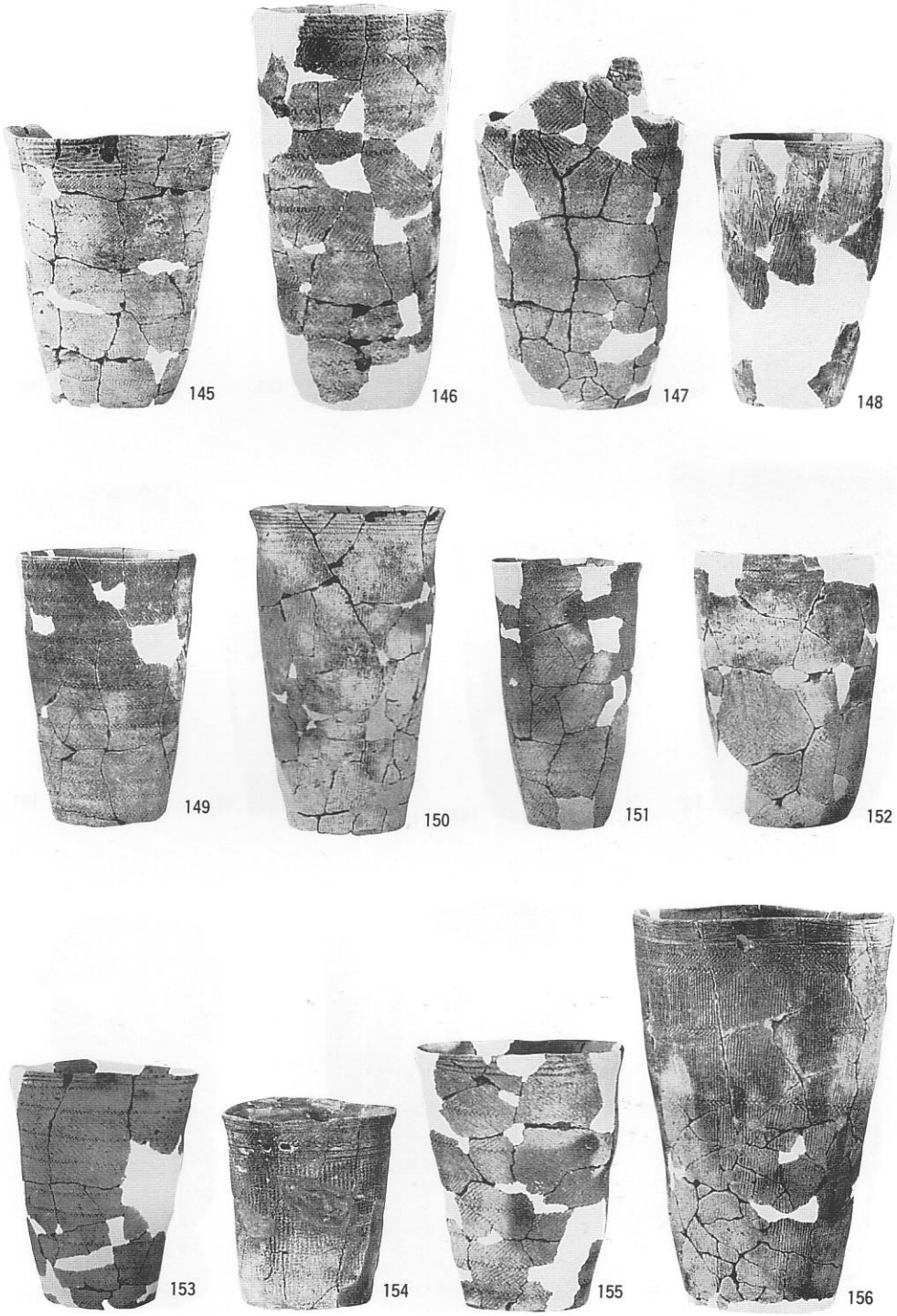
ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器（1）



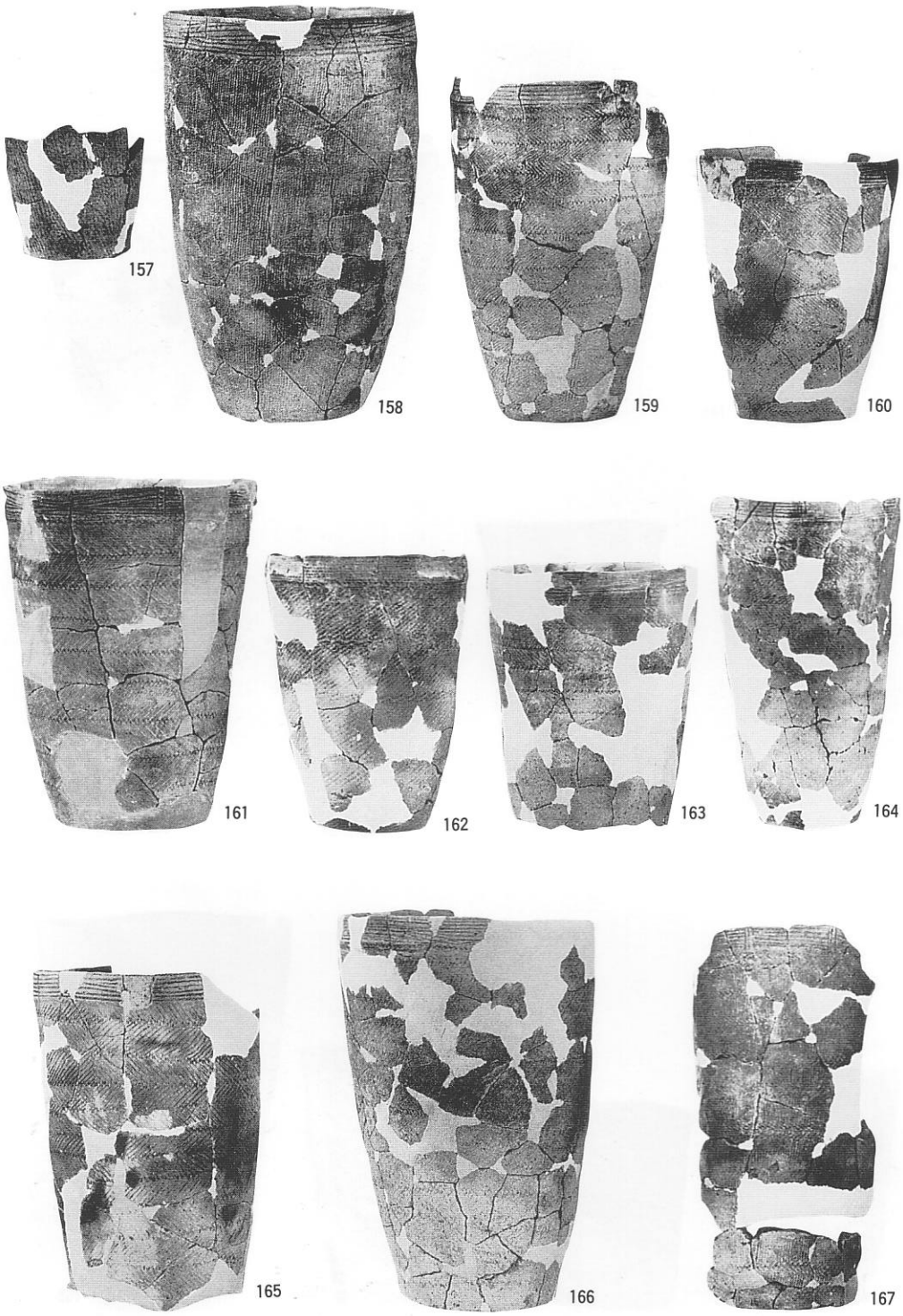




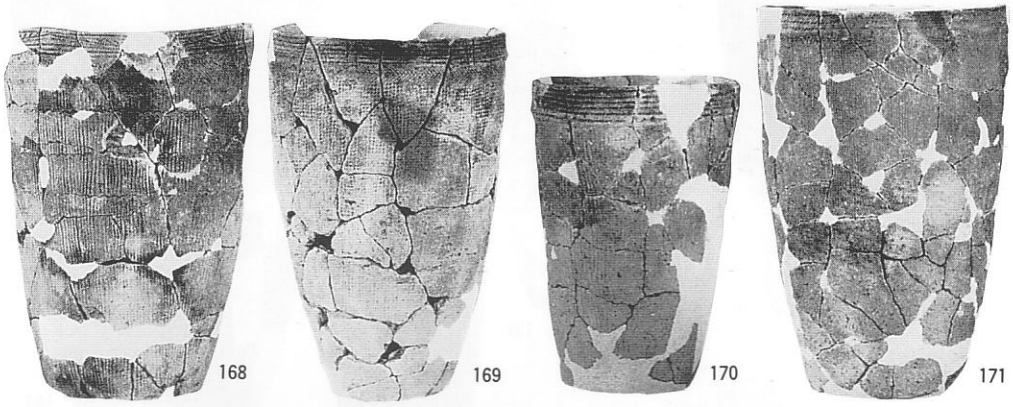
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (2)

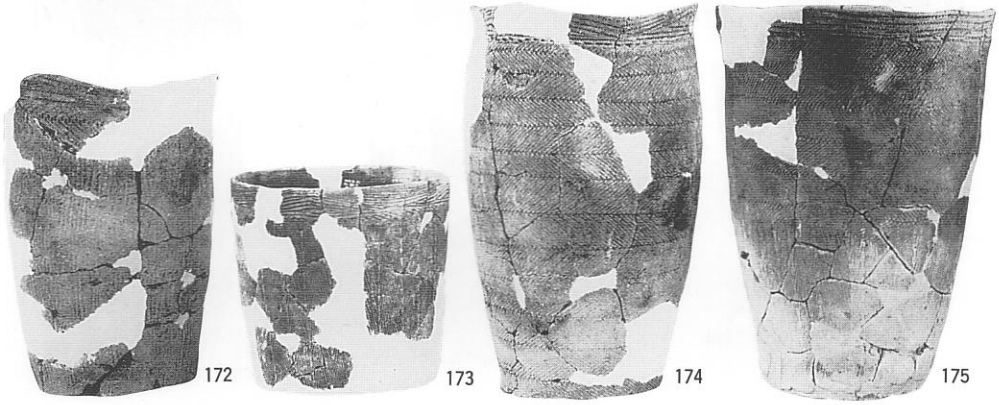


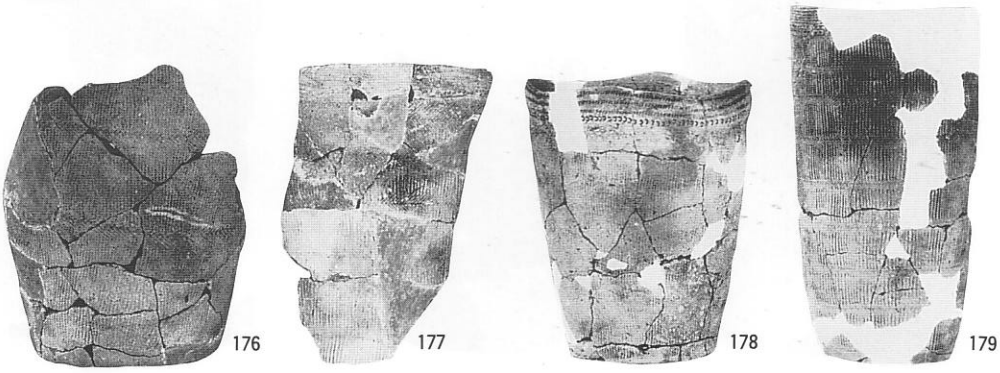
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器（3）



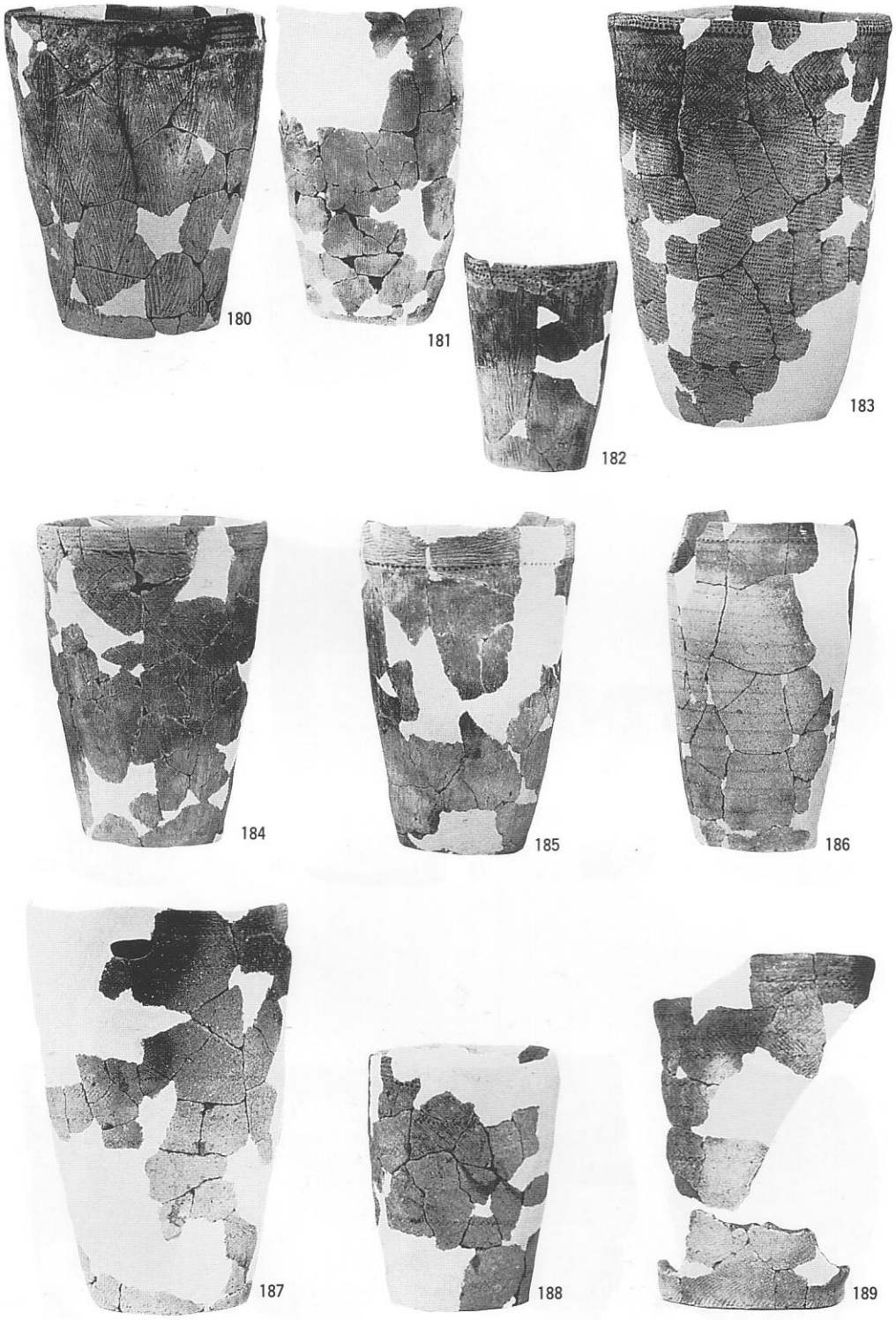
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (4)



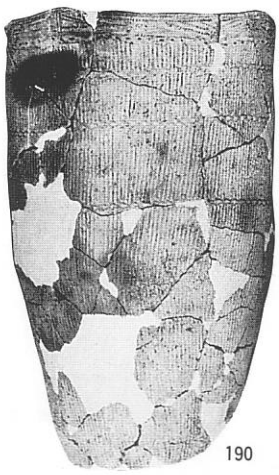




ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (5)



ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (6)

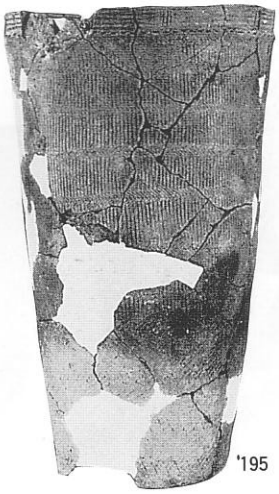

190

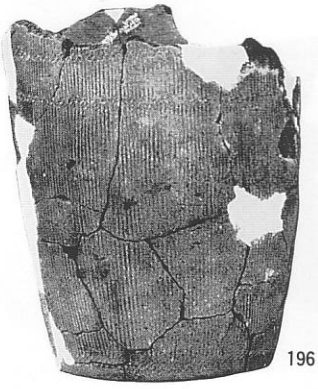
191

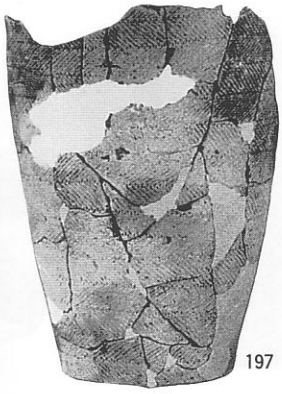
192

193

194

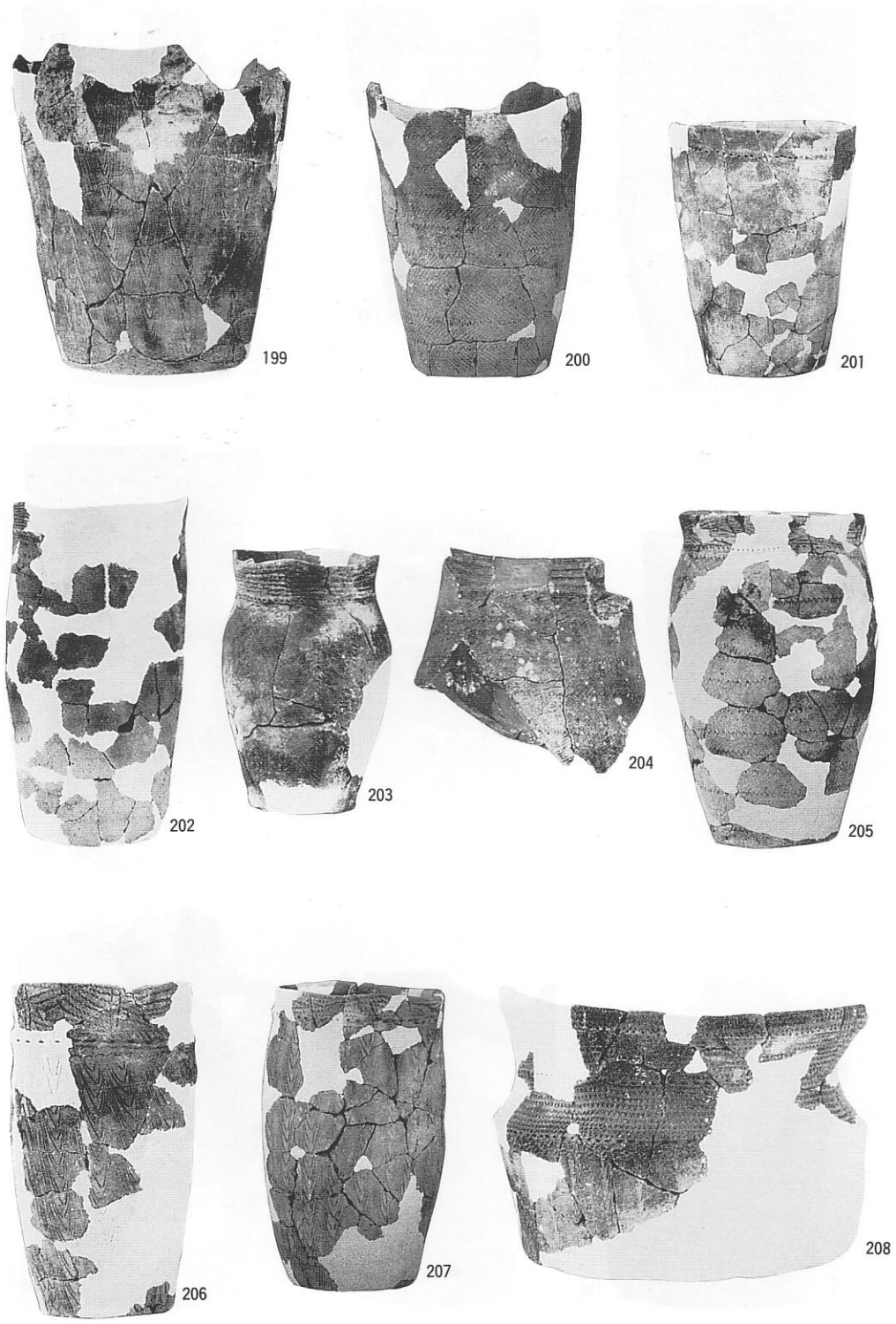

195


196

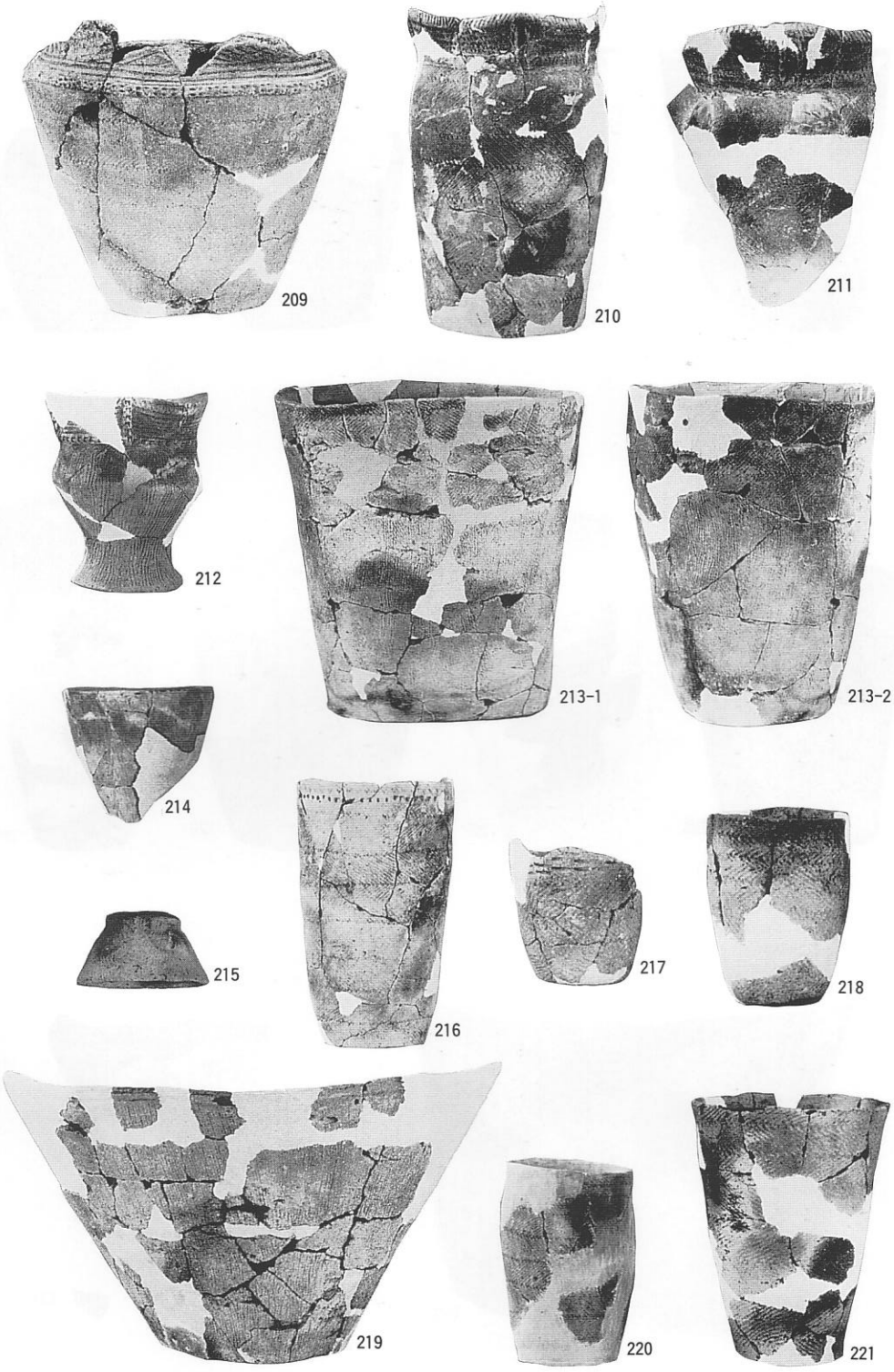

197

198

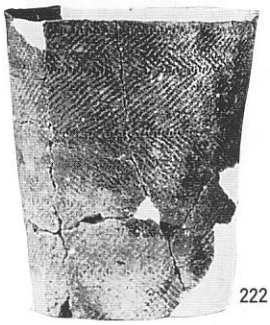
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (7)

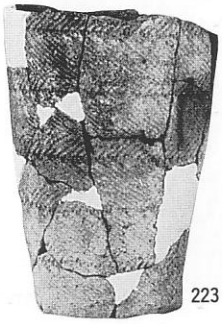


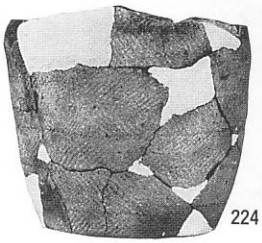
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (8)

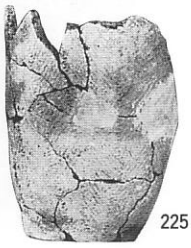


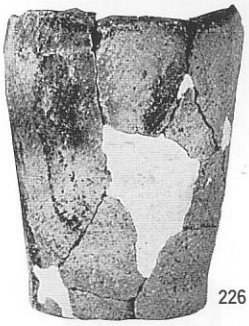
AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (9)

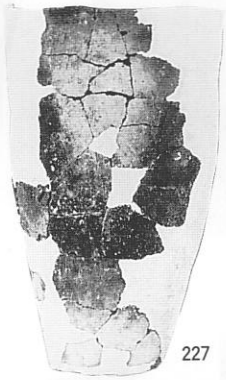

222

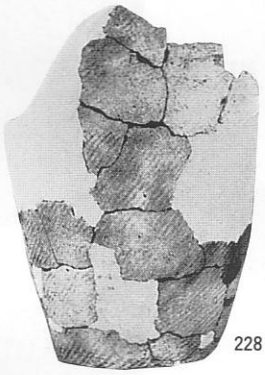

223

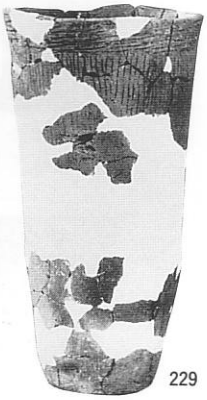

224

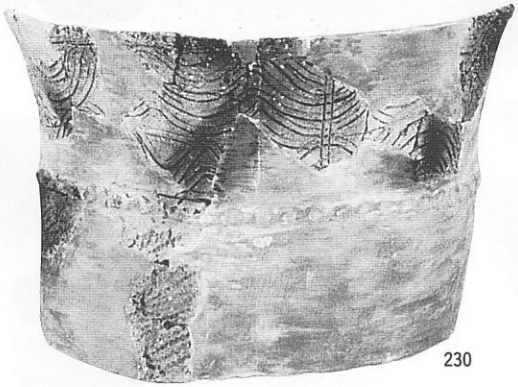

225

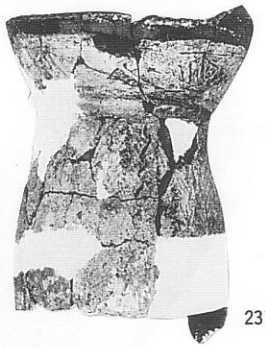

226


227

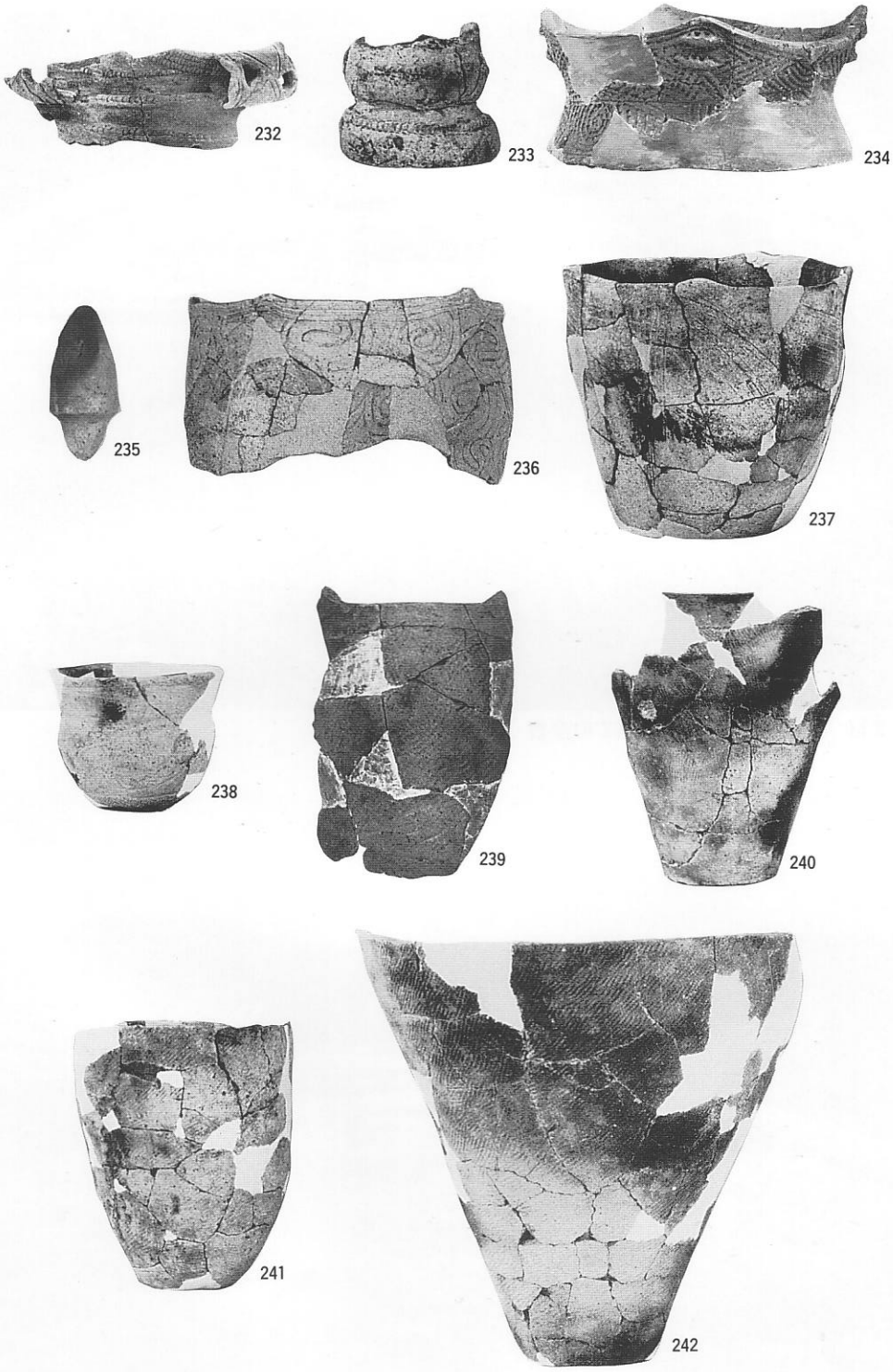

228


229


230


231

ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (10)



AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土土器 (11)